
涼宮ハルヒの担任

紘川時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの担任

【Nコード】

N3416I

【作者名】

紘 川時

【あらすじ】

佐世保市にある私立・佐世保波座阿土学園高校（通称：実業）勤務の嶋田健八が作者の代弁者として、キヨンが作者の代役・なりきりとして実話を元に周りのいろんな人物が巻き起こすドタバタを述べて行く平凡な学園コメディ。

第1話（前書き）

杉田京時です。この度機種変更して、作者認証を古い機器から新しい機器に移植できるかa u ショップの人に尋ねたところ、” わかま
りません。出来ません”との事で健八・ハルヒの第一期を終了させ、
第二期に移行する事にしました。

第1話

揉み上げがルパン三世みたくなっている前瀬は大元寺たちとトランプをしていた。

前瀬は陸上部に所属しているが、しょっちゅうサボってスクールバスで帰ってしまうらしい。

この日も部活をサボって帰るつもりでいた。

前瀬「よっしゃー」パン

大元寺「クソオーやられたあ」

仲のよかった二人だが、後にこの仲が決裂してしまうとは…

俺はスクールバスが来るのを待ちながら教室の窓から外にたそがれていた。

翌日、体育の授業があった。

「前瀬ちよつと来い」

恐い見た目とは裏腹に面白い言動が特徴的な体育教師で陸上部顧問の堤龍徳つみたつのりは俺たち生徒を並ばせてる中から前瀬を呼び出す。

「前瀬…お前昨日部活ばサボって何ばしよったとや？」

堤が前瀬を呼び出したのは実は前瀬、以前何度も事ある毎に部活をサボっており、遂に堤教師の堪忍袋の緒が切れたからである。

「…」

前瀬は堤教師に威圧されて言葉が出ない。俺たち外部から見れば尋問と言っても過言ではない。

「何ばしよったとやって！」

聞き直す堤。

「トランプしてました」

「…トランプ！？何ばそげんとは学校に持って来よつとや？」

「いやそれ俺のじゃありません」

前瀬はトランプを自分の物じゃないと主張する。

「じゃ誰んとや？」

更に堤は聞き返すと、前瀬は咄嗟に、

「大元寺のです」

これが前瀬が大元寺を裏切った瞬間だった。

「大元寺！後で職員室に来い」

と言った後、用具室からバスケットボールを入れたワゴン車を持って来、そこからボールを2、3個取り出して、

「お前のごと、簡単に部活はサボりよったっちゃ、つまらんやつか」
手に持っていたボールを壁に背中をくっ付け、体操座りして何も出来なさそうにしている前瀬に投げつけながら怒鳴り散らす。

正直言つと俺も前瀬を嫌いだ。ざま〜みる前瀬、再々度部活をサボるからこんな目に遭うんだ。

ふと振り向くと体育館を半分半分に分断させている境界の役割をしている緑の網越しに向こう側でA組とB組の女子が体育をしているのが見えた。

A組は女子が5人しか居らず、体育のとき授業にならないといった観点から、男子しか居ないC組以降の工業科（C組は自動車科【長崎県下唯一】、D・E・F組は機械科）とは違い、A組とB組は合間で体育を行う事になっている。

女子の方が一足早く授業が終わり、皆教室に帰ってる中、ハルヒは体育教師でバレー部顧問の獸形知恵美に何か話しかけてた。

*

「失礼します。あの〜堤先生いますか〜」

堤に職員室に呼ばれた大元寺。

「おう」

大元寺が来たのを確認する堤教師。

「お前は何ばトランプば持って来よっとか!」

大元寺をど突きながら言う。

「これはお前の担任の嶋田先生か田邊先生に預かってもらう。って
いっても田邊先生居らんけんが…」

堤は大元寺から取り上げたトランプを見せながら言うて立ち去る。

ボサボサ頭でズンダレた印象の2・B担任・嶋田健八は机で居眠り
していた。

何だか健八教師、俺が考えてる漫画の主人公に似てる。

「嶋田先生! 嶋田先生」

堤は健八を揺すり起こす。

「何ですか? 堤先生」フワァ

欠伸びながら尋ねる。

「2・Bの大元寺が、こんな物持って来てました」

健八にトランプを渡す。

「こないだ散々『ケータイとか不要品は持って来んな』って注意し

たとに… たくやるねえ」
健八は呆れながら言う。

*

大元寺は教室を目指して帰る廊下を歩きながら、

「…前瀬め…」カアア

前瀬に相当キレてる模様。

この日から前瀬は1人で弁当を食べるようになった。

俺は谷口と国木田、長身で茶髪でナルシが入っており、メガネかけた鉄橋弘靖と小柄でゴリラみたいな容姿、ラグビーボールみたい形した頭をした長谷川太助と5人で弁当を食べながらそう思っていた。

*

放課後、小柄でワックスヘアの小坪瑠は、前瀬が部活に行き、居なくなつたのを見計らい鉄橋とつるみ、

「前瀬つてさあ若干ナルシ入つとるよね」

前瀬の机が一番窓とロッカー寄りであり、ロッカーの上に腰を掛け、スリッパを履いたまま前瀬の机に足を置いて言った。

「瑠、何やってんだ？」

俺は聞く。

「オイ前瀬スカンさ！」

「アイツが堤にボールば投げつけられるところば見てマジざま〜みろって思った」

鉄橋も続いて言った。

「俺も同感。前瀬嫌いだから」

「そっや」

このあとも俺と瑠と鉄橋の愚痴り合いが続いた。

大元寺は帰りのスクールバスの中でべらべら喋る中、

「前瀬の奴、あがん事聞かれても『遊んでました』って言えばよか
とに、何で『トランプしてました』って言うとやって！お陰でオイ
トランプ没収されてしまったやつか。アイツオリエンテーシヨンの
ときの印象とは裏腹に結構良い奴やと思っとなに…まさか裏切
るとは…マジ死ね」

こっちも前瀬に対する愚痴を言っている。

「キヨン、遅かったわね」

団長の机に座り、足を交差させたハルヒが言う。

「ああ瑠と鉄橋と喋ってた」

「いいかハルヒ、前瀬に話しかけられてもシカトしとけ。簿記のプリント貸してって言われても絶対貸すな」

ハルヒのところに行き、前瀬とかかわり合いになるなどハルヒに忠告する俺。

「キョンくん、B組の前瀬くんがどうかしましたか？」

古泉という長身で常時異様にニコニコしている男が聞いてくる。

「どうしたもこうしたもねえよ。前瀬超ムカつくんだぜ。アイツ自分は何も出来んくせに鶏川には態度デカいからな」

「前瀬くん嫌われてるんですね」
ポカンとしながら言う。

「ちょっとキョン！いくらあんたが前瀬が嫌いだからって、私にまで前瀬をシカトしとけって言うのやめてよね！それを束縛って言うのよー！」

ハルヒは激昂した。

膝に手を着いてパイプ椅子に座っている小柄で栗色の髪でロングヘアーでお人形みたいに愛らしい朝比奈みくる。

そんな朝比奈さんを背景に今まで読書に励んでいた紫髪でショートヘアで無表情な少女、長門有希が、

「前瀬飛鳥。11月26日生まれ。長崎県東彼杵町（通称：彼杵）在住。彼杵小を経て彼杵中を卒業。中学時代はサッカー部に所属。キツイ上に帰りが遅くなるのに嫌気が差し、高校に入ったら帰宅で貰く筈だったらしいけど、親に無理矢理陸上部に入れさせられた。ご存知の通りアイツは授業中寝てばかり居る。多分それは薬ばかり飲んでるからその副作用だと思われる」

前瀬の情報を語る長門。

「お前よくそんな事知つとるなあ」

「嫌でも。勝手に入って来る」

読んでいた本を閉じて言った。

いつも長門が本を閉じた音を合図に帰るので、各自通学鞆を脇に挟んだり手に持ったりして順次部室を退去する。最後尾だった俺が電気のスイッチをOFFにした。

第2話

日曜日なのに学校って面倒くせえな。

何があるのかとういうと簿記の検定試験である。

ハルヒは高1の9月に3級、続いて1月に2級に受かり、高2の6月に1級を受験したが、あまりにも難しかったらしく、落ちている。1級はあの化け物な位成績優秀のハルヒでさえも難し過ぎて受からなかったので誰1人として持っていない。

この日も俺はお調子者で成績が悪い谷口と成績優秀で谷口と比べると数倍真面目な国木田の3人で来た。

今回のメイン人物は簿記2級持つてるヤツに会計簿記を教えている商業教師で容姿はメガネかけてメタボの佐藤之繁^{さとうゆきしげ}。言動が大元寺に似てて面白い。このときの服装は『あなたとは違うんです』という名言を言う福田元総理が真ん中に描かれたTシャツ、下は普通の短パンだった。

っておい！なんちゅうTシャツ来てるんだ！あんた物好きだな。感心するぞ

簿記の問題集の束を脇に抱えて2・Bにやって来た佐藤教師は教卓に立ち、

「それにしても大元寺、お前平成生まれなのに昭和の人みたいやな。来なかったら0点やから。でも桜下は来ても0点やから。小坪……」

早岐のズンダレとベラベラ喋り、大元寺の腹をつまんで大元寺が

「ああクソオ」

佐藤の腹をつまもつとしたが、呆気なく逃げられてしまう。

佐藤「ええもうすぐ時間なのでそろそろ始めたいと思います。

制限時間は、90分です…はじめ！」

腕時計を見ながら合図をかける。

いよいよ始まった。簿記が苦手な俺は問題用紙を見ても全く分からなかった。

ハルヒはというと…

いつもはストレートヘアにしてる髪をポニーテールにしており、息をするよりも簡単そうにスラスラ書いていた。

谷口は前述の通りアホなので、試験開始から僅か5分程度で挫折し、居眠りし出す。

反面国木田は同じく前述の通り真面目な性格なので昨夜徹夜で勉強してたらしいので簡単そうにスラスラ書いている。

教室の出入口の扉が開く。やせ形で古泉と良い勝負ではないかと言うほどなかなかの美少年だが奇妙な行動と、大元寺ほどではないがサボり癖が付いているのがたまに傷の藁元憲五郎が遅れて来る。

古泉のクラスは普通科のA組であり簿記検定は関係ないので来ていない。

小坪や大元寺も藁元はサボるだろうと思ってたみたいなので、多少驚いてる様子だ。

「藁元、はいこれ」

佐藤が藁元に簿記の答案用紙を渡し、藁元も書き始める。

「キョン、ちょっといいか？」

試験中不正行為がないか徘徊してる最中に俺の机の前でしゃがんで俺に話しかけてる佐藤。

誰からも本名で呼ばれる事がない可哀想な俺。

「オオモトデラ（大元寺）の右ちゃんに気付かれないように近づくから音を立てたりするんじゃないぞ。にしても全然書いてないやんガンバレ」

ヒソヒソと言ひ残し、佐藤は大元寺の所に忍者みたいに抜き足差し足忍び足で近づいて行き、

「うわぁービックリした」

「ハハハ、面白い」

いきなりちよっかいを出され、驚く大元寺と彼の面白さに感心する

佐藤。

大人気無い事はやめましょう佐藤先生。

他の生徒の迷惑です。

多分ハルヒや谷口、国木田、他の連中も同じく佐藤と大元寺のいじり合いを見て笑いそうになったのを試験中だったから必死で堪えてただろう。

基本いつも無表情な長門でさえもあまりにもおかしかったので今にも吹き出し笑いしそうにしていた。

と言いつつも正直俺も面白いと思っていたから、この静まりかえった中必死吹き出し笑いを我慢していた。

ウームわからん。どうやら俺は簿記は苦手だ。絶対受からない。受かる気も無いけど。でも進学するにしても就職するにしても商業科を出てるんだったら簿記2級や1級を持ってなければならぬという固定概念があるからな。もし可能ならばそういつた固定概念は取り払いたい。

「やめっ！後ろから集めてください」

時間切れの合図を佐藤が腕時計を見ながらする。

わかったのは仕訳問題ぐらいで売上帳も貸し借り対照表も全て適当に書いた。

一番後ろの列の机に座っていた大元寺が前の席の連中の答案用紙を回収して、教卓の所で綺麗に整え、佐藤に渡す。

「あの先生、伝票がわかりません」

分からなかった問題について相談する大元寺。

すると佐藤はその大元寺が分からなかった部分を説明するも、俺にとって難しい詞ばかりだったから、さっぱり訳分からなかった。

通学鞆に荷物を入れ、帰ろうとしてるハルヒに話しかける。

「簿記出来たか？」

「はあ？1+1=2みたいに簡単よあんなの」

ハルヒらしい。

同じく長門も通学鞆を手に持ち、帰ろうとしていた。相変わらず無表情である。

それにしても佐藤は人気者だ。2・Bの複数の連中に囲まれている。

その中に居た谷口や小坪、バレー部に所属し小柄でショートヘアの柳橋に至っては佐藤にくだらない話をしているのであった。

俺は国木田と階段の所で谷口を待っていた。

国木田と谷口の3人で食堂（通称：学食）の裏にある自販機に行き、紙コップのコーヒーを飲んだ後、帰ろうとしたとき、今から今から簿記検定だという朝比奈さんと玄関で会った。

「今から検定ですか？」

「…はい」

恥ずかしそうにしながらも朗らかに返してくれた。

「キョン、さっきの背がちっちゃい娘可愛かったよな。もしかしてお前、あの娘狙ってるだろ？」

凶星だ。俺は顔を真っ赤にしながら

「ちっ違う！何言ってるんだ！変な事聞くな」

それはそうと階段の方から騒がしい声が聞こえて来る。大元寺と末遠と坊主頭で韓国人みたいな容姿で陸上部に所属する西原壮一郎と訳のわからない事で盛り上がったのだった。

「ジリリリリ5時55分5時55分」

ハイテンションの勢いでフジの朝の情報番組『めざましテレビ』のめざましくん？という目覚まし時計をモチーフにしたマスコットキヤラクターが左上の時刻表示を指差し時刻を告知する真似をしていた大元寺。

それに西原も末遠もノリノリである。

因みにめざましテレビは5：25開始なのに何故5：55なのかというと長崎のネット局・KTNテレビ長崎が5：55飛び乗りであるため。

ほんとアイツ（大元寺）はハイテンションだと騒がしいな。

第3話：恐い体育教師が急に何も言わなくなり優しくなると逆に怖い

かつてはヤンキーだったと言われてる堤教師。

堤「忘れ物いらっしやい」

発音が『新婚さんいらっしやい』に似てると思うのは俺だけかな!?

面白いな全く。

体育の授業で、準備体操の後、忘れ物チェックを行うのが恒例だ。

実際に忘れ物をした者は彼に拳骨か面パッチン（両手ビンタのこと）を喰らうか乳首をつねられる。

「何やこのツンツル頭は両岡。ハイ」パッチン

特に2・Bいちの馬鹿で長身で天パの両岡将人。

両岡は毎回体育のとき、体育館シューズを忘れて堤教師から面パッチンを喰らう。

番長気取りでキレると半端無いくらい恐いといった典型的なヤンキーの山口啓文も同様だ。

「こないだあれだけ言ったのに体育館シューズ忘れて。しかも何やこの髪は」ゴッソ

堤は啓文が体育館シューズを忘れた+ダメと言われてるのに友達のは体操服を着て来たというので拳骨という鉄槌を下す。

「イッター」イテテテ

両手で頭を抑えながら言う。

相当痛いらしい。

E組の米田が体育祭の練習の前、下駄箱は土足厳禁なのにそこで靴を履き、それを運悪く堤に目撃され、面パツチンを喰らっている。

他にもとある生徒が堤に

「おい！お前何ば先生に反抗しよつとや」

と自称権力者気取りで責められていた。

そんなヤツなのだがある日、

「桜下」

またしても授業中至らん事をしていた桜下は堤に怒られてど突かれようとしたが、

「元気が一番ぞ」

桜下の肩に手を置き、優しい口調で言った。

恐くてうるさく迫力がある堤が…どういう事だ！

*

まさかハルヒが関係しているんじゃないかと思い、長門に相談した。

「長門、体育の堤が変なんだ」

「変？」

と聞き返して来る。

「恐い印象ながらも面白いつていうので威圧しているアイツなのに急に優しくなってしまうたどころか言動も面白くなっちゃったし」

「確かにおかしいですね。堤先生いつもと違って何も言いませんでした。何かあの人らしくありません」

古泉を含むF組の連中も体育のとき堤の異変に戸惑っていた模様だ。

「さつき田邊に用があったから職員室に行くと、異様に田邊やその他堤と親しかった先生たちが騒がしかった。それも…堤が教師を辞めると言い出したから。今回はアイツ自身の問題だからハルヒは関係ない」

衝撃の事実を語った長門。

「ええ！何だと！」

それを聞いた俺は驚きを隠せなかった。

部室の出入口の扉が開く。通学鞆を片手に持ったハルヒだった。

「キョン、あんた何やってんの？それとホームページ更新した？」

そんな事聞いてくるのも無理はない。俺は堤教師辞職騒ぎで頭がいっぱいで、無意識に変なポーズをとっていた。それとホームページの更新をすっかり忘れていたのをハルヒに聞かれて思い出し、

「いや、大変なんだ、堤が辞めるって今さっき長門から聞いてビックリしてたんだよ。てかハルヒも今まで何やってたんだ？部長がクラブに遅れて来るなんて何事だよ」

「はあ？私にだって色々あるの」

遅れてゴメンと謝るところか悪びれる様子は全くない。

「それより堤が辞めるなんて一大事だわ！そんな事絶対させない！」
再び部室を後にするハルヒ。

つてまさかあの女…何を企んでんだ…嫌な予感が…

俺はSOS団のホムペを更新すべく、パソコンの電源を点けながら感じた。

* 続く *

第4話：堤が教師を辞める!?

「先生、何で辞めちゃうんですか？」

堤が急に教師を辞職すると切り出し、驚きをかくせないで居る健八が聞くと、

「翌々考えたらオイにはこがん仕事向いとらんって思ってな」

いろんな教科書や本で散乱してる自分の机の椅子に座り、能天気口調で言う。

「先生！いきなりそんな事言われても、先生の後釜に当たる体育教師はどうするんですか？」

茶髪混じりでツインテールで派手な印象の美女であり英語教師の豊嶋茜（それにしてもこの人俺が考えた漫画のヒロインに似てる）も堤が辞職すると聞いて事情を尋ねた。

「そいも大丈夫。オイの知り合いの高校の体育教師志望のヤツを後釜に用意しとっけんが」

後釜が居るからと言う始末。おいおいやっとなんかに馴染めたと思つたのに、

「堤先生！辞めるなんてどういう事ですか!?!聞いてないわよ」

職員室に乗り込んで来たハルヒ。

「涼宮」

「教師の地位を失わないでください」

熱血に堤に語りかける。

「別そういう訳じゃなかけど」

堤が言うと、

「何強がってるの！こんな夢がある仕事をそう簡単に辞めようとする訳？私なら定年するまで辞めないって思っけど」

「オイには向いてなかったとってこの仕事」

何か元気なさそうに言った。

「先生、自分にウソついてない？」

ハルヒの言った通りかもしれない。堤は自分にウソをついていると思う。

「何やってんの？」

ハルヒの背後から聞いて来たのは若干ロングヘアースタイルの良い美女であり養護教諭の高地果林（俺が考えたもう1人のヒロインに似てる）。保健室から職員室に戻って来たところだったらしい。

「堤が教師を辞めるって言ってるの」

「ウソ…まさか今堤先生が書いてるのって…」

高地が指差す。

その指差す方向にハルヒは振り向くと、堤が辞表らしきものを書いていた。

*

翌朝、俺はいつものようにスクールバスに乗り実業へと続く傾斜は緩いけどカーブが多い坂を登り、校門の前でバスを降り、教室へと辿り着く。

長崎県川棚町からここまで約1時間かかる為にどうしても疲れて寝てしまい、学校に着いてから寝足りず俺が机で居眠りをしてるところに谷口が話しかけてきた。

「にしても何で後から転校して来た奴は全部A組に行っちゃうなんてさ」

実はそれ、俺も疑問に思ってた事だ。

「多分転校生は普通科しか選択出来ないシステムになってんだろ」

机に肘をつき、顎と頬を手で支えながら俺は言う。

「なるほど。それもあり得る」

谷口が俺の前の机を借りて椅子に座って言った。

昼休み、A組の教室の前に人がいっぱい居る。

何があったのか俺は人混みをかぎ分けて行った。

またしても…

* つづく *

第5話：アンドロイドと地位を失った教師

またしてもくだらない事に、啓文の暴力沙汰だった。

「おいお前！オイが黙っとつたら調子に乗りやがって」

とある少年の喉を掴み、壁に押し付けて怒鳴っている。

「啓文が俺たちに迷惑かけるからだろ」

「黙れ！」

啓文が少年を殴ろうとした。

すると少年は手で啓文の拳を受け止め、もう片方の手をグーにし、啓文の腹を思いつきり殴る。

啓文はよろけ、スキを見た少年は何発も啓文をボコボコ殴り蹴りしていた。

気付けば誰よりも喧嘩が強い筈の山口啓文は床に瀕死状態になり倒れていた。

「ん？お前は…どっかで…」

「はあ？どづい事だ！」

「初めて会った気がしないんだ」コイツもまさか…未来人が異星人じゃ…？

「それにしてもすごいな…お前が殴り倒したの、周りから恐れられるほどのヤンキーなんだぞ」

「そうか。でも俺にとってこんな奴屁でも糞でもない」

何だって！コイツ啓文でさえも歯が立たない位強いとは…恐るべし！

「宮本、さつき啓文と何モメてたんだ？」

改めて訊いた。

「何で俺の名前を知ってる？」

名乗った憶えのない初対面の奴にいきなり名前で呼ばれたので当然訊き返して来た。

「さつきお前が、啓文に『宮本』って呼ばれてたのを聞いてたから」

「そうね。それがよ…」

* (回想) *

昨日の部活のときの話である。

カラフルなユニフォームを身を包み、グラウンドの向かい側でラグビー部や陸上部が練習してる中、練習に励んでいるサッカー部員たち。

その中に啓文や宮本も居る。

「じゃオイ帰るバイ後はよろしく」

部活が終わり、友達数人？と帰って行った啓文。

「山口は？」

「帰ったバイ」

「アイツまた後片付けしないで帰りやがった」

そんな啓文にうんざりしている宮本。

そしてその翌日にあたる今日、啓文が21Aに遊びに来た。

「山口。」

啓文に怒り口調で声をかける宮本。

「お前なあ部活の後、ちゃんと後片付けして帰れよ。」

部室が散乱してたから、中に入って片付けようとした訳。それがよく見たら散らかったのは殆ど山口の荷物だったじゃないか。掃除のときはお前何もしないで喋ってばかり」

宮本は部活の事で啓文に色々と上記の台詞の他にも諸々ダメ出しを言った。

「おいてめえ！オイが黙つとつたら調子に乗りやがって」

＊＊

「なるほど」

あんな喧嘩っ早い奴とはあまりかかわり合いにならない方が良くも。

「あなたは涼宮ハルヒに選ばれし人間だ」

「は？何だいきなりめえまさか…！？」

「そう。俺はアンドロイド。宮本勇氣というのは地球上での仮の名で、本名はT-WX。涼宮ハルヒの監視の為に地球に派遣されたんだ」

やはり予想した通り…

キョン「にしても何か人間がみんな窓に集中してるぞ」

宮本「ああそつえば」

気になったので、俺と宮本は窓から下を覗いた。

「堤先生！はやまらないでください！」

どうやら堤教師が何らかの理由で地位を失い、屋上から飛び降り自殺を謀ろうとしてるらしい。

「堤の奴…！止めに行くぞ！」

俺は堤の自殺を阻止すべく屋上を目指して一直線に廊下を走って行った。

屋上は普段閉鎖され、施錠された扉で隔ててあるのが、20〜30度程度の角度で開きっ放しである。

俺は何の躊躇いもなく屋上へと続く階段を上って行き、屋上に出ると今まさに堤が飛び降りようとしていた。

キヨン「堤先生！」

宮本「自殺なんてバカなマネは止してください！」

俺は堤の胴体にしがみ着いて言った。

「ん？何や…」

俺の事苗字で呼んでる堤は俺の名前を言おうとした瞬間風が吹き、ゴミが堤の目に入ったらしい。

「何やわい（お前）は。生徒は勝手にこがんとこ入ったらダメやろうもん。あー最後に会話ば交わしたとはお前になってしもうたな…よかけん放せ。オイは死ぬ」

堤が落ち着いた口調で言った。

「おーい！堤先生！何やってんですか！辞めると言ったのはこれが

目当てだったんですか。自ら命を絶つなんてダメです。生きとったらきつと良いことがありますよ」

「キヨン、お前いきなり『堤の自殺を止めなきゃ』つつって飛び出して行ったからまさかと思って来てみたらやっぱり…」

今度は誰が来たのか振り向いた。宮本と健八だった。

キヨン「健八先生と宮本」

俺は言う。

「さつきオイが理事長に無理言って先生の辞表は取り消してもらいました。体育教師といたら恐くて暑苦しいって定着してますけどあんたは恐いけど暑苦しい印象じゃなくてとにかく面白い。そんな人ば辞めさせるなんてもつたない」

「お前…スマンばってん…もうダメとって」

堤はそう言い残し飛び降りる。

すると健八が落ちようとした堤の手を掴む。

俺と宮本はこのとき健八の片足ずつを、落ちないように持っていた。「先生、あんた陸上部の奴らからは陰で色々愚痴は言われながらも慕われるんですよ。誰っっちゃ地位を失う事だってあります。それくらいで死ぬなんて言ってたんじゃ世界中死体の山っすよ。たまには童心に帰っても良いんですよ」

堤を慰めるように言い聞かせる健八。

健八・キヨン・宮本によって元の場所に引き上げられた堤は

「ゴメンな。色々と迷惑かけて。健八先生、授業はよかど？そいと宮本と…」

「あつ！いけねえ。お前ら早くそれぞれ自分の教室戻れ」

堤が俺の名前を言おうとした途端健八が言葉を発す。

そして健八の姿は校舎の中に消えて行った。

堤はその後元に戻り、

「忘れ物いらっしやい。今日は胸キユン」

胸キユンとは…相手の乳首を思いつきりねずむ事。

両岡や啓文、A組のやせ形で結構かつこよくお調子者で陸上部長距離の宮内将弘はもういつもである。

いずれも忘れたのは体育館シューズだ。

「はい両岡！」「ギユユ

「いったあー」

「ギユユ」

宮内「うわあ」

「ギユユ」

啓文「いったあー」

体育の準備運動の後の忘れ物チェックは凄まじい悲鳴のオンパレードである。

あの人容赦ないなあまったく。地位を取り戻してくれたは良いけどほんとに良かったのか疑問に思うほどだ。

キョン妹「へエ〜そんな事があつたんだあ〜」

猫にモグモグしながら言う妹。

俺は妹にも堤教師辞職騒ぎと自殺未遂エピソードを聞かせたのであった。

第6話：体育祭

この度実業は体育祭で『がんばらんば体操』という長崎県民体操を踊る事となった。

インストラクターに指導してもらったり、実際に曲を再生して、曲のリズムに合わせてリハーサルを行うのだが、何人かコツを掴んだ奴は居たのだが俺は全くわからない。

休憩に入り全校生徒は皆グラウンドの地べたに座る。

俺の隣には小柄で若干不良っぽい末林圭祐が座っていたが、いきなり立ち上がったのでビックリした。

末さんは2 - Bの隣に並んで座っていた3年の所へ行き、とある少年の腕に肘落としをする。

「うわあ何や！？やめろって」末さんは聞く耳を持たない。

更に末さんは肘落としを喰らわした奴の後ろに居た日焼けしてがっしりした少年にも噛み付く。

末さんの後ろに居た末遠尚太も、

「末林、やめろ」

呆れながら言う。

谷口「困ったもんだなあ末林には」

国木田「なんでも末さん、砂利をなげられてからキレたらしいよ」
谷口も呆れ果てて、国木田も呆れながらそこからへんに落ちて砂に紛れ込んでいた小さな石を持って説明する。

末さんに噛み付かれた先輩はかなり喧嘩が強いらしく抵抗し、末さんを元の場所へ戻す。

「末さん、そんなすぐキレて暴れるの辞めよう」

末さんに言い聞かせる俺。

「うっさかぞキョン。お前末さんが暴れよる所ば見て爆笑しよったやっか」

バレたか。

そう言って来たのは瑠だった。

意外と見られてるモノなんだなあ（笑）。
組体操、俺は2人ペアは鉄橋と組む事になった。

俺は鉄橋よりも軽いから俺が土台に廻った。

下から土台が腕を伸ばして支え、主体が倒立してでんぐり返しをするヤツがあるのだが、俺たちはそれがどうしても出来ず先輩や先生に手伝って貰う事になった。

面白い事にその時鉄橋が倒立しようとして、鉄橋のパンツが脱げそうになった。俺は思わず笑ってしまった。

すると補助に付いていた先生に、

「笑うな」

注意されてしまった。

それでも笑いが止まらない。

次は殴られると思えば死で笑いを噛み殺したものの、またしても末さんが、

「何するんだあこのブタ」うあああん

泣きながら暴れていた。

3年の先輩にキレてるらしい。

そして末さんのペアに補助に付いてた先生が2、3人がかりで鼻水垂らして泣いている末さんの腕を捕まえて校舎側のテントに連れて行ったのだった。

体育祭の組体操の練習が終わり、堤の話が始まった。

そんな中、桜下と啓文が喋っていた。

こえが大きかったから運悪く堤にバレ、

「誰かそこは！」

堤が怒りながら桜下・啓文・茶髪でチャラチャラした石山田光汰

の所へ行き、

「舐めとつとか！お前たちは！！」パーンパン

啓文と桜下の頭を1発ずつ思いきりど突く。

ズンダしてるからそんな痛い目に遭うんだぞお前ら。

「オイも叩かれるかと思ってマジビビった」

唯一ど突かれなかった光汰もビクビクしていた模様。

次の日も練習が終わり堤が朝礼台に上がり話してるときに啓文がコソコソと喋っていた所を見つけ、

「誰かそこは〜！啓文や！？」

怒鳴りながら啓文の所へ行き、

「お前は…」パーン

痛そう。

「いったぁー…もし堤がタメ（同い年）やったら今頃ボコしとるバ
イ」

頭を抑えながら言った。

自分とタメの男が反抗してきたら容赦なくボコす。誰も男子は啓文には逆らえない。

放課後、SOS団の部室の出入口の扉を開け、

「ハルヒ、聞いてくれよ……」

俺の眼中に飛び込んで来たのはハルヒが体操服から制服に着替える所だった。

「……」

沈黙状態が続き、

「キヤー、キヨンの変態！」

物をいっぱい投げられ追い出される。

体育祭前日の準備。っていつても今日は土曜日。

「ああ土曜なのに面倒くせえな」

「そつだな」

谷口も同感だった。

堤が朝礼台に立ち、

「おい長原、お前体でかかけんテントの脚1人で持ち切るやろ？」
2-Dの肥満体でしゃばりなプラス部所属の長原翔平に話し掛ける。

「はぁ？無理ですよ」ポロッ

何か口から出てきたぞ。どうやらガムを噛んでたらしく、ガムを急いで口の中に戻す。

「てかお前ガム噛んどるやる？え？」

運悪く堤にバレちゃったみたいだ。

「そんな。ガムなんて噛んでませんよ」

必死で言い訳するも、

「じゃあ口からポロって出てきたとは何や？」

「…すみません」

ようやく白状したようだ。

「学校は不要品持ち込み禁止になつとるろもん！長原、お前は罰として準備が終わるまでずっとそこで正座」

長原にそついう重い鉄槌を下した堤。さすが生徒から恐れられてる
厳しい体育教師。

「ええ！先生！いくら何でもそいは無いでしょ」

勿論のごとく反論する。

「不要品禁止になつとるとにガムば持って来たくせしてごちゃごち
や煩い」

その後長原は準備が終わるまで他の連中がテント張りや来賓用のパイプ椅子運びをしてる中、ガランとなった運動場に1人だけポツンと正座させられており、見てるこっちも虚くなった。

練習期間中は色々あった訳で体育祭当日。

角川学園育友会の人たちが無料でお茶を組んでくれるサービスマンや、ジュース販売が行われてる。

俺はミルキーウェイという女子が男子の背中の上を走って行くヤツに出る事になった。

俺を含む男子数人は既に背中を反りスタンバイしていた。

キョン「正直俺Mなんだよね」

「そうですね。人は見かけによらないですね」

いつも朗らかな表情古泉は言った。

3チームあった。

俺たちの上を走るのは2ーBの柳橋香名子だ。

柳橋が俺の背中を踏んで行ったときは痛かった。

けたたましい応援の音が響く中見事俺たちのチームが勝った。

どうせならハルヒに踏まれたかったと心の底で思う俺であった。

ハルヒがリレーに出る事になっていた。長門もだ。

校庭を半周疾走したランナーからランナーへ次々とバトンが手渡される中、ハルヒの番がやって来た。

バトンを手渡されたハルヒは全力疾走する。

A組のとある陸上部と互角のスピードだ。

耳をふさがないと痛い位煩い応援の音が響く。

俺たちのテントの脚を片手で掴んでる健八が居た。

健八も周りに負けない大声で

「がんばれ〜!!おい!お前ら何ばポーってしとるとや!?!ちゃん
と応援せろさ」

喋ったりぼんやりしてる連中に真顔で喝を入れる。

「クラス全員力をあわせれば不可能はなかとぞ!優勝しようで」

表情を変え、落ち着いた口調でいう健八。

キョン「ああ。みんな、健八先生はな面倒くさがりやながらも根は
熱血教師なんだよ。ほんと俺たちは良い先生に巡り会えたって訳だ」

鉄橋「じゃオイたちも応援するか」

21Bの連中も健八のボヤキみたいなしゃべり方ながらも熱のこも

った語りかけでやる気を出し応援するのであった。

長門の番も回って来た。

長門にバトンが回って来て全力疾走する。

「行け〜長門〜」

「がんばれ〜！」

健八と21Bの連中の応援は感動的なものだった。

優勝出来なかったが得た物は大きかったようだ。

しかしながらこれは作者の自虐要素もあるので述べさせてもらうが
実業の体育祭は他と比べてつまらないという声も少なくない。

第7話：文化祭

教卓の椅子に座り放心状態になっている健八を背景に2 - Bの奴らが文化祭の準備をしていた。

俺たち2 - Bはスタンドガラスをする事になり、前瀬、両岡、小柄でアトピーの為に顔（特に目の下辺り）が赤っぽくなっている山小屋洗四郎と4人で俺の家の車をモデルにした自動車＋背景を制作する事となった。

「山小屋、カッター持って来い」

「わかった」

殆ど俺が1人で作ったに等しい。前瀬は何もしないし、両岡には悪いがアイツは却って足手纏いになった。

唯一捌けたのは山小屋。

「はいカッター」

「ありがとう」とはいったものの…人たちから見ればやる気がなさそうな出来になってしまった。

当初背景は車を駐めている駐車場の周りの民家が密集してる住宅地を画く事にしたところ、健八に

「複数の民家とかの建物は難しかバイ。海とか山とかもうちよっと簡単かヤツに変えた方がよか」

却下されたので、あえなく海と鷗と船に変更となった。

文化祭当日

俺は食う事しか考えてなかった。

文化祭を見に来た九州文化学園（通称：九文、実業の近くののでハルヒ本編では北高の近くにあるお嬢様学校の光陽園学院的ポジションに等しい）の女の子をナンパしてた奴も居た。

ハルヒはバニーガール姿になり朝比奈さんと2人で校門でピラを配っていた。

おい。てかアイツ本編でも全く同じ事してたような…

でも一部相違点も…

「何で佳代たちまでこんなことせんばいかんと?」

スタイルが良い美女で理科教師の木山佳代子や、他にも後、豊嶋と高地もハルヒによりバニーガール姿でピラ配りをさせられてた。

いずれも頭につけるウサギの耳の形をした飾りに黒のレオタード、網タイツ、ヒール。

3人とも容姿が良いのでかなりセクシーだ。

「何で茜たちなの?どうせやったらみくるちゃんとか有希ちゃんに

させればよかどに」

豊嶋が若干怪訝そうなに言う。

「果林は別よかけど」

佳代子「えっ…」

＊＊

俺は谷口・国木田・前瀬と、小柄で年齢より老けて見え、親父みたいなとりがわりよういち鶏川亮一と5人で回っていた。

2・B男子でこの日来てないのは啓文と山小屋だ。

前者は従兄の結婚式、後者は風邪ひきである。

啓文の話によると、啓文の従兄はどこかで可愛い女をナンパをして、交際を経てその女とチャツカリゴールインしたとの事。

にしても俺は文化祭で朝比奈さんのメイド服姿を拝む+何を食べるかしか考えてなかった。

俺はラーメンやジュースを飲食しながら映画を見たかった。

「おーい、映画見ようぜ」

「いやだ」

谷口にあえなく却下された。

仕方なく俺は谷口たちと話し合い、俺1人で行き、奴らは隣にあるアトラクションコーナーに行った。

カップヌードルの醤油味とジンジャーエールを購入して、席に座り3分経つのを待っていた。振り向くと担任・健八が居た。

健八は映画が思ったより面白くなかったせいか、眠そうにしていたのだった。

「学園物語じゃないの？何やこい。借りてきたDVDはスクリーンに映しよるだけやっか」フワァ

「あつ先生、何ブツブツいつてるんですか？」

「…ん？キヨン」

脚を組んで腕を組んでイスに寄っ掛かっている健八が俺の方を見て言う。

「学園物語の上映会は2・Dですよ」

「そつや。ラーメン食い終わったら2・D行こう」

と言った健八は3・Dを後にする。

俺的にも此処で上映されていた映画はあまり面白くなかったからラーメン食ってジュース飲んですぐに3・Dを後にした。

続いて俺たちがむかったのは、校舎の外で敷地内にある屋台を巡った。

校門を入った所には昭和の名車やらズラリと展示しており、これはかなり印象に残った。

「思ったより殺風景だったからつまんねえな。何か食い物買って校舎に戻るか」

前瀬「そうやな」

俺と鶏川が餅を購入して一行は校舎へ戻る。

続いて向かった先は、3ーBの出し物のメイド喫茶。

「何人様？」

出てきたのはメイド服姿で緑髪の美少女・鶴屋さん。さすがこの人文化祭だけあってテンション高いな。

「5人です」

「席に案内するからついてきて」

部屋は派手に飾り付けされている。

「みんな平日朝何見てる？」

国木田が野暮な事を訊いて来る

前瀬「ズームイン」

谷口「めざましテレビ」

鶏川「めざましテレビ」

キヨン「ズームイン」

まあ人それぞれだな。

「6：30のズームイン第二部が始まる前の幼稚園児が踊るピーピーダンスあるけどさ、あの幼稚園児たちの親は我が子がテレビに出るってなって慌ててビデオの準備してただろうな」

毎度毎度長崎ローカルの棒読みは大変申し訳ないが、そう言つと前瀬が、

「キヨンそがん事言いながらお前もテレビの前で一緒にピーピーダンスば踊りよるっちゃなかとや？」

からかい口調で言う。

「鶏川キモいぞ。死ね」

谷口が鶏川を罵倒した。

実際谷口も鶏川を虐めている。

誰から虐められるのが鶏川だ。

勿論鶏川を虐めてるのは俺と国木田もだ。

鶏川は虐められっ放しなのに、登校拒否にならないし自殺もしないから凄い精神力じゃねえか。

「うるさい」ニヤニヤ

谷口「ニヤニヤしてんじゃねーよバーカ！キモいぞ」

両手を後頭部にやり、後ろに反り足を組んで言って、

キョン「鶏川、整形した方が良いぞ」

机数台をくっ付けたテーブルに肘を付いて言い、

国木田「鶏川親からも虐められてるんだって？大変だな」

読書しながら言った。

「パンツ！」

前瀬が鶏川の頭をど突く。鶏川は痛々しそうな顔をしながら頭を押えてた。

「コラ前瀬叩くな。鶏川の可哀想かやつか」

国木田が前瀬を軽く注意する。

「あ〜煩いですよ」

人混みでごちゃごちゃしてる中、メイド服を身に纏った栗色のロン

グヘアーでお人形みたいに可愛らしい少女が現れる。俺の今日一番お目当ての朝比奈さんだ。

「ご注文は何にしますか？」

弱々しそう声で訊く。

キョン「じ…じゃ俺紅茶」

前瀬・谷口・国木田「じゃオイ（俺）も」

*

「ふわぁ疲れるなあ」

2・Dが出し物として上映した学園物語を見終わり、教室を後にしようとする健八。

*

俺たち一行は2・Bの教室に人がスタンドガラスを見に来てるか見に行ったが、悲しい事に誰も居なかった。

「うわぁガラ〜ンってしてるなあ。正に閑古鳥が鳴いてるみたいだ」

「てか内川たち何ばしよつと？」

前瀬が指差す先で、小柄でショートヘアー、ミニスカで常時ハイテンション、下品な言動が目立つ少女の内川愛と女子数人が飾り付けに余った風船で遊んでいた。そんな中俺たちはついでと言っても何だけど休憩していく事にした。

谷口「3・Bのメイド喫茶に居たあの娘可愛かったよな」

国木田「うん。あれはマジヤバイ」

残ってた餅を食べながら2人の会話を聞く俺。

「身長小さいのに胸大きかったな」

谷口が朝比奈さんに対していやらしい事をいつてたから

「谷口、朝比奈さんに色目使ってんじゃねえよ」

思わず喝を入れてしまった。

「ゴ…ゴメン」

ちょっと恐かったのか謝る。

*

午後、売り物も全て売り切れた模様で、生徒は皆体育館に集まった。

パイプ椅子に腰を掛け今から何が始まるのか正直どうでも良かった。歩きっ放しで疲れたんだから。

でもメイド服の朝比奈さんには癒されたな。

ブラス部の演奏の間、俺は仮眠をとっていた。

目を覚ますと、ブラス部の演奏はとつくに終わっていた。が、開いた口がふさがらなくなるような光景が目に見え込んで来た。バニーガール姿のハルヒがエレキギター弾きながら「God knows...」という曲を歌っていた。

後ろで約4名、ドラム叩いたり、ベースギター弾いてる奴も居る。その内3人は見掛けない顔だが1人見たことある顔がいた。長門有希である。散々見飽きた例の黒帽子に黒マントの衣装のまま、どういふ訳だかエレキギターを肩にかけて立っている。

何という事だ。

「えー皆さん」

ハルヒは幾分硬い表情で、

「ここでメンバーを紹介しないといけないんだけど、実はあたしと長門はバンドのメンバーじゃありません。代理なのです。本当のボーカルとギター担当の人はちよつと事情があつて、ステージに立ってなかったの。あ、ボーカルとギターは同じ人ね。だから正式メンバーは3人だけ」

観客は静かに耳を傾けている。

この後もほぼサプライズイベントに等しいハルヒの行動は続いた。

とにかくこのときのハルヒの声は良い声だった。

周りをキョロキョロ見渡すと古泉は居て相変わらず気持ち悪い位に朗らかな笑顔、宮本は寝ていたのである。

健八が、俺たちB組の高1のときの副担・佐藤と喋った後、PSPしながら体育館を出て校舎の中に消えて行くのもチラツと見えた。ふと見回せば俺が席に着いたときよりも客数が増えている。

丁度、その中の1人が近づいてくるのが目に入った。

そいつは、

「どうも」

特設スピーカーの大音量に掻き消さまいとする配慮か、俺の耳元に顔を寄せて来た。

「これはどうした事ですか？」

古泉である。

こいつは何もコスプレをしていなかった。

奴は壇上で熱唱するハルヒに穏やか視線を飛ばし、前髪を弾いた。

「噂を聞いたものですか」

もう噂になっているのか。

「ええ。あのような恰好をなさっておられますしね。話題にならない方がおかしいですよ。人の口に戸は立てられません」

実業の誇る問題児、涼宮ハルヒがまた何かやってる。みたいなコースが既に八方に飛び交ってるらしい。

あいつのプロフィールにまた1つ新たな事項が加わるのはいいのだが、そのオプションにSOS団とか俺の名まで刻まれるのは今回ばかりは筋違いだぞ。

*

後片付けも終わり一段落し、B組の連中皆自由モードに入ってる中、俺が教室に戻って来ると、大元寺と西原がつるんで面白い事をしてる。

するとその後ろで鉄橋が誤って机を倒してしまふ。

「ボタン」というけたたましい音が広範囲に響いたから大元寺も西原も「何だ!？」という顔で振り向き、大元寺が、

「空気読めさ!?!ぶっ殺すぞ!」

と、鉄橋に怒鳴り付ける。

第8話：啓文vs前瀬

それはある日の1限の理科の授業中での出来事。

「啓文、世界にはプレートのいくつあるか言ってみい」

佳代子が啓文を指摘する。

「え〜っと…フィリピン海…ユーラシア…後…」

わからない模様。

佳代子「残り3秒、2…1…はい時間切れ」

腕時計を見ながら言う。

「わははは」「ワハハハ」

笑ったのは前瀬。

「キモかつさ！前瀬」

それで啓文がキレるのも無理はない。

「は？何か言った山口」

「前瀬マジスカン。キモか！…」

「どがんしたと？」

光汰が啓文に訊く。

「どうもこうも無か。オイがプレートば全部言えんやったとば前瀬の笑うつさ。マジ腹ン立つ」

「そがんキレンな」

「こいばキレずに居れるか！」

「おいお前らうつさかつさ。授業中よ。静かにせんか」

佳代子が注意した。

1限後の休み時間、

「前瀬ちよつと来い」

啓文が前瀬をトイレに呼び出す。

「おい！お前何ばさつき笑いよったとや？」

今まさにヤバイ状況だ。

俺・瑠・鶏川・谷口・国木田が野次馬となって隠れて見ていた。

瑠「前瀬さま〜みろし」

前瀬はいつボコされてもおかしくなかった。後から古泉・宮本も来る。

「どうしました？」

古泉が訊く。

「シート静かに！お前まで啓文に殺されるぞ」

宮本「何があつたの？」

キヨン「それがさ…」

啓文が前瀬に対してキレた経緯を古泉と宮本に聞かせた。

『ボカン ボカン』

凄まじい音が響く。

まさか。

俺たち一行は前瀬と啓文の方向へ目をやる。

啓文が前瀬をボコボコにしていた。

「調子のんなよ！お前」

前瀬の胸ぐらを掴み上げて言う。

「…」

前瀬は口も聞けない程やられてる。

そして啓文は前瀬をぶっ飛ばし、

前瀬は個室のドアに思いっきり叩きつけられた。

「次オイの失敗でわらったらもつと酷かぞ」

傷だらけになった前瀬に啓文はこうぶっかける。

2限は簿記だった。

体重100キロを超えるメタボ体型の商業教師・なかすなよしひろ中砂義博が授業に来る。

この人は大阪出身だから関西人だ。だから常時剥き出しの根性で生徒を威圧している。

「皆さんいい加減簿記3級受かってくださいよ」

中砂のこの台詞は耳に胝が出来る位聞いた。

「プリント出せ！宿題して来たか確認する。して来んやつた奴は拳骨ぞ」

アイツの拳骨は痛いからな。

俺はして来たからいいけど、

「して来とらんやんけ。頭出せ」ゴッソ

「いったあ」

谷口は簿記の宿題して来なかったから中砂に拳骨を喰らう。

中砂は体が大きい上にキレてなくとも威圧感がある分かなり痛いらしい。

他にも両岡・光汰・桜下・西原や、長身でメガネかけて坊主頭の剣道部・白星嵩平、うざい声が特徴的なバレー部女子・小島美奈が宿題をサボり中砂に拳骨を喰らった。

「…」

長門は宿題をしていたので拳骨は避けられたものの、拳骨喰らってる奴を見て、まるで血まみれの死体を見るようにヒヤリとし、顔が青ざめ、ただでさえ常時何を考えてるか分からない位無表情なのに凍り付いたように固まって本当に生きてるか疑ってしまいそうだ。それ以外の奴らも数人、

「…痛そう」

と言っている。

ちなみにハルヒは既に2級受かってるから今簿記室に行つててここには居ない。2級以上を持つてる連中は佐藤から会計簿記を習う事になっている。

宿題確認が終わり、授業をしている最中、担任・健八と、もう1人の担任（て言うより副担の方が名答かも）・田邊有莉が2・Bの教室に来て、

「おい啓文、話のあっけんちよつと職員室に來い」

健八が啓文を呼び出す。

「後前瀬も來て。(中砂)先生ちよつとすいません」
続いて田邊が前瀬を呼び出す。

どうやらさっきの暴力沙汰を知られたらしい。

「おい。お前舐めてとつとか!? 啓文、何ですぐムカついたけんが
つてから暴力ふるうとや?」

健八と田邊により職員室に連れて來られた啓文と前瀬。

健八が啓文の胸ぐらを掴んで言った。

田邊「よかや啓文! 次したら本当に謹慎ぞ! 前瀬も、あんまり気に
せんでよ」

前瀬「…はい」

下手な事を言つたらくらされる(ど突かれるもしくは殴られる)と
思い、それを恐れ、何も言えずに居る前瀬だった。

しばらくして掴んでいた啓文の胸ぐらを放すと同時に突き飛ばす健
八。

「やれやれ。喧嘩とか暴力沙汰でオイがお前(啓文)に注意すると
こいで何回目かな? 全く。フウウ…ヘドの出るバイ」

健八はそう言っつ溜め息を吐く。

「さっきの1時間目理科るとき、山口の前瀬にはぶてよったさね。でも1限の終わつてすぐに佳代21Bの教室から出ていったけんがその後の事は知らんばつてん」

授業に来ていたので事情を知つていた佳代子が言つて来る。

「そうか。お前ら（啓文・前瀬）、さっき1限るとき何のあつたことや？」

健八が訊く。

啓文「何かオイが6個のプレートば全部言い切れんやつたとは前瀬が笑つたんすよ」

そう言つと、

健八「前瀬も人の失敗ば笑うもんじゃなか」

啓文も一方的に悪い訳じゃないから前瀬に言い聞かせた。

啓文もこないだT・WXにボコボコにされたばかりなのに…懲りない奴だ。

「失礼します。窪先生居ますか？」

T・WXが職員室にやつて来る。担任に用があるらしい。

何故かハルヒも付き添いだった。

第9話：危ない末さん

これは俺を含む2・Bの奴らが1年のとき、体育の授業が終わり、着替えをしていると事件が起こった。

「体育館シューズの無くなったって騒ぎになってるぞ。末林、お前が犯人じゃなねえのか？」

宮本（T・WX）がB組に乗り込んで末さんに言う。

「はぁ？俺知らない」

末さんがそんな事をするとは思えないのだが、

「ウソつけ！お前らしき人物が体育館の前の廊下で何かしてたって話のあるぞ」

宮本は完全に末さんを体育館シューズ盗難事件の犯人と決めつけてるようだ。

今さっきまでつるんでじゃれながら喋ってた瑠と大元寺が末さんを集中攻撃するようにして、

瑠「末さん！」大元寺「末林、しらばっくれとらんで早よ白状せろさ！クソが！死ね」

末さん何だか可哀想。

「だから知らないって…うわぁわからないわからない」

両手を頭にやり、泣きそうな顔で嘆き、

「バターン!!」

暴れて啓文の机を倒す。

中に押し込まれていた教科書やガラクタ等が床に散乱した。

瑠「うわぁ!!」

谷口「これ山口の机だよな？」

キヨン「ああ」

そしてあいつは出入口のドアを何発も蹴り、廊下に出て、すぐ目の前にある消火ボックスを開け、その隣にかけてある消火器を取り出し、

「キヤーーーー」

と叫ぶ。

こっちにまで響いた。最初は内川が叫んでるのか思ったわい。

野次馬がいつぱい見てる中、末さんは消火器の一番上の黄色いレバーを引っこ抜き今にも噴射する構えをしていた。

俺はこの一部始終を鉄橋と2人で教室のドアから見ている。

末さんの視線がこっちに向き怖くなった俺と鉄橋は必死で隠れる。

そこに宮本が、

「コラ末林やめ……」

止めに入った次の瞬間！末さんが宮本に消火器を噴射。

「……」

粉まみれになりながらも宮本はピンピンしている。さすがアンドロイド。

消火器はどうやら全部使ってしまったようだ。

すると更に堤が来て、

「末林、消火器を床に置きなさい」

と、落ち着いた口調で言った。

末さんは素直に消火器を床に置き、

堤は末さんをヘッドロックして宮本の付き添いの元、職員室に連行して行った。

* *

健八は中学・高校時代の同級生で長身で顔はニキビだらけで数学教師の四根光久が居るとある個室にある机の上でDSの某人気漫画雑誌

誌で連載中のド派手な忍者アクション漫画を原作としたTARUT
O疾風伝忍列伝3をしながら、

「にしても教師であるお前が不登校生徒と同じ扱いにならんばとか
な？」

「えい」ボコッ

「いったあ」

四根は冗談半分で健八の横腹にパンチを入れた。

「調子のんなよお前」

「健八、お前最近太ったんじゃない？さっきパンチした感触じゃ、え
らいボヨンってしとった」

「そつや。ダイエットせんばかなあ」

そう言いながら部屋を出る。

「あつ嶋田先生」

堤が健八に話し掛ける。

「ん？末さんまた暴れたんすか？堤先生」

ヘッドロックされた末さんを見ながら訊き返す。

「ああ。さっき消火器ば振り回しよったっさね」

「ええ。末さん何でこがん事すると?」

「何かあ体育館シューズ盗難事件があつて俺知らないのにみんな俺に濡れ衣着せるんです」

事情を語る末さんだった。

第10話：山口啓文の最期！？（前編）

2 - Bの中に学校にチロルチョコを持って来て、食べて塵屑を床にポイ捨てした奴が居る。

俺たちはその塵屑のせいで、

「誰か！チロルチョコの紙くずば床にポーンって捨てたとは！！正直に名乗り出てくるまで帰さんけんな！」

田邊はカンカンだ。

「まったく洒落にならんぞ。お前ら。ああ面倒くさいなあ。今日ジャンプ発売日で早よローソンに読み行きたいとに」

横で健八も呆れて眠そうにして言う。

でも奴ら的には『ふざくんなよ！このクソ女！何で俺たち何もしてないのにてめえの煩い説教ば聞かされんばいけないんだ！！』と思っっているようだ。

すると大元寺がイライラしながら足をガタガタしている。

大元寺「（田邊めえケツの穴にダイナマイトば仕掛けたるかあ…血祭りに挙げたるか…）」

このときの大元寺の顔は恐かった。

「デブ！ガタガタうっさかつさ！」

席が大元寺の真ん前だった啓文が後ろを向き大元寺に怒鳴り付ける。

「…すまん」

啓文が恐いから、殺されると思ったのか慌てて謝る。

「本当に誰や！チヨコの紙くずを捨てたとは。食った奴職員室来いよな。帰ってよかぞ。スクバ間に合わんけん急げ」

やれやれ俺たちは諦められてるようだ。

「マジキもか田邊」

田邊はとんだ嫌われ者だ。

「ああ。誰か田邊が堀北真希に似てるって言ってた奴が居るけど堀北真希の方が500倍可愛いぞ」俺がそう言ってる中、

「みんな本当にこのままでいいの！？修学旅行を良い思い出にしよっつていう気ある？だから…あれ…俺を…間違えた俺が言いたいの…」

末さんが立ち上がり演説風にクラスの連中に言い聞かせる。末さんには悪いが7、8割は何を言ってるのか分からなかった。

「わはははマジ受ける末さん」

「変なの末林」

前瀬や谷口に至っては、差別用語で関連の団体には大変申し訳無いが身障者の戯言にしか聞こえてなかった模様。

*

「オイのクラスに前瀬って奴の居るっさ、そいつマジキモいけんね」

「キモいって顔の宇宙人のごとしとると？」啓文が機械科に居る仲間と喋ってる。

啓文が言ってるのは紛れもなく前瀬の悪口だ。

そこに部活に行こうとたまたま通り掛かった通学鞆を手に下げ部活鞆を背負った前瀬が耳にする。

前瀬は角に身を隠し、

「…山口め…」

前瀬が啓文に対して怒りを燃やしていると、

「何やってんだ？お前」

声の主は宮本（T・WX）だ。

「誰だ？お前」

前瀬は聞き返す。

「宮本… 勇気。お前こそ名前何だ？」

「前瀬」

「前瀬っていつのか。まあム力つく奴を言え。俺が殺してやるから」と、言う宮本。

「あの狐みたいな顔した啓文って奴を殺せ」

見つからないようにこっそりと啓文を指差す前瀬。

「わかった！俺に任せとけ」

もしかしてこいつ、啓文を本当に殺すんじゃない！

*

俺はSOS団部室で古泉とオセロをしていた。

「勝った」

勝負の結果は描写が省略される程言うまでもない。

*

ここはサッカー部の部室。

「何や宮本…」

「…殺す…」

果物ナイフを手に持った宮本はまるで怨念を纏った悪霊みたいに恐い。

「死ねえー」

「危なかつさ！調子のんなよ！おりゃあ」ボカッ

宮本を思いつきりグーで殴る啓文。

「さすが山口。お前誰よりも喧嘩が強いからな」

アンドロイドだからこれぐらいでやられる宮本ではない。

「オイなあいつかお前はボコすのが目的で毎日筋トレしよったとぞ宮本の首を掴み持ち上げて言う啓文。

「フツそれで勝ったつもりかよ」ボコッ

宮本は啓文の腹を蹴った。

「くっそお。オイに喧嘩売るなんてよか度胸しとるやっか」

宮本に飛び蹴りし、よろけた際に馬乗りして宮本をボコボコ殴る啓文。

「いってなあ」

顔が痣だらけになりながら啓文を振り払い啓文に殴りかかる。

「コノヤロー」ボコッ

「くらすぞ」ボコッ

「てめえにだけは負けねえ」ドーン（啓文がロッカーに叩きつけられた音）

と、啓文と宮本がドンパチ格闘した末、

「（オイ今まで色々な奴と喧嘩して来たばってんコイツの強さ人間離れしとるやつか。てかしかも全然息ば乱しとらんし…もしかして人間じゃなかやる！？）」ハアハア

「（コイツ、なかなか強い。昔空手習ってたらしいから一筋縄じゃいかないなあ。でも長時間こんな奴に構ってられないから…）」

お互い内心でそう言い聞かした後、

宮本は床に落ちていたナイフを拾い上げ、

「今度こそ終わりだ！失せろお」

何故かそのナイフが伸びて、

「何？」グサッ

啓文の胸を貫いた。

啓文の足元には大量の血が流れている。

*

グラウンド

「啓文何ばしよつと？えらい遅かな」

と、啓文の友人は練習をしながら言う。

啓文の運命は…

*

「はあ？宮本が俺を呼んでる？」

SOS団の部室の前に立っているカラフルなシャツを着たサッカー部が首を縦に振り、

「今すぐA組に来てって言うてよったバイ」

「そうか。何だろう。」

「もしかして告白？あの宮本って奴ホモだったの！？」と、団長机に座っていたハルヒが冗談半分で言う。

「いやそれはないと思う」

俺は構ってる暇はなかったから一蹴する。

SOS 団部室を後にし、2・Aを目指して廊下を歩く俺。

視線を感じたからふと振り向く。

「気のせいか」

その視線の主、意外な人物でこれから俺に振りかかるとんでもない事は全てそいつの陰謀だった。

それはこの時点での俺に知る由は全く無かった。

* 続く *

第11話：山口啓文の最期！？（中編）

「啓文しつかりしろ！啓文」

啓文の友人でサッカー部所属の内原千秋が倒れてる啓文に呼び掛ける。

「一体誰にやられたとや？」

大量に出血していたが息は微かにあるが、

「こんままやったら啓文死ぬやん。救急車！救急車は呼べ！」

血を流して倒れてる啓文に側に座って息があるか窺っていたもう一人の人が叫ぶ。

「わかった」

野次馬の中に居た顧問の先生がポケットからケータイを取り出し、119番にTe1する。

「救急お願いします！生徒が部室で血を流して倒れてるんです！住所は佐世保実業高校…」

数分後、『ピーポーピーポー』とけたたましいサイレンを鳴らしながら救急車が駆けつける。

啓文は救急隊員により応急措置を施され、担架に乗せられサッカー部顧問の付き添いの元、救急車で病院へと搬送された。

*

「何の用だよ。宮本：いやT - WX」

2 - Aの前の黒板の両端を囲むようにして俺とT - WXは正面から向き合っていた。

「キヨン、お前には前にも話した通り俺はアンドロイドだ。実はお前に興味があつたから宮本勇氣という偽名で佐実高に来たんだ。サッカーが趣味だからサッカー部に入った。といつても下手の横好きつてのか、あまり上手じゃないから正式な部員としては認められないしな。涼宮ハルヒに選ばれし人物：殺したくてウズウズしてたんだよ。さあ終わりだ」

果物ナイフを取り出し、物凄い勢いで突進してくる。

俺は慌てて避ける。

「うわあ何すんだ!？」

と、俺。

こんなの宮本じゃない。もしかしてこいつ、誰かに操れてるんじゃない？

俺は避けるのに夢中で周りの障害物を気に留めておらず、誤って後ろから机に突っ込んで転んでしまう。

「キヨン、今度こそあの世行きだあ」

宮本が俺にナイフを振り降ろそうとして、もう終わりと思ったとき、

「ボカツ」

「うっ」

宮本が背後から首の辺りにチョップを入れられ、その場に倒れてしまった。

したのは長門だった。

「長門」

「こいつは操られてた。こいつとは別に存在するアンドロイドによつて」

やはり睨んだ通りだ。

キヨン「ていつても誰に？」

長門「それが…」

「T・WXを操るのは私よ」

と、言いながら俺たちの前に現れたのは…神崎だった。

家庭科教師の…でもこの人は結構いい人だぞ。この前なんか俺たちにメシ代を奢ってくれた…

* 続く *

第11話：山口啓文の最期！？（中編）（後書き）

神崎もアンドロイド！？

神崎はどんな経緯で宮本を操ったのか、次話で回想の位置付けで説明していきます。

第12話：山口啓文の最期！？（後編）

「か：神崎先生」

「いや：G - WX」

目の前に現れたのは神崎めぐみことG - WX。俺が以前予感した通り悪い奴だった。

「私はある目的があったから実業に教員として潜入していたの。それはキヨン君、あなたを殺す」

長崎弁だった神崎：いやG - WXだが、何故か喋り方が標準語になってる。

「てめえ俺たちを騙してたのか!？」

激昂しながら言う俺。

「騙してたなんて人聞きの悪い…ず〜っといつチャンスが来るか見計らってたのよ」

宮本（T - WX）が悪い奴じゃないと判断して倒れてる宮本を肩に担ぐ俺。

「何で宮本を使っただんだ？」

「ああ宮本ねえ。話せば長くなるんだけど…」

部室で啓文をナイフで刺し、証拠になりそうな物は全てまとめ、誰かに気付かれない内に部室を出て何処かへ行こうとしてる宮本だったが、途中G・WXとバッテリー会い、

「宮本くん。いやT・WXくんって呼んで良いかな？」

「田舎者がいきなり標準語使うな。無駄にカッコつけてるって思うから」

T・WXはG・WXに構ってる暇はない模様。

「あなたはキヨンを殺したくなる」ビリビリ

指から出す電撃で宮本の内部のコンピュータを狂わせる。

「あんたは私の言いなりよ」フッフ

「^{かしこ}畏まりました。G・WXさまの忠誠なる召し使いになれるように頑張ります」

*

何て奴だ。

「ていつても私は臨時教師ということであって来てるからね」

俺の髪を掴んで言う。

神崎は床に落ちていたナイフを拾い、

「さああなたは死ぬのよ」

ナイフを構えて言う神崎。

「お前朝倉涼子とグルだな」

咄嗟に朝倉の名前をだした。

因に朝倉涼子というのは藍色のロングヘアで美人で成績優秀で生徒会長だ。

と、言った。

「誰よそれ」ブンッ

どうやら今回の件は朝倉は関係ないようだ。

神崎は勢いよくナイフを振り降ろしたから、俺は怖くなり慌てて教室を出て、一目散に逃げる。

トイレの個室に隠れ、

「フウここなら見つからないだろう」

息をついてると、

「みーつけた」

神崎が目の前に居た。

「ここは男子トイレだぞ」

また逃げ、次はまるで迷路のように入り組んだ所にある相談室に隠れた。

「私からは逃げられないわよ」

またしても神崎だ。

こうなったら戦うしかないな。

神崎に殴りかかる俺だったが、かわされ、逆にボコボコにされてしまった。

「もう動く力もないみたいね」

神崎がナイフを構え向かって来る。もうダメかと思った。

「キョン、大丈夫か」

宮本に手を貸してもらい起き上がる。

長門も駆けつけた。

長門「あなたの相手は私たち」

宮本「かかってこいや」

こいつらもアンドロイドだから神崎に敵うかもな。

「お前らごときに…俺様を倒せるとおもってんのかああ」

突如6本腕に巨大な尻尾、頭には角が生えた化物へと変化した神崎。

「てめえら諸共、この6本腕にかかって殺されるんだよ」

神崎の6本の腕にはナイフ、それもさつきよりもますます鋭く巨大化している。

「コイツ…」

「躊躇ってる暇はない」

長門は瞬時に神崎に飛び蹴りする。

神崎は派手にぶっ飛ばされ、起き上がり、

「おどりや雑魚共お俺様に楯突こうなんて100年早いわあ」オラ
オラ

6本のナイフを振り回しながら長門に切りかかる。

長門の頬と膝から真っ赤な鮮血が流れ出る。

すると宮本が神崎の後ろに瞬間移動し、強烈なパンチを炸裂させた。

「ボカツ今だ長門」

長門は怪我しながらも神崎の腹を殴る。

「なかなかやるな。長門有希とT-WX。でもこの勝負俺様の勝ち

だあ」

パワーアップしやがった。

長門も宮本も床にひざまつっている。

まさか…クソオ神崎はアンドロイドが2人係でも倒せないのかよ。

「行くぞ」

と、宮本。

それに応えるように長門は首を縦に振り、

「ハアアア」

何故か呪文を唱え出した2人。

すると複数の岩の塊みたいなモノが上から降って来て、神崎がその岩の塊の下敷きになってしまった。

「この勝負勝つのは俺様だあ？それはこっちの台詞だ」

ハア

宮本は力をこめて手を合わせ、

宮本「長門、やれ」

すると長門は正面に指していた人差し指と中指を上に向け、

神崎を下敷きにした岩の塊はグラグラと変動を起こす。神崎を更に押し潰すように。

と同時に、

「ギャー」

神崎の悲鳴が聞こえ、それがしばらく続いた末、何も聞こえなくなつた。

「神崎、死んだのか？」

と、俺は訊く。

「なら良いけどな」

冷静な応答だった。

*

その後家庭科の授業では、神崎の代わりにポニーテールで若干ポツチャリ系で芸能人に例えると青山テルマ似の瀬戸川絢子が来るようになった。

神崎は表では色々あってアメリカに引越した事になっていた。

「キョン、オイ的には神崎の方がよかつたっちゃけど」

「確かに」

前瀬がそう言い、国木田も同感みたいだ。無理もない。美人な上に優しい先生だったから。

忘れてた！啓文はというと、

*

「こんばんは」 (BGM)

「じゅんばんは」

「ここからは九州・沖縄エリアのニュースをお伝えします」

TVの音声。

長崎県佐世保市の佐世保共済病院の病室に置いてあったTVでニュース番組・スーパーNチャンネルを見ながらベッドの上でケータイの恋愛小説を呼んで、

「マジ泣けるこれ」

と、感動している。

宮本に刺されるも、致命傷を負っただけで命に別状はなかった。

* *

桜下「よっ。見舞いに来てやったぞ」

光汰「学校行きたくなかけんがって、ずっと入院しとこうって思っ

とるっちゃないや?」

「黙れ」

奴の事だから友達がちよくちよく見舞いに来るらしい。やはりこちらも表では啓文が部室の中でサッカーの練習をしていて誤って窓ガラスを割って先ずは内部に散らばった破片を処理しててバランスを崩して破片に転んで胸に大怪我をしてそのまま気を失ったという自損事故という事になっており、勿論部室のガラスが割れていたのは宮本による細工である。

第12話：山口啓文の最期！？（後編）（後書き）

いかがでしたか。出来れば感想も書いてください。

第13話：とんだ苦勞人

とあるパチンコ屋。

じゃらじゃらと煩い店内に健八の姿が。

「ああまた負けた。絶対何か細工しとるやろ」

と言い、反射的に財布を見て、

「よく考えたら俺6000円も無駄にしとるやん」

こついつた賭事には弱い模様。

健八はしょんぼりしながらパチンコ屋を後にする。

「500円…」

財布の中を見て言う。

丁度通りかかったコンビニの駐車場で車に設置したたこ焼き屋を見かけ、

「たこ焼きでも買うか」

「すみませーん1つください」

*

「たこ焼き1つ（1パック）ですね」

やせ形で白髪混じりで鱈子唇の男性が出てきて、焼き溜めしてあったたこ焼きのパック群の中から1つ取り出す。

「280円」

すると健八は財布の中から500円玉を出して渡す。

「はい。お釣り」

と、言いたこ焼きを220円の釣り銭と一緒に健八に渡す。

この時点では健八とこの男性の面識はなかったが、後に互いに心を通わす存在になるのだった。

*

健八「こん前のテスト返すぞお。名前の五十音順に取りに来い！石山田、大岩、小坪……」

テスト明け最初の国語の授業。俺赤点じゃなければ良いが。

「…おいキョン何しよつとか。早よ取りに来んか」

ついボーッとして過ぎて自分の名前を呼ばれたのを聞いてなかった。

国語のテストは34点だった俺。

「ハルヒ何点だ？」

戻って来たテスト答案用紙を眺めていたハルヒに話し掛ける。

「はあ？あなたよりはよかったわ。ホラ」

不機嫌そうだったがあっさり見せてくれた。

95点。さすがハルヒ成績優秀だからな。

「キヨンは何点だったの？」

「俺、34点」

と、答案用紙を見せながら言った。

「おーいそこ、何ばいちゃ付きよつとや！？いつの間にできとつたとねわい（お前）たちは。答案用紙返されたら早よ自分の席に戻らんか」

俺の方向を指差し、だるそうにしながら言う。

「知らん内に一組のカップルの出来とつたばってんそいはどうでもいい。答え言うて行くぞお。間違いは訂正して空白の部分は書け。採点ミスのあった奴は後で出て来てください」

答えを印刷してある全く同型の答案用紙を見ながら言った。

何かこいつの言動ちょっとムカつく。なのに相手は先公だから反抗

出来ない。と、内心で絶望しながらペケになつてゐる部分に正しい答えを書く。

* *

1箇所採点ミスがあつたから教卓に健八の所に行き、

「あの先生、問一の故事成語の記号問題で、ここ『イ』で合つてゐるのにバツになつてます」

「…ああスマンスマン。て事は34点じゃなくて35点やん」

34を上から2本線を引いて消し35と書き直した。

平凡過ぎて申し訳ない。

*

「今日も疲れた」

佐世保市の島瀬公園の四か町アーケードを挟んで向かい側にある小さな公園のブランコに腰をかけている健八。

とある男性がもう片方のブランコに座つて来る。

「ん？あんたは！？」

健八が驚くのも無理はない。以前訪れたたこ焼き屋の店主だった。彼の名前は土本英則。鱈子唇が特徴的。

「ふーんあんたも苦労してるんだな」
 土本は以前実業の先生だったらしい。

健八、四根、豊島、高地、佳代子が教員になる数年前（まだこいつらは学生だった）

「実業の先生だったんですか！？何を教えてたの？」

健八が訊くと、

「商業、主に簿記とか情報処理で部活の顧問は弓道部の監督をしてたんじゃ。でも不景気の煽りを受けてクビになったんじゃ。お陰で妻には逃げられ、子供が2人居たけど妻が引き取った」

土本の人生は波瀾に満ちている。

不景気はほんと辛い。

「まあ土本ちゃん元気だせや。苦労しよつとはお互い様。大変なのはあんただけじゃないとぞ」

と、健八。意外と人情深い。

健八「あの後嫁さんとは連絡しよつとや？」

土本「ああ別居状態になつた後も連絡は取り合ってるよ。あの女自分から出ていっておきながら俺の心配ばかりしよる」

健八「よかたい。あんたの嫁さん、よつぽどあんたに惚れてんだよ」

土本が島瀬公園に車を駐め、たこ焼きを焼いてると、

「あの1つください」

「いらっしゃ…」

土本の前に居たのは土本の奥さんだった。

「英則、こがんとこで何してんの？」

土本が何に転職したのか奥さんに知らされてなかったらしい。

「見ての通りじゃ。お前こそ…」

「ちょっと通りかかっただけ。でも元気そうで何より」

そんな2人のやりとりを少し離れた所から見てた健八が、

「夫婦って良いよな…」
「フエッシューン」

第14話：尚行ハザード〜エンドレスエイト（序章）

尚行、そいつは俺の中学のときの同級生・戸羽哲大の3コ上の兄。最初はカツコイイお方だと思っていたが、中学からの友人で自動車科のC組の二瀬翼（ニセの）から送られて来た写メを見た所、翼が「キモい」と言うのも無理がない程キモかった。

*

お馴染みSOS団部室。

何もすることがなく俺と古泉はババ抜きをしていた。

「正月何しようかなあ。古泉、このCM知ってるか？『正解はピンポン越後製菓！正解はピンポン越後製菓！』」って

「ええ知ってますよ。で女の人可愛い声で『あつ越後製菓』と言ってるんですね」

「また俺の勝ちだ」

「キヨン君強いですね」

オセロもトランプも相手が弱過ぎるからつまらない。

「キヨン、外を眺めてただけで何か様子がおかしいの」

さっきまで団長機の椅子にふんぞり返り外の風景に浸っていたハル

ヒが顔をこわばらせながら言う。

「様子がおかしいってどういう事だハルヒ」

「みんなゾンビみたいになっちゃってるの」

「ゾンビ!? そんなバイオハザードみたいな展開がある訳無いだろ」
それがあつたのだつた。

ネット上でも騒動になつてるのかと思ひパソコン（これはハルヒがパソコン部から、朝比奈さんを裸にして襲つた所のでっち上げ写真をばらまくと脅して強奪した。それも彼らが一番大事にしてた上等なヤツ）を起動させ、検索サイト・AHO! に接続すると調べたキーワードを入力する所の上に「R・ウイルス流行中! 要注意」と記載されていた。そのR・ウイルスとは、感染すると重症は免れないという恐ろしい病原菌。伝染力も半端ないそうだ。

所持してた銃を構え、恐る恐る部室を出ると、ゾンビの大群がこつちに押し寄せて来る。

よく見るとゾンビは皆、尚行の顔をしていた。どうでもいいや。撃つちやえ!

俺と古泉、ハルヒ、朝比奈さん、長門のSOS団一行は襲いかかつて来る尚行ゾンビを容赦なく銃撃して倒して行く。

そんな中朝比奈さんが、

「ええ……」

どうしたんだ。

ハルヒ「どうしたの？みくるちゃん」

朝比奈さん「弾を切らしてしまいました」

「みくるちゃん、これ予備の弾よ」ハルヒが予備に持っていた銃弾を朝比奈さんに投げ渡そうとするが、朝比奈さんは足を躓き転んでしまう。

そこに尚行ゾンビの一人が襲いかかる。

尚行ゾンビにやられた朝比奈さんは例のR-ウイルスに感染し、ゾンビと化してしまう。

「朝比奈さん、俺だよ俺」

俺が必死に呼び掛けるが、

「キヨン君、それはもう朝比奈さんじゃありません。そんな情けをかけていたらキヨン君もゾンビにされちゃいますよ。早く撃つちゃって下さい」

と、古泉が言うのが嫌だ…目の前に居るのはいくら野放しにしておくと人を殺しまくる危険な戸羽^{ゾンビ}尚行だが、元は朝比奈さんだ。

撃ち殺せる訳ない。

「ごめん…朝比奈さん」

ゾンビが引いたから残りの俺とハルヒと古泉と長門は階段を目指して走り出す。

階段に差し掛かったとき、

「…文和、何やってんだ？」

そこの居たのは長身で肥満体で人が良い田中文和だった。

が…

「文和、何か様子が変わだな」

俺が様子を窺う。

「そいつは危ない！近付いちゃダメ」

長門が大声で叫ぶ。

「何で？」

「人間め…」ウリヤア

文和が鋭い爪を出して攻撃を仕掛けて来る。

「奴は、川中に居たっていう例の同級生の兄によって操られてる」

お経を唱えるようにして語る長門。

「いきなり危ないな文和、どうしたんだ？目を覚ませ」

俺は文和に肩パンを何発も入れながら言った。

「…ン？ここはどこ？オイは今まで何ばしよった？」

文和は操りが解けたみたいだ。

長門「話せば長くなる。ここに居たら危ない」

ハルヒ「そうよ。とにかく逃げた方が良いわ」

SOS団一行は文和を連れて出口へと向かう。

またもや尚行ゾンビらが襲いかかって来た。

俺もハルヒも古泉も長門も必死でゾンビらを銃で撃ちまくるもハルヒと古泉は隙を突かれ、R-ウイルスに感染。一瞬の内に尚行と化する。

「ガアア」

キョン「クソッこんなときに…予備もねえ」

文和「もうダメだ」

「…わあ」

「ハアハア何だ夢か」

PS2のバイオハザードが欲しいと思つてたせいかな。シリーズ化してる人気ゲームソフトだから、それもシリーズは4が欲しい。

「キヨン君、早くしないと学校遅刻するよ」

妹が朝飯が出来たと伝えに来る。

「あのなあ君付けで呼ぶの辞めてくれないか」

*

俺は2-Aに行き、古泉と、夕べ見た夢の件で喋つてた。

「あれどちらかという怖い夢に分類されるからな」

「夢じゃないかもしれませんよ。涼宮さん、バイオハザードに嵌まつてしまつてね、バイオハザードの世界を実際に体験したいって言つてましたからもしかしたらその思いが現実のものとなつたつていうのも考えられます」

「でもハルヒ自身は自覚していない」

しかしこれは後に一難去つてまた一難のごとく俺に振りかかる出来事の序章に過ぎなかった。

第15話：エンドレスエイト

溜め息にまみれた映画撮影前、高校がまだ夏休み中の話だ。

本編での、孤島でトンチキな推理劇を演じることになったSOS団
夏季合宿も大変だったようだ。

まああつちの俺もここでの俺と同様ずっと誰にも文句言われず昼過ぎまで寝続ける日々を送ろうとしていた周到な計画もあえなく破綻した模様。

北高は公立だから課題の山をわんさと出されるも、切り崩す気なんか全然無いだろう。

北高？何か他所という気がしないような…

そついう思考だと、実業バンザイだ。

私立でバカ校だからそついうのが無いから。

なーにこんなもん8月になりやいいのさとかノンビリ構えているうちに7月はあつさり終了しちまい、8月に入ったら入ったで俺は盆に、母親とハシャギぶりですこら中を飛び跳ねていながら漫画本読んだりパソコンで如何にも腐女子と称された女のオタクが見るようなサイトをあさくるのを趣味とする妹を伴って、長崎県時津町（難読地名『とぎつ』と読む）へ赴き、久しぶりに顔を合わせた祖母を始め、叔父・叔母及びそれらの配偶者にあたる関係、イトコ（一部本来血縁関係がない者も）やらと、14、15日に時津の隣町・琴海町（現：長崎市）にある祖父・叔父の墓へ1日目は線香を供える

だけ、2日目は花火をして、他にはオフクロと祖母と妹の4人で長崎市のココウオークへ出掛けたり、オフクロの実家の前や最寄りの国道206号で毎年8月15日の晩（前者は夕方、後者に関しては夜8時頃がピーク）に見られる精霊流し（木で造った船がモチーフの山車をその1年前に亡くなった人の遺影を前方に飾って親族や近所に住む知り合いが集まり爆竹を鳴らしながら巡回する長崎独自の風習）を眺めたり寿司を出前に取って、晩飯で親戚全員で囲んで食べ、ザマミロと言ってやりたいほど心ゆくまで遊び倒してやった。

バカ校の実業でも宿題は少し位は出され、それでも尚、学習能力がある鳥が毒虫の幼虫を忌避するがごとく手を出すことはなく、結果として設問を何一つ解く事なくゴロゴロし放題だった日数だけがカレンダー上に刻まれて、いつの間にか8月も半ばを過ぎようとしていた頃…それは人知れず始まっていた…らしい。

そう気づき始めたのは、お盆を過ぎた夏の盛りの日のことだ。

その時、俺は家の居間でダラダラしながらフジテレビ系列の帯番組「笑っていいとも」や、別に見ても見なくても構わない読売テレビ・日本テレビ系列のワイドショー「情報ライブテラネ屋」を眺めるようにして見ていた。

実際遅くまで長く寝切れない事もあつてか、暇であるが（前述の通り少量だが）夏休みの宿題に立ち向かう気力に満ち溢れている訳でもない、という程度には時間を持て余していたのである。

テレビに映る『テラネ屋』を含むどの『ワイドショー』にも付き物で一部のマニアしか見そうにない芸能人関連のニュースをなんとなく見ていると、何故だか解らないがそろそろハルヒが騒ぎ出すような気がした。

俺は妹と母親と3人で母親の実家がある時津（大型商業施設がいっぱい建ち並び、道路はどこもかしこも車でゴミゴミしていて都会に等しいだから、田舎と言うには圧倒的に無理がある）まで避暑と前述にもあつた通り先祖供養を兼ねて遠出しており、昨日帰って来たばかりだ。

それは毎年の行事だからであつた訳なのだが、そもそも夏休みなんだからそうそうSOS団の連中とも会う機会はなく、当たり前と言えはその通りである。それなりに満足してる頃合いだ。

「にしても」

俺は呟き、どういふ訳だか俺はテレビのリモコンを手に取り、チャンネルを回したとき、部屋のどこかに隠しカメラでも仕込んであるのかと疑うべき事態が発生した。

正にベストタイミングとしか言い様のない無駄のなさ、電話が着信音をかなり立て始めやがったのだ。

余地能力に目覚めてしまったのか一瞬考え、

「誰だ。面倒くさい」

と言つて放棄する。

バカらしい。

「やはり嫌な予感が的中したな。何だつてんだ！」

表示されてる電話の主は涼宮ハルヒに相違ない。

スリーコールほどの間を持たせた後、何となく咄嗟に通話ボタンを押した。

ハルヒが何を言い出すのか既に解っているような気分がして自分を訝る俺。

「今日あんた暇でしょ」

と、ハルヒ。

* 続く *

第15話：エンドレスエイト（後書き）

お墓で花火だなんて罰当たりな！！と思ってる方いらっしゃいませんか。

長崎県では盆に墓で花火をするという風習があるのです。

それでも嘘だと思う方は『長崎に来ちゃった』という関東から引越して来た作者主人公が長崎独自の風習に次々と驚かされる実録漫画を参照のこと。

第16話：エンドレスエイト2

「2時ジャストに大塔駅に全員集合だからちゃんと来なさいよ」

と、言ったきり、あっさり切っちまいやがった。

時候の挨拶も抜きならハローもなしだ。

ついでに出たのが俺かどうか確認すらしやがらねえ。

更に言えば、俺が今日が暇だと何で解るんだ。これでも俺は…まあ、何の予定もない訳だが。

再び電話が鳴り出す。

キヨン「なんだ」

ハルヒ「持参物を言い忘れていたわ」

早口な声が続ってくるべきものを告げて、

「あんたは1万円程度の充分なお金を持って来ること。おーばー」
切れた。

俺は電話を放り出して首を傾げた。

何だろう、この夢の続きは。

音声がテレビから響いて反射的に目を遣ると、「テラネ屋」の司会

の寺根誠司氏が東京にあるキー局・日本テレビのスタジオに居る見
る限り美人な容姿をした女性ニュースキャスター、丸岡氏と雑談し
ている。

過ぎ去った日付に罰印を付けたカレンダーにも目を遣った。

夏も終わりが近い。

扇風機を回して網戸だけ閉めた窓の部屋に、アブラゼミの大合唱が
網戸の網から余裕で入って来るようにして響いていた。

「しょうがねえな」

しかしハルヒの奴、このクソ暑いのにいったい何をしようってんだ？

俺は動く気全然しないぜ。

本編では夏休みが始まるや否や合宿と称して俺たちを変な島に連れ
て行ってたなあいつ。

そう内心でブツブツ言いながら、俺は言われた通りブツを出すため
に洋服やら下着やらが豊んで収納してある引き出し式箆筒へと向か
った。

*

「遅いわよ、キョン。もつとやる気を見せなさい」

ハルヒ涼宮が、ご機嫌さんな顔で俺に人差し指を突きつけた。

こいつは何も変わっちゃいない。

「みくるちゃんも古泉くんも、あたしが来る前にすっかり到着してたわよ。団長を待たせるなんて、あんた何様のつもり？こつちの方言でくらすされるわよ！ペナルティよ、ペナルティ」

くらす＝殴る。

集合場所に現れた最後の人物は俺だった。

ちゃんと15分前に来てつていうのに、他の面子は急なハルヒの呼び出しを予め解っていたような速度で集合したらしい。

お陰で毎回俺が奢る破目になるんだが、もう慣れたし諦めたね。

所詮一介の一般人たる俺が、この特殊な背後関係を持つ3人を出し抜くことはできはしないのさ。

俺はハルヒを無視して、片手を上げた。

「待たせてすみませんね」

他の2人はともかくも、この人にだけは言うておかないといけない。上品なりボン付き帽子の、

「大丈夫です。あたしも今来たところ」

と、朝比奈さん。

何か期待していいようなモノが入っていきそうなのだが、横から邪魔

者が声を割り込ませてきた。

「お久しぶりですね。あれからまた旅行にでも出掛けていたんですか？」

古泉一樹が輝かんばかりに白い歯を見せてつつ俺に向かって指を立てた。胡散臭い笑顔は夏休み半ばになってもそのまま代わり映えしないようだ。俺は古泉の明るい偽善者面を経由して、視線をその横に転進させた。

まるで古泉のかげみみたいに立っているのは、長門有希の無情な姿である。

高校の制服を着て、汗一つかかずに直立しているのも最早お馴染みの光景だ。

汗腺があるかどうかも疑わしい。

「…」

動かないネズミのおもちゃを見るような目付きで俺を見上げ、ゆるりと首を傾げた。

会釈のつもりかな。

「それじゃあ、全員も揃ったことだし、出発しましょ」

ハルヒが声を張り上げる。俺は一応の義務感にかられて訊いた。

「何処に？」

「コーノンの前にある遊ぶ所のカラオケに決まってるじゃないの。失った時間は取り戻すことは出来ないのよ。高3になったら受験勉強やらどこに就職するかやら色々と忙しくて遊ぶ時間ないのよ！だから今の内にめいっばい遊ばなきゃ」

いつもの調子で、ハルヒは誰の意見にも耳を貸すつもりがないようだった。

ハルヒ「てか暑いしほんとはプールにしようかと思っただけどまあいいか。歌いたい気分だし」

基本的に俺以外の3人はハルヒに意見するなどという無駄な行為をしないので、毎度耳を貸されないのは俺の意見だけということになる。常識的に考えて理不尽そのものだが、確かに常識的な人間なのは俺だけだからそうなる運命なのかもしれない。いやな運命だな。

*

川棚の新百津地区の新百津納涼大会も余計な出し物はせずにカラオケ一色にしたらどうだ。

妹曰く数石の夏祭りなんか出し物は全てカラオケ一色らしい。

俺が中2のとき、新百津納涼大会で近所に住む長身でがっしりした宮城良之みやぎよしゆきがついていう人が『星降る街角』(・83)という曲を歌った。その一部始終をビデオカメラに撮影して正解だったと思う程宮城さんは歌うの上手い。

その後もそのVTRを繰り返し再生して見てたので歌詞をほぼ全部

憶えていたから俺も『星降る街角』を歌った。

歌詞の中に『嗚呼恋の夜』・『あの街角』とあるが

それに続けて

「夜（×4）長い夜」

「角（×4）曲がり角」

ハルヒに言わせた。

古泉や朝比奈さんはドラマや映画の主題歌、ハルヒはアイドル声優兼歌手の野平綾の曲を歌い、長門は『雪、無音、窓辺にて』を歌っていた。

ドリンク類は全て俺の奢りだったってのが痛いが…

* 続く *

第17話：エンドレスエイト3

店を出た後、歌い疲れた俺は背伸びをする。すかさず、

「これからの活動計画を考えてみたんだけど、どうかしら」

破いたノートのA4紙切れを突きつけるハルヒ。

「何の真似だ？」

俺の質問にハルヒは自慢たらしい表情で、

「残り少ない夏休みをどうやって過ごすかの予定よ」

「誰の予定表だ」

「あたしたちの、SOS団サマースペシャルシリーズよ。ふと気付いたのよ。夏休みはもうあと2週間しかないのよね。愕然たる気分になったわ」

ハルヒの手書き計画書には、次のような日本語が書いてある。

『夏休み中にしなきゃダメなこと』

・カラオケ

・すべらない話

・花火大会

・バイト

・バッティング練習

・肝試し

・その他

夏とは関係ないものが書いてあったぞ。

『すべらない話』って何だ。マニアック過ぎるだろ。

もしかしてすべったら罰金なんて言うんじゃない？ハルヒの事だから

カラオケには大きなバッテンマークが重なってる。どうやら終了済の印らしい。

するとだ、あと以下これだけのメニューを2週間足らずでこなさないといけないわけか。しかも「その他」って何だ。まだ何かするっていうのか。

「何か思い付いたらするけどね。今んところはこれくらいよ。あんたは何かしたいことある？みくるちゃんは？」

「えーと…」真面目に考える朝比奈さんに、俺は横目を使ってメッセージを送る。あまり突飛なことと言わない方が…。

「あたしは金魚すくいがいいです」

「オツケー」ホームセンター

と、ギャグを交えながらハルヒは持ってたボールペンに新たな一項目を付け加えた。

更にハルヒは長門と古泉の要望も聞こうとしたが、長門は黙って首を振り、古泉も微笑みながら固辞した。正しい選択だな。

「明日から決行よ。明日は佐世保駅に集まること！佐世保シーサイドフェスティバルがあるから」

NBC長崎放送（TBS系列）のローカルCMで流れてたから、それを見て知ったんだろう。

「金魚すくいも忘れないでね」

上機嫌にハルヒは宝島の在処を示す地図でも仕舞うような手つきでノートの紙を畳んだ。

そして大会間近のジョガーのように走り去っていた。

明日に備えたぎる思いを溜め込んでおくつもりなのかもしれない。

どうせ爆発するならじわじわじゃなくて一発ドカンといってもらいたいね。破片を回収する手間が省けていい。

JR大塔駅で俺と長門は長崎方面、ハルヒと俺以外の団員人は佐世

保方面（ハルヒは清水中へ校区）、朝比奈さんは佐々、古泉は後から転校して来てるから不明だが途中迄同じ方向ってのからして、何処に住んでるのはか佐世保日宇以西か北松地区に絞られる。長門は早岐の広田で俺は川棚）のJRに乗り、ばらけて解散し、車内で早岐駅に着く迄の間にドアの辺りがケータイをいじったり読書する学生やらでごちゃごちゃしてる中、ほどよく離れたところを見計らって俺は1人の背中を呼び止めた。

「長門」

俺の声に、夏用セーラー服を着た有機ヒューマノイドが振り返る。

「…」

無言の無表情が俺を見つめ返す。拒絶することも受け入れることも知らない。無機の双眸が白い顔の上で開かれていた。

変な感じになった。長門がノーエモーションなのはいつでも何処でもだが、具体的に指摘は出来ないものの今日の長門は何かおかしいものがあるようだ。

「いや…」

呼び止めたはいいが、よく考えたら言うべき言葉がないのに気づいて俺は少しばかり狼狽した。

「何でもないんだけどな。最近どうだ？元気やってるか？お前ん家TVQ映るか？」

なんてバカな事訊いてるんだ俺は。

長門はパチリと瞬きをして、分度器をして、測らないと解らないくらの頷きを返した。

「元気。TVQって何？私は基本TV見ないから解らない」

「そうか」

「そう」

「元気」っていう割りにほんの少ししか動かない凝固顔が、殊更に固まっているような…いや逆か、変に緩んでいるような…。

何でそんな矛盾する意見が出てくるのか俺にも解らん。人間の認識力なんかそんなものじゃないか？

と言って逃げておこう。

結局それきり言葉は続かず、俺は適当な別れの言葉を漏らすように言っ、何故か逃げるように別の車輛に移る。

なんだか解らないが、そうした方がいいように思えたからだ。

JR早岐駅で長門が降りるのが見え、見えなくなるまで見送った。

主要駅だけあって他の小規模な駅と違い、停車時間が非常に長くて退屈だった。

そして川棚駅前の駐輪場に駐めてあった自転車に乗って家まで戻り、晩飯食って風呂入ってテレビを観ている内に寝た。

*

翌朝、俺から惰眠を奪い去ったのはまたしてもハルヒからの電話である。

時間は今夜。

場所は佐世保駅みなと口広場。

だそうだ。

「みんなで浴衣を買いに行くの」

と、ハルヒ。

スケジュールの手始めはそうなっているらしい。

「ホントは七夕のときにきせたかったんだけどウツカリ忘れてたのよ。あの時のあたしの方がどうかしてたわ。日本に2ヶ月連続で浴衣着る風習があつて大助かり」

誰が助かったんだらう。

因に今は真っ昼間である。

夜に集まればいいのに早すぎだらうと思っていたらそういつことだつたらしい。

佐世保駅と、昨日とは集合場所が違うだけで、ハルヒは威勢良く、

朝比奈さんはふわふわと、長門は無言で古泉は二へラ笑いで、言わずと知れたお馴染みの面子。

「みくるちゃんも有希も浴衣持ってないんだって。あたしも持ってない。この前4か町を通り掛かったら下駄とセットで安いやつが売ってあったわ。それにしましょう」

朝比奈さんと長門の立ち姿を眺めつつ、俺は女連中の浴衣姿を想像する。

と言っても勘違いしないでくれ。下心があるわけではない。夏だから。

俺と古泉は普段着で行かせて貰うことになった。

浴衣を着るのは旅館くらいで充分だ。

男の浴衣姿なんか見てもつまらん。

「そうね。古泉くんなら似合いそうけどあんたはね」

ふふんとハルヒは笑って俺の上から下まで見直し、

「さ、行きましょ」

持参していた団扇を振り回しつつ号令をかけた。

「いざ、浴衣売り場に！」

婦人服衣料の量販店に飛び込んだハルヒ。

*
続
く
*

第17話：エンドレスエイト3（後書き）

因に住所／出身中学…

谷口：清水

国木田：川棚

鶴屋さん：早岐

朝倉涼子（既に死んでるので、ここでは第14話でのキヨンの台詞のみ）：小佐々

第18話：エンドレスエイト4 (Final)

そんなハルヒは、朝比奈さんと長門の分も勝手に選んでずかずか試着室へと向かった。

長門以外の2人は着付けの仕方を知らなかった為、女性店員に着せてもらうことになったのだが、これがやけに時間がかかる。

俺と古泉はただあてもなく女物の洋服が立ち並ぶ棚の周囲をウロウロしてようやくのこと、3人が鏡の前に出揃った。

ハルヒは派手なハイビスカス柄で、朝比奈さんは色とりどりの金魚柄、長門は素っ気なく地味な幾何学模様柄であった。

各々(それぞれ)の浴衣姿は各々にに趣があって、俺は何故だか視線を向ける先に困った。

女店員は「どつちがどの娘の彼氏なのかしら」と言いたげな表情で俺と古泉をちらりちらーりと眺めているが、おあいにく様と言っておきたい。

古泉はともかく、俺は単なる付き添いさ。

ここは残念だと思ふべきところなのかね。

まあ俺は朝比奈さんの浴衣バージョンを拝見出来ただけでももうよかばい。

ハルヒも長門も似合ってる、それはそれで風情があったけど。

別に言葉に出して言うべきものでもないぞ。

「みくるちゃん、あなた…」

ハルヒは朝比奈さんを見て我がごとのように喜んでるようだった。

「可愛いわ。さすがはあたしね。あたしのやることに目の狂いはないのよね！あなたの浴衣姿にこの世の95%の男はメロメロね」
残りの5%は何なのか訊いてみた。

「この可愛さはがちなゲイの男には通用しないの。男が1000人くらいいたら5人はゲイなのよ。よく覚えておきなさい」

覚える必要性があるとも思えない。朝比奈さんも満更ではないらしく、フィッティングルームの鏡の前でぐるりと回りながら自分の衣装を確認している。

「これがこの国の古典的な民族衣装なんです。ちょっと胸が苦しいけど、でも素敵…」

ハルヒの押し付けのコスチュームの中ではトップクラスにマシな代物だ。

バニーほど露出してるわけでもなければメイドほど普遍性がないわけでもないから、この季節に限っては町中を歩いてても別段問題視される衣装でもない。

夏の風物詩みたいなものだ。おまけに激似合ってるし。まるで俺の妹が浴衣着てるような雰囲気すら漂っていて、それにしても帯の上

部分がアンバランスに膨らみ過ぎているが可愛ければ何でもアリだ。すべてを許してしまえる神々しさが朝比奈さんの体軀から放出されている。喩え彼女が銀行強盗の主犯となったとしても、俺は弁護側の席に座るね。

ハルヒだとかは知らんばってん。

*

日没前なのに既に賑わって祭会場には、どこからともなく市民たちが湧き溢れ蠢きあっていた。

よくもまあこれだけ集まれるものだ。

「わあ」

素直に感嘆してるのが朝比奈さん、

「…」

どうやったって無反応なのが長門である。

「ん!？」

まただ。デジャブっぽい感覚が偏頭痛のように登場した。

「お前らタバコ吸ってたやろ？」

徘徊に来ていた健八が宮本や啓文と2人で来ていて、喫煙してた光

汰を説教していた。

「はあ？何の事ですか？」

「とぼけるな。見とったぞ」

「バカやろ。石山田」

と、啓文。

「はあ？何の事ですか？吸ってませんって」

「いや見とったぞ。こがん事は一教師として見過ごす訳にはいかん」

健八がタバコをくわえながらだるそうにズバズバ言う。

光汰「タバコ吸ってる人にタバコで注意されても説得力ゼロですけど」

よく気付いた。

「残念でした。これタバコじゃなくてペロペロキャンディーぞ不二家のパコちゃんのペロペロキャンディー」

ええ！

健八はくわえていたタバコ…いやペロペロキャンディーを取り出す。

「先生！何でキャンディーなのに煙が出るんですか？」

宮本がもつともな事を訊く。

「ペロペロキャンディーはレロレロキャンディーとも言っちゃうし、レロレロしとるけん煙の出ると！」（どっかで聞いたような…）」

「…はい」

無理が通れば道理が引つ込むってのは正にこの事だ。

「何も見てない俺は何も見てない」

俺はそう言いながら団員4人を違う所に移動させる。

「ちよつと何するの!？」

当然ハルヒがそう言うのも無理ないが。

「朝比奈さん、金魚すくいしたいって言ってましたよね。あそこに金魚すくいの屋台がありますよ」

指を差しながら言う。

ここに来るのは久しぶりの筈なのについて最近来たような気もする。

何か変だ。

「そういえばそうね。みくるちゃん、あなたがやりたがってたわよね。じゃんじゃんすくいなさい。思い出金はプラス200ポイントだからね」

勝手なルールを決めて、ハルヒは朝比奈さんの手を引いて金魚すく

いの水槽へとダッシュしていく。

「僕たちもやりましょうか。何匹救えるか、一勝負いかがですか？」
ゲーム好き古泉が提案し、俺は首を振った。金魚なんか連れて帰っても入れる鉢がない。

それよりも、そこかしこで食欲増進を後押しする芳香漂う屋台の方に興味があるね。

「長門はどうだ？何か食うか？」

笑わない目が俺を見つめ、緩やかに視線が移動。そこにあつたのはお面売り場である。

そんなものに興味があるのか。コイツの趣味も解らないな。

「まあいいか。とりあえず一周してみようぜ」

スピーカーが唸るように響かせているイージーリスニングみたいな祭囃子。

それに誘われるように、俺はお面の屋台へと連れて行くことにした。

少しばかり古泉が邪魔だと感じつつ。

「大漁やったばってん、たくさんもいらないうつて言うから1匹だけもろうて来たわ。みくるちゃんは全然すくえなかつたけど。あたしの分はあげたのよ」

と、ハルヒ。

朝比奈さんの指にぶら下がっている小さなビニール袋では、何の変哲もないオレンジ色の小魚がボクっとしながら顔で泳いでいた。

紐をしつかり握りしめている朝比奈さんの仕草がいちいち可愛らしい。

もう片手に握りしめてるのは林檎飴で、俺は妹にも買ってやるうかと考えた。

たまには妹のご機嫌気取りも良いだろう。

ハルヒは、左手でヨーヨーと称された水風船をボンボンさせながら右手にたこ焼きのトレイを捧げ持ち、

「1個だけなら食べてもいいわよ」

と言って差し出してくる。あ、標準語に戻ってる。まあいいか。

俺がソースでベタベタのたこ焼きを味わっていると、「あれ、有希。そのお面どうしたの?」

長門はたこ焼きから生えてるように刺さってる爪楊枝をじっと見つめながらそう呟く。

長門が頭に横掛けしてるのは光の国出身の銀色宇宙人のものだ。

何代目なのかは俺も知らないが、宇宙人だけに何か波長の重なるものがあつたんだろ。浴衣の袂からガマ口を出して所望したのがそれだった。

その後も昆虫採集やバイト、花火大会など、SOS団サマーイベントを行った訳だが、しつこいようだが何かおかしい。15499回

も8月17～30日が繰り返される事になるのであった。

*

8月30日正午過ぎ。カスト大塔店での出来事である。

「これで終了。明日は予備日に空けておいたけど、そのまま休みにしちゃっていいわ。また明後日部室で会いましょう」

席から腰を浮かせてハルヒはすっとテーブルを離れ、俺は理不尽な焦りを覚えた。

まだ充分じゃない。ハルヒはこれでもう夏休みが終わっていいとは、心底思っただけ。これがすべての原因だった。

いくら言葉で表明しようと、胸の内は隠せていない。ハルヒの内面、奥の奥のそのまた奥底は、これでもまだ満足な納得を獲得出来ないのだ。

このままハルヒを返しちゃんか。そういう事したら何も解決しないんだ。

古泉が発見して長門が保証した繰り返される2週間、15499回目がやって来る。

だが、目的は何なんだ。

言葉が勝手に出てきた。

「突然喚き始めた俺に、店内の全員が硬直した。

「なに言ってるの?」

ハルヒは明らかに変な奴を見る目で近寄ってきた。

「あんたの課題?宿題って?」

「俺は夏休みに出された宿題を何一つやってない。それをしないと、俺の夏は終わらないんだ」

「バカ?実業はレベル低いから宿題はごく少数でしょ」

本当に馬鹿ん見る目で嫌がる。構いやしない。

「おい古泉!」

「は、何でしょう」

古泉も呆気にとられてるようであった。

「お前は終わっているのか?」

「いいえ、バタバタしてましたからね」

「じゃあ一緒にやろうで。長門も来い、お前もまだだよな」

長門が答える前に俺は人形劇のパペットのよう口を開けてる朝比奈さんに手を差し伸べた。

「ついでだ。朝比奈さんも来てください。この夏の課題を全部終わらせるんです」

朝比奈さんは3年生なので俺たちの宿題とは関係ないが、そんな今は関係ない。

「で…でも、その、どこへ？」

「俺ん家でやりましょう。ノートも問題集も全部持ってきて、纏めてやっちまおう。長門、古泉、できるところまで俺に写させる」

古泉は首肯した。

「長門さんもそれでいいですか？」

「いい」

半端なおかつぱ頭がこくりと動き、俺を見上げた。

「よし。じゃ明日だ。朝10時頃にしよう。1日でどうにかしよう」
俺が氣勢を上げてると、

「待ちなさいよ！」

腰に手を当てたハルヒが、テーブルの横でふんぞり返っていた。

「勝手に決めるんじゃないわよ。団長はあたしなのよ。そう言っときは、まずあたしの意見を窺いなさい！キヨン、団員の独断専行は重大な規則違反なの！」

ハルヒは俺を睨み付け、高らかに叫んだ。

「あたしも行くからね」

第19話：修学旅行

修学旅行という高校生活最大イベント。

東京と長野に行くことになった実業だが、空港に行き掛けのバスの中で、前瀬がニット帽を目が隠れるまで被って寝ている所をデジカメに撮影したりするなど楽しんでいた。

が、俺に悪夢が襲う。

長崎空港から東京の羽田空港に向かう飛行機に乗ってる時気圧の影響か、左耳に痛みが走る。

最初は耐えられる程度だったが徐々に激しくなる。

いてえ…あまりの痛さに弁当が全然美味しいと思えん…

各自配布された幕の内弁当を食べてる最中だった。

「（いてえ…気圧の影響か…エンジンが半端ないくらいの爆音だからか…）」

と、健八。

健八 & amp; キョン「（耳が痛い…）」

内川とA組に居る南西爽香が、なんせいさやか座席を立ってトイレ行くのかうろち

よろしている。

ハルヒにも絡んでいた。

目障りだから早く座席に戻れ。

長門と、いつも机に座り一人でガンダムの小説を読んてる大岩も相変わらず前者はマニアックな難しい本、後者はガンダム小説の読書に励んでいた。

*

東京に着き、バスから東京の観光名所を眺める。

東京タワーやフジテレビが見えた為、デジカメに収める。

*

関越道を走行中、カラオケを歌う事になったが、ここは冨汰や内川に任せるとする。

冨汰がS M A Pの『世界に一つだけの花』を歌おうとして、

「みんな盛り上がっていこうぜ」

B G Mは流れるもののモニターに画面が出ないので冨汰の今の台詞は空回りに終わったという空しさ。

このバスはガイドさん曰くかなり古いようだ。

それでも冨汰は、

「一旦コマースャルに入りまーす」

おちゃけているのであった。

横を見ると前瀬も谷口も爆睡してて、

後ろを見ると健八が『ポケモンSP』33巻を読んでいた。

画面が出ないがBGMは流れるから気にしないでと言って、内川が大塚哀の『さくらんぼ』を画面なしで歌う。

忘れた部分は鼻唄で誤魔化してたから知ったかぶりである事が窺えた。「内川、今の29点。やけん赤点。にしてもヒカリ、アニメ本編はウザイっていう傾向が強いとに、この漫画じゃかなりおしとやかやんけ」

歌い終わった内川に総合得点と称して勝手に点数を付け、漫画の事でブツブツ独り言を言う健八。

志賀高原のホテルに到着したとき、左耳に激痛が走った。

痛い。気圧の影響だ。

でも着替えの入った大きな荷物を慌てて探したから、少しは和らぐものの、

健八「（耳が痛い。このまま大変な病気にかかって難聴なったりしたら最悪だア）おーいお前ら6：50から夕飯やからな」

左耳に手を当ててていたが耳痛を公にはせず、俺を含むB組の連中に話をする。

もう片手にはケータイ小説を読んでいる最中のケータイが。

ちらつと除くと、ありがたい事に俺が書いた『健太先生』を読んでいたのである。

内容がグダグダなのでお気に入りかどうかは解らないが。

健八が左耳に手を当ててるのに気づいてたのはどうやら俺だけだったらしい。

「土産は家族には勿論、みくるちゃんの分も買っていかなきゃね。健ちゃん、ここで土産っていつ買えるの？」

と、健八に訊くハルヒ。

健八「明日、風呂からあがった後」

*

リンカーンを見ようとしたが部屋が一緒になった鉄橋にチャンネル権を奪われ、奴はリンカーンが嫌いらしく

「これの何処が面白かとや？」

と言ってチャンネルを回しやがった。

あのなあ……このテレビはお前だけのテレビじゃねえんだぞ！ふざけるなよこのカッコつけ嘘つき野郎。

*

辺り一面白銀の雪の世界が広がるスキー場。

スキーウェアに身を包んだ俺たちは若干であるが面白そうだと思っていたが、上手く滑れない。早くデイズニーランドに行きてえ。で家に帰ってシャミセンにモグモグしてえ。

ハルヒや長門を含む女子の班やB組のもう一つの男子の班、A組の古泉や宮本たちの班、及びそれ以外の連中は余裕で数センチの雪で埋め尽くされたスキーの斜面を余裕そうに滑走していた反面、俺たちの班はブレイキの練習ばかりで滑ることすらさせて貰えなかった。

こんなスキー研修には絶望した。

絶望した勢いでいっそのこと首を吊ろうかと思った。

堤や、2・D担任で社会教師、野球部顧問の高名要介（因にこの人はジャパネットたかなたかなあきらの高名明良社長と遠い親戚らしい）も次々と滑走していくのが見えた。

健八は面倒くさいと言って開会式の後ホテルに戻り部屋に籠ってTVを見てたそうだ。

*

この日（12月9日）は啓文の誕生日だったらしく、メシのとき、啓文や桜下、光汰らがワイワイ騒ぎながら冷や水を入れた湯飲みで乾杯をしている。

ほんとあいつらは調子良い。食べる間に先生や引率の人たちが話をする。

堤がマイクを手に、テーブルに座っている生徒全員に話していると啓文がコソコソ喋っており、それに気付いた堤が、

「啓文煩い。話聞いとけ」

面白言動を保ちながら啓文を注意する。

「…すみません」

堤には反抗出来ない啓文。

*

メシ食った後、谷口と部屋に戻ると、長谷川と前瀬と鉄橋が『MAJOR』を見ていたのである。

何もしてないのにTVが勝手に消え、またスイッチが入る。

前瀬「このテレビおかしかやろ」

確かに。

鉄橋「幽霊おるバイこの部屋」
縁起でもねえこと言うな。

長谷川「にしてもまじヤバいよなバットの折れたヤツのギブソンの腹に当たったけんね」

MAJORオタクで野球オタクだからな長谷川は。

するとそこに健八が来て、

「前瀬ちよつと来てみい」

だるそうにしながら前瀬を呼び出す。

*

暫くして前瀬が戻って来る。

「前瀬、何を怒られたんだ？」

と、前瀬に訊く谷口。

「1万円盗まれた」

何かさっき言ってたな。

また健八がやって来る。

「お前らその場に座れ」

するとそこに瑠や国木田が乗り込んで来るが

「大事な話ばしよるけんがシッシ」

と、逆手ねまき(っ)っていうのか？(をしながら2人に退去を命ずる健八。

俺と谷口がテレビに没頭していると、健八がテレビの方に近づき、

『ガシャーン』

テレビを足で思いつき蹴ってぶっ壊しやがった。

ひでえ…

谷口「何するんですか」

健八「こっちは話しよるとに聞かんでTV見よるお前らが悪かとやろうが。でもどうせこれ壊しても壊さんでも同じぞ。アナログやけんいずれにしても2011年7月には専用のチューナーを接続しない限り全く映らんことなるから。文句あつか!？」

「…いいえ」

だからって壊す事はないだろ健八つぁん。

「という訳で前瀬、ロビーに預ける前までは間違えなくあったとね」

「はい」「もしかしたら前瀬の早とちりもあり得るぞ」

となると…怪しいのは、ロビーの人だと思い、

「先生、犯人はロビーのオッサンだと思いますよ俺」

健八「そうか。俺も同じ事考えてた。あのハゲ…遊ぶ金欲しさに」

キヨン「つい出来心で預かってる財布を適当にあさくり」

健八「…で前瀬の財布に偶然当たった」

そしたら鉄橋も、

「成る程。だけんロビーは信用出来んけん財布預けなくなっさ」

初めからロビーを信じていなかった模様。

「ガチャ（ドアが開く音）、先生、何言ってるんすか。キヨンも鉄橋も、もしそんな事あったら信用問題に関わって、賠償も恐ろしい金額になるんだよ」

国木田が乗り込んで来て語り出す。

「そりゃ大変やん。国木田が言うのも一理あるけど、今大事な話しよるけんが外野は入って来んなつたろくがあああのロビーに立つとつたハゲ親父も白とは断定出来んつぞ！」

と、怒鳴る健八。

「うわぁ」

驚いた国木田は一目散に部屋を後にした。

「しょうがない。これからこの部屋の奴等の所持品確認を行う。全員荷物全部出せ」

楽しい筈の修学旅行が…でも修学旅行はこついった金の盗難事件も付き物だ。

仕方がないと言っても過言ではない。

「めんどいけど前瀬、お前の彼杵に居るお母さんに後で電話してやるから」

健八は前瀬に言い残し部屋を退去した。

上ジャーだけ着て下は短パンの長谷川が、うろちよろしている。

怪しい。

*

鉄橋はカリカリして、

「みんな座れ。金を盗んだ奴…オイは絶対許さん！」

俺も谷口も前瀬も座ってるのに長谷川は立ったままで、沈黙しNH

K教育の手話ニュースを眺めるように観ている。

「長谷川も座れさ。オイの言う通りせろさ！疑われたくなかったら前瀬、悔しくなかと。親が汗水垂らして稼いだ1万円ばどっかの誰かさんの盗んどるとバイ。長谷川さぁお前さつきから怪しい行動ばっかり取って」

長谷川は沈黙を続け、

鉄橋「何か言ったらどうや長谷川」

すると長谷川、

「ああ言ってやるよ。別座らんばっていう決まりはなかやる」

「何やその反抗的な態度は！班長はオイぞ」

「うっさかつさ！鉄橋。権力者みたいに偉そうにすると辞めてくれる！」

長谷川も鉄橋もタテつかれたくない一心でお互いムキになってるんだろつ。

鉄橋と長谷川の戦いの幕開け。

* 続く *

第20話：続・修学旅行

前瀬の財布から1万円が盗まれ、前瀬と部屋が一緒だった俺たち4人が疑いをかけられるという最悪な事態に陥っていた。

「許せんやん。親が必死で稼いだ金は盗むなんてさ。ウチは水商売でな、オイの父ちゃん得意先に頭下げに佐世保からわざわざ福岡まで行きよるっぞ」

「今は鉄橋の父ちゃんの話は関係ないやろ。もしかしたら前瀬の勘違いで、オイたちはその勘違いのせいでこがん目に遭つとる事になつとぞ」

鉄橋が言つても長谷川が言つても一理あり…か。

長谷川、さっきまで黙り込んでいたのにいきなり喋り出したから怪しい。

*

翌日、朝食のとき、堤がこれからの予定について話をした後啓文に、「では昨日12月9日が誕生日だったという山口啓文くん、いただきますの号令をお願いします」

これ全然誕生日の祝いになってねえな。

「手を合わせて下さい。いただきます」

堤、俺たちとタメだったら間違いないと啓文にボコボコにされてるね。

午前中スキーをしてバスで移動し、デイズニーランドに行った。バスの中で光汰と啓文が2人でEXILEの『時の欠片』、鉄橋がS.M.A.Pの『夜空ノムコウ』、白星が石原裕一郎の演歌（曲名忘れた）を歌った。

ただ、1つ驚いた事がある。白星は歌が上手い。人は見かけによらないな。

S・A・（サービスエリア）で何回かトイレ休憩をしながらのバスのドライブ。

*

途中、第2の東京タワーに相当するスカイツリーが見えた。

「はい。右手に見えるのが、東京スカイツリーです。高さは634m。完成は2011〜12年頃の予定だそうです」

と、ガイドさん。

*

千葉県浦安市の東京デイズニーランド。て、住所は千葉県なんだから正しくは千葉デイズニーランドだろ。

浦安は『浦安鉄筋家族』の舞台になってるんだよなあ

「デイズニーランドらしい風景やなあ」

と、大元寺。

入口まで歩いて移動を開始する。

「古泉、あの様子だと涼宮さんは帰りたくないみたいやからエンドレスエイトならぬエンドレストウエルブンが起きなければいいがな」

古泉と並んで歩いている。

「こればかりは予測不可能ですからねえ」

*

という訳で俺たちと一緒にの班は、国木田と、白星・末林・大岩・メガネかけた優等生でメシを全然食べようとしない田島レン。

国木田「コイツらが問題だからか：何で僕たちの班だけ先生の付き添いなの。健八はいいけどさ、何で川内まで付き添い？」

キョン「俺にそんな事聞かれても。問題なのは末さんだけだろ」

川内とは、自動車科教師で組担任で、メガネかけた中年の川内光広である。

「末林だけじゃなくて白星もだろ」

白星も問題児と主張する国木田。

人が多いのは予想していたが予想以上の混雑ぶりだ。

ここ（デイズニールランド）が相当大人気だつて事が伺える。

まず最初に乗ったアトラクションはビーターパンの空の旅というヤツだ。

人が多く、15分待ちだった。

そんな中、白星と川内が話をしていた。

「俺の実家大阪だからな。USJは何回か行った事あるぞ」

と、川内が言ったのが聞こえた。

その後、ウエスタンリバー鉄道、ベズ・ライトイヤーのアストロブラスターなどのアトラクションに乗って楽しんでいたが、一番楽しんでいたのは川内だけだったようだ。俺たちは全然つまらないし健八もだるそうにしている。

健八「先生、自由時間にしましょうか」

川内「そうですね」

土産を買いに行く事になった。

入った売店もやはり庶民たちで混雑していた。制服を着た学生（コイツらも修学旅行生だろ）も多く見受けられた。

国木田の買い物カゴにはデイズニーグッズがいっぱい溢れていた反面、俺は買いたいと思う品物が無い。菓子類しか思い当たらない。

俺はデイズニーキャラの被り物コーナーを眺めていが妹はチャラついていた物を嫌っているからやめとこつ。

妹はミニーの耳の被り物似合いそうな印象だけど性格が性格だからな。

そして意外な人物と出会う。

「あらキヨンくん国木田くん」

「か…神崎先生」

どういう事だ。死んだ筈だろ。表ではカナダに引越した事になっているが…

「カナダに引越したんじゃないかなかったですか？」

国木田が訊く。

「色々あつて帰ってたの」

何か怪しい。

キヨン「1人ですか？」

神崎「ダチ3人と来てるけどお土産買うから今別行動してる。そう
だキヨンくんちよつと来て」

えっ。どこ連れてくんだ。俺の手を引っ張って行く。

「ここに連れて来て何の用ですか？てかあんた死んだんじゃないの？」

連れて来られたのは入りくんだ所にあるトイレの前。

「フツツ私が岩に押し潰されたと思ってたでしょ。実はそれ、ギリギリの所で止めて、瞬間移動を使って逃げてたの」

死んだと思われてた奴が実はまだ生きていたというパターンか。

「キヨンくんを殺すのが私の目的だったの。だから…」

と言って服の内側のポケットからピストルを取り出して、銃口を俺の方に向ける。

「死んで」バーン

何の躊躇なく撃って来やがった。

俺は慌ててかわして頬から少し流血する程度で済んだが、それからも容赦なく銃撃してくる。

「うわぁ何なんだ」

俺は行き止まりの壁に追い込まれ、

「袋の鼠のようね。もう逃げられないわよ」

「待て！話し合おう」

「嫌い」バーン

もうダメだと思ったそのとき

神崎の銃撃により右肩から流血して、そこを左手で抑えてる宮本が立ちほだかり俺を庇ってくれた。

* 続く *

第20話：続・修学旅行（後書き）

健八は基本一話完結なのに長編続きになってしまってますいません。
修学旅行編は一応次の話で完結する予定です。

第21話：神崎再び

「大丈夫か？宮本。ありがとうな。庇ってくれて」

俺は自分のせいで1人の人間に怪我を追わせたことで罪悪感を抱いていた。

「にしても重傷じゃねえか。ごめんな俺の為に」

「何でお前が謝る必要があるんだ…悪いのは神崎だろ。俺はアンドロイドだから銃で撃たれたくらいで死んだりはしないよ」

俺はけん銃（ネットの通販で買ったヤツ）銃刀法違反で罰されますので買うのは特別な許可を得てから」を、宮本は、エアガンを改造したものと思われる銃を取り出し神崎と銃撃合戦開始。

「私はけん銃の使い手だから小僧2人が私に勝てる訳ないじゃない。降伏するなら今の内なのに」
まるで初めから勝利の栄光が自分に向いているとあぜ笑う神崎。

俺と宮本は2手に分かれ、曲がり角に隠れ、チャンスを狙う。

「ん！？」バーンバーン

さすが神崎：反射神経が良いからちよつとでもガサゴソすると容赦なく撃つて来る。

俺も銃撃をする。

俺の撃った弾が神崎の腕に当たった。

神崎は流血している腕を押さえながら、

「あのキヨンという小僧：なかなかやるなあ…だがそう簡単にやられる私じゃない」

は艶やかな髪と口紅により紅く輝く唇の神崎。

かなりヤケになってる。

*

「みんな何やってんだ」

人混みで溢れかえってる中、12月で、売店通りの中心に聳え、飾り付けられたLEDがピカピカ輝くように光っているクリスマスツリーを眺めながらぼやく国木田。

するとそこに、

「あっお前B組の国木田って奴やる」

F組の上沢が国木田に声をかける。

上沢「末林のどっか行きよったバイ」

国木田「うそ。アイツ暴れんやつたらいいけど」

最悪な事態を考え、さっきまでキヨンと買い物をしていた売店に走って入っていく。

『バンバンバンバン』

『バンバンバンバン』

俺 & amp; 宮本 VS 神崎が激しい銃撃戦をしていた。

キヨン「あれっクソッ弾切れだ。予備のやつも底を尽きてしまったよっだ」

宮本「ええ」

「もらった。死ね」

俺の胸を神崎が放った弾が貫いた!?

その場に倒れてしまう。

「キヨン!?!」

は思わず叫んでしまう宮本。

俺はこのまま死ぬのか…出来ればもう一回朝比奈さんのメイド服姿や浴衣姿を拝みたかった。

「次は貴方の番よ宮本」

神崎は宮本に向かって弾を放つもかわし、神崎に突進してチヨップで銃を振り払う。

俺まだ死にたくねえよお。

「お前」

「甘く見てもらっちゃ困るぜ」ボコッ

踵で神崎の頬を蹴る。

「いったあ（何コイツ…私みたいなアンドロイドに、あんたみたいな普通の人間が勝てるっても…私と互角に勝負できているから、あの宮本勇氣という少年…強い）」

神崎みたいな強力なアンドロイドと互角にやりあってる。さすが宮本。強い。

2人共頭から血を流し、ボロボロである。

そして宮本と神崎はドンパチ殴り合った。

「ハアハア」

「隙やり」ブン

宮本が息を乱してる合間に攻撃しようとするも、俺は瞬時に神崎の後ろに回り、

「何」

『ボカ〜ン』

神崎…コイツが悪い奴になったのは何かあったからだろう。

「（あゝあ。またしても殺そうとして返り討ちに遭っちゃった…私いつからこんな殺意に燃えるようになってしまったのかなあ…私が教師になったのもグレートなティーチャーっていうのに憧れたからなのよねえ。毎日毎日忙しくていつの間にか大切な物を無くしちゃって、楽しんでる生徒に嫉妬心を抱くようになって…私の目的はグレートなティーチャーになる事だったのに。やがて殺意が不思議なオーラが漂っているキヨンに向いちゃった訳なのよね）」

グレートティーチャー神崎…略してGTKか。

「強いわね宮本くん。この恨み一生忘れないから…」

と言って、神崎は砂になって消えた。

宮本「おいキヨン！しっかりしろ！目を覚ませ。主人公が居なかったらこの小説はストーリーが成り立たねえだろ」

倒れてる俺の体を揺すりながら言った。

「ン…ん！？宮本」

撃たれてるのに何事もなかったかのように起きあがった。

宮本「弾が胸に当たったんだぞ」

キヨン「丁度弾が当たった所に、暮石があつてな、要するに俺、これによって命を救われたって訳だ」

その暮石には当然ながら少し穴が空いていたが。

キヨン「もしこれがなかったりずれてたら俺今頃あの世だったからな」

「なるほど。オマエ運がいいな」

こんな偶然ってあるんだ。

*

デイズニールランド上空に打ち上げ花火があがってる中、

「キヨン、今まで何やってたんだ？」

国木田が呆れながら言う。

「ちよつと急用でな」

適当に誤魔化す。

「俺のデジカメ。メモリーが満杯になっちゃった。まともに撮れたのは1枚だけやった」

デジカメの予備のメモリーカードを持って来ればよかったと後悔する健八。

キヨン「俺も撮ったんですけど全部失敗しました」

川内「オイも花火5枚撮ったけど。5枚共全敗やったからな。君、^{キヨン}名前何やったっけ？」

俺の本名を思い出そうとする川内。

キヨン「ああ俺の名前……」

健八「コイツはキヨンでいいです川内先生」

俺を指差しながらそう促す。

川内「そうか。じゃあキヨンくん」

本名言おうとすると決まって邪魔される。

*

谷口と前瀬はズティツチ、鉄橋はデナルド・ダック、瑠はミツキーマウスの被り物、ハルヒと長門はミニーの耳飾りを購入して被っていた。

このとき後者2人は結構似合ってたが、前者4人に関しては正直若干引いた。

*

ホテルまでは、バスで移動した。

*

味の素工場見学をした。

2班に別れ専用のマイクロバスで移動して回った。

色んな凄いメカに翻弄されて面白かったが、疲れた。

飛行機の中で耳にイヤホンを付け、ラジオ放送みたいなOAを聞きながら爆睡していた。

ただ座席が啓文の真後ろだったから、ビビったのだった。

ハルヒの様子もみえたのだが、外の風景に浸っていた。ポニテにして。ちよつと萌えた。

途中機体が揺れたが、無事福岡空港に着陸したものの、マジでヒヤリとしたぞ。

西九州自動車道の波佐見有田I.C.で降りた後、既にお袋が迎えに来ており、丁度自宅が波佐見にある山小屋を自宅の車で途中まで送って行ったのだった。

*

「教え子からは健八先生という愛称で親しまれてる嶋田健八か。興味あるな」

新たな敵キャラ！

茶髪で眼鏡かけた青年・豊嶋渉。何とコイツは英語教師でバスケット部の顧問の豊嶋の兄なのだ。

「神崎、死んだようだな」

神崎とは仲間らしい。

健八の写真をダーツにしながらすつ言つ。

第21話：神崎再び（後書き）

キャラ崩れしてる部分が一部あっても気にしないでください。

誤字脱字などがありましたら「糞作者ミスがあるぞ」と教えてくださ
さい。

第22話：謹慎

「はぁ部活疲れたア腹減ったな。何か買おう」

部活帰りの鉄橋。

小腹が空いたのかたこ焼きをかう事にした。

鉄橋は土本が経営するワゴン車のたこ焼き屋に赴き、

「すみません！たこ焼き1丁」

「へーい」

鱈子唇で白髪混じりの土本がたこ焼きを鉄製の先端が尖った小物で焼き始める。

そんな中鉄橋が、

「あんた人生モツサリしてたんだろ」

と、冗談半分で言っただつてもりだつたらしいのが、

「おい！お前なめてんのか」

土本が鉄橋の胸ぐらを掴む。

鉄橋「すまん…冗談で言っただつたのにまさか本気するとは」

「見知らぬ人にいきなり失礼やぞ。言って良いことと悪いことのあるじゃろつが」

土本はカンカンである。

土本「謝れ」

鉄橋「ええ」

土本「よかけん謝れ」

鉄橋「ちよつと苦しいですよ」

もうダメだと思ったそのとき、

「お前ら何やってんだ。やめろ」

茶髪で身長が182センチ位で顔に傷がつき、葉巻をくわえたいかにも悪そうな男が止めに入る。

「はっきり言うけどレベル低いぞ。何があつたんだ？」

土本も鉄橋も不機嫌気味である。

健八もやって来る。

「何やってたんだ？」

健八がそう訊くのも無理はない。

「この高校生とたこ焼き屋のオッサンが喧嘩してたんです」

「たこ焼き屋！？…土本さん！高校生って…鉄橋！」

もう行ってしまつて遠くではっきり見えなかったが、特徴的な髪型で特定出来た。

「土本さん、あんな奴の言うこと気にするな。ついポロつてあがん台詞のでとしまつたんだよ」

土本に鉄橋の事を諫めさせようとする健八。

健八「てお前誰だ？」

タイムンしていた土本と鉄橋を止めに入った青年に訊く。

「俺はただの通りすがりです」

彼の名は黒子ラクガン。

喧嘩をしてる人を見かけたら仲裁に入るなど人情深い奴だが正体は豊嶋兄とグルになつてるテロリスト。

*

桜下は生徒指導室のテーブルの椅子にポケットに手を入れ、行儀悪い姿勢で座っていると、社会教師で空手部顧問で筋肉ムキムキな生徒指導の村下むがなかひろしという愛称の村中寛が入つて来て、

「桜下、お前何ば偉そうにポケットに手ば突っ込んでとや？横着かぞー！」パーン

村中は桜下の横着過ぎる態度に頭にきて桜下を思いきりひっぱたく。

「お前修学旅行終わって早々謹慎になりやがって、留年してまた修学旅行行かんばたいな」

「別いいですよ。楽しかったし」

「1コマの学年と一緒に勉強するショックで旅行は楽しむどころじゃなかと思うばってん」

上記の展開の経緯はというと…

桜下が学校にケータイを持って来たのをマナーモードし忘れて先生にばれ、没収されたのである。

本人にとってはムカつく事に、プライベートなメールの履歴を田邊に見られ、タバコを含む内容があって謹慎になったのである。

* *

「桜下の居らんけんつまらん」

と、啓文。

言われてみればそうだなあいつはムードメーカーだから。

ハルヒ「山口の言った通り、桜下が居ないとつまらないわね」

鉄橋「あいつ意外とムードメーカーやったもんな」

キョン「確かに。その気持も解らなくもない。それと鉄橋、健八が言ってたぞ。お前たこ焼き屋のオッサンに胸ぐらを掴まれたらしいね」

「あああれマジビビったけんね」

「バカだろお前。いきなり『人生モツサリしてんだろ』って言うなんてさ。なあハルヒ」

「うん。そのオッサンが怒るのも無理ないわ」

連中にとって桜下がない2・Bはあんこ抜きのだら焼きみたいなモノらしい。

社会の授業。本来は高名が来るのだが、あいつは用事で不在であった為、代わりに村丁が自習のプリントを配りに来た。

「今日は高名先生の居らんけんプリントばしよけ」

啓文「うわあ村丁威圧感剥き出しやん」

あの啓文をも威圧するとは…さすがは生徒指導。

「名前は枠外に書いとけ。終わったら学級委員が回収して職員室まで持って来い」

と言って教室を後にする村丁。

そしたら、末さんが、

「あの先生！名前はどこに書くんですか？」

教室を出て、職員室に戻ろうとしている村丁にわざわざ訊きに行ったのだ。

末さんのこの行動を見て、俺を含む2・Bの奴等は啞然としていた。

村丁も呆れていただろう。

B組は学年の中で一番のバカクラスで問題児の集まりですか。

つたく何なんだ！厄介なのは俺1人で充分なのに。

桜下の謹慎処分が解けるには暫くかかるようだ。

長門が読んでた本を閉じたのを合図に通学鞆を持って帰る事になっている。

俺が校門を出て、下にあるロータリーを目指して歩いていると、

「キヨン」

後ろからハルヒの甲高い声が響き俺に抱きついて、

「うわぁ！ビックリするだろ。いきなり背後から」

「いいじゃんあたしはあなたの彼女だから」

「にしても寒いな。正月何する？ハルヒ」

「まだ考えてない」

俺は正月は母親の実家のソファでゆっくり寛ぐつもりだけど、人たちはどう過ごすんだろうか。

第23話：射手座の日（前書き）

またまた原作のストーリーです

第23話：射手座の日

俺は自宅の居間に掛かってる時計とVHS&DVDレコーダーのデジタル時計が2、3秒以上ずれていると気になってしょうがない。

なので2、3日毎にこまめにレコーダーの時計合わせをしている。

壁掛けのアナログ時計はミッキーマウスがモチーフなのだが、こちらも定期的に時計合わせをしないと落ち着かない。

それはそうと12月中旬の冬休み前の話だ。

映画の撮影段階で大いに暴れ、当日の上映会でも一応の興行成績を収めたハルヒ監督だったが、これで当分は満足感の余韻にひたっておとなしくしてくれると思いきや、そのテンションは文化祭から修学旅行を経て全然変化しなかった。

しかし学校側としてもそうそうハルヒの頭を要らない具合に調子よくさせようという行事を次々繰り出す程の手駒の持ち合わせはなく、やったことを言えば生徒会会長選挙くらいのものである。

正直、ハルヒは立候補したらどうしようかとヒヤヒヤしていたのだが、どうもハルヒは生徒会組織を零細文化祭同好会の仇敵であるという妙な思い込みをしているようで、自らが獅子身中の虫として生徒会に入り込み、学園陰謀物語の黒幕になるつもりはないらしいかった。

むしろその黒幕 そんなものがいたとしたらだが と率先して戦い

たいと思っっているフシさえある。

せっかくSOS団なんていうインチキな活動団体を黙殺、または見て見ぬフリしてくれてるんだ。

ありがたく立場をわきまえていればいいのにハルヒはいつでも戦う気満々、ただし何をどうやって戦う気なのかまでは今のところ俺の知る限りではない。

だが、そんな期待或いは予感とは無関係に、俺たちに戦いを挑んできたのは生徒会側の刺客ではなかった。

復讐に燃える隣人だったのである。

目の前に暗黒の宇宙空間が広がっていた。

アイマスクして馬頭星雲に迷い込んだような暗闇であり、星の輝きの一つ観測できないというシンプルなギャラクシースペースで、はっきり言や手抜き書き割り背景だ。

もうちょっと何か演出があってもいいんじゃないかと思ってもすれ、まあ何かと都合があるのだろうこの宇宙空間にも。予算とか技術とか時間とかそついった感じのものがさ。

「何も見えねえな」

と俺はぼやいた。

さつきからモニタは単なるブラックオンリーの色彩で、殆どディスプレイの故障を疑ってもよさげな雰囲気俺の目に伝えている。

この宇宙空間のどこを彷徨しようかと俺が思案したところ、虚無的な画面上の上部から突如として光点が登場、そのままずんずん前進を開始したところ、たまらず俺は意見具申することにした。

「おいハルヒ、もうちょっと下がったほうがいいんじゃないか？お前の旗艦が前に出過ぎだぞ」

それに対するハルヒの返答はこうだった。

「作戦参謀、あたしを呼ぶときは閣下と言いなさい。SOS団団長は軍の階級で言えば上級大将くらいなんだからね。こん中で一番エライの」

誰が作戦参謀で誰が閣下と言い返す前に、

「涼宮閣下！敵艦隊に不審な動きがあるとの長門情報参謀からの連絡です。いかがいたしますか？」

古泉が状況を報告した。

ハルヒの回答は、

「かまうこたないわ。突撃あるのみよ」

全くハルヒらしい指令だが、誰もがそれに従う訳ではない。

てか、誰も従ったりはしなかった。

まともにあいつらとやり合っても種子島三段撃ちに立ち向かう武田

騎馬軍団のようにズタボロにされるのは解りきってる。朝比奈さんが不安げな表情で片手を挙げ、

「あのう…。あたしはどうしたら…」

「みくるちゃん、邪魔だからあなたの補給艦隊はそこらへんを適当にウロウロしてたらいいわ。期待してないから。キヨン、あんたと有希と勇氣くんと古泉くんで敵の前衛を蹴散らさない。そしたらあたしがトドメを刺しに出るからね。敵かに！」

誰かコイツを止めてくれと言いたい。

俺はモニターに目を戻し、SOS団宇宙軍における自衛隊の位置取りを再確認した。

《キヨン艦隊》と名付けられた俺率いる1万5千隻の宇宙戦艦は、ちょうど《ハルヒ 閣下 艦隊》の真後ろを追撃する形で前線へと進発している。

その横に《古泉くん艦隊》が随伴し、一番頼りになりそうな《ユキ艦隊》は俺たちの遙か前方で索敵行動を取っていた。

補給艦を引き連れた《みくる艦隊》がどこにいるかと探せば、朝比奈さんの覚束ない操作によって開戦スタート時から迷走を繰り返している。

「わー。どっち行けばいいんですかあ？」

朝比奈さんは悲鳴に近い困惑のように上げて、いつものように困っていた。

どこでもいいです。俺たちの後ろの方をうるちよろしいてください。

画面上の艦艇とはいえども、あなたの名前が冠されたモノが傷物になるのは見たくありませんからね。

不意に、見つめる画面に変化が訪れた。

《ユキ艦隊》が放った索敵艇からの情報が、データリンクされた俺の艦隊にも伝えられてきたのだ。

味方艦隊のシンボルマーク以外黒一色だった宇宙空間に、長門の捕捉した敵部隊の位置情報が表示される。

「下がれ、ハルヒ」

と俺は言った。

「奴等は艦隊を分散させている。多分、お前の位置を探っているんだ。大將は大將らしくしてろ。後ろでふんぞりかえっていれればいいんだよ」

「なによつ」

ハルヒは唇を突き出して異を唱えた。

「あたしだけ除け者にする気なの？ズルいはそのなの。あたしだってビームやミサイルをピコピコ撃ち合ったりしたいのに」

俺は《キヨン艦隊》に微速前進を命じる傍ら、

「いいかハルヒ。お前がやられたらその時点で俺たちは負けるんだぞ。見てみる。突き出している敵の艦隊4つは雑兵どもだ。旗艦艦隊は後方で指令だけしてるんだろつよ。将棋やチェスだって王将がお供もなしで敵陣にズカズカ上がったりはしないだろう？しかもこんな序盤にさ」

「それは…そうかもね」

ハルヒは渋い顔で、だがどことなく自尊心を擦られたような表情をした。

俺を見る瞳は猫が餌をねだるときのような形をしている。

「じゃあ、あんたたちで何とかしなさい！敵の旗艦を見つけ出してバシバシ砲撃するのよ。あんな連中に負けてなるものですか。勝つよ。負けたら栄えあるSOS団の名が廃ると言うものだわ。なにより、あいつらが調子に乗るのが我慢ならないのよね！」

「閣下」「ご報告です！」

すかさず古泉と宮本ご注進に走った。

古泉「長門情報参謀の《ユキ艦隊》が敵前衛と会敵しました」

宮本「これより戦闘行動に移ります。閣下におかれましては、我々の後方に遷移し、全体的な戦術指導をお願いしたいと思考する所存であります」

宮本はともかく古泉、真剣そんな台詞だが、微笑み混じりで言われても現実性に欠ける。

何で宮本がつて？それは後ほど説明する。

「あら、そうなの」

ハルヒは古泉のベンチャラにご満悦となり、団長席で腕組みしながら腰を反らせた。

ロクな戦術指揮力もないのに階級が高いというだけで隊長をやつてる士官学校校出の若手キャリアのような顔をして、

「古泉幕僚、総長がそう言うなら、言うとおりにしてあげる。じゃあ、みんな、しっかり働くのよ。ちょこざいなコンピュータ研（PC部）の愛称。顧問は佐藤だったかな？高1のときの部活紹介でコンピュータ研の紹介で佐藤がパソコンを使ったオヤジギャグを披露してたな。」なんかギッタギタのメッタメタにやっちゃいなさい。狙うの殲滅よ。木っ端微塵に打ち砕くの」

「どこまでもめちやくちやだな涼宮」

と、宮本。

完全勝利を目論んでるようなのはモチベーションとしては正しいのだろうが、この宇宙戦には相手の迷惑もあるというのを忘れない方がいい。敵コンピュータ研だって同じ野望を持って参戦してるいることだろう。

「キヨンか…あいつ本名何て言うのかなあ」

と、蒼が有田工業のとあるクラスの自分の机の椅子に凭れ掛かって
そっぽやく。

* つづく *

第24話：SOS団vsコンピュータ研

そして俺の見る限り、我がSOS団側の勝算は旧日本軍がレイテ沖で米軍に完勝を収める確率よりもなお低いと見積もられる。

余談だが川棚にも、戦時中使われていたといわれる基地やら防空壕やらが複数個存在する。

歴史にifはないが、同数同戦力でリプレイしたとしてもコテンパにやられるのが主だった筋書きになってるに違いないね。

とつと白旗を揚げた方がいいんじゃないだろうか。

「ま、そうもいかないんだろうが」

俺は腕捲りをして、画面の敵影情報を再確認した。

さすがは長門、旗艦部隊を除いた敵艦の位置ほど網羅するデータを送ってくれている。

ここから我が軍を勝利に導くのは、大袈裟にも作戦参謀の肩書きを押し付けられる俺の頭脳と手腕にかかっているという訳だ。

どうしたものだろう。

「さて...と」

俺は刻々と変化するノートパソコンの液晶を見つめながら、ハルヒと司令官閣下の思惑通りに事態を終える方策を考え始めた。

その前に、今このような事態に俺たちが置かれている状況を説明しておいた方がいいかな。

混乱する前に考えをまとめることは人生のあらゆる岐路で有益だ。

では、そうしてみよう。

事と次第では、1週間前に遡る。

*

12月某日の冬の放課後。

修学旅行が終わって数日が過ぎ、学園に静けさが戻っていた。

てのはありふれた導入部分の常套句で、早い話が旅行前に帰郷しただけであるが、にしてもまあ無事に終わってくれただけでも有難い気分になっているのは俺だけではないと思いたい。

真正直に腹の中を打ち明けてくれたわけでもないから正式には解りかねないものの、古泉の微笑はいつもより安堵の比重が勝っているようだったし、

長門のいつもの無表情をそれを裏付けるかのようだ。

とにかくここ最近、この読書マシンがぼんやり本読んでる姿を何よりの平穩の証拠であると見なすようになっていて、

もし長門が妙な行動を取り始めたり、ましては慌てふためいたりするような光景を目にしたならば、俺はそろそろ遺書か自叙伝のどち

らかを書く用意をするに違いない。

恐らく長門にとって不測の事態なんてものは殆どないはずだから、こいつが文芸部の部室でのどかに海外SFの原書を読んでいるということは、恐るべき悪夢が間近に迫っている訳ではないという確固たる証拠と言えよう。

その一方で、未来から来たとは思えないほど過去の事をなんにも知らない美少女メイドさんは、今日も無意味な奉仕的給士女性の衣装を完璧に纏いつつ、あつつ熱の日本茶を真剣な手つきでもって淹れていた。

どこから仕込んできたのか、各種お茶つ葉に対するお湯の最適な温度という知識を入手した朝比奈さんは、湯沸かしポットではなくわざわざカセットコンロにヤカンをかけて湯を沸かすようになってい

る。
片手に持つのは温度計であり、そんなもんを蓋明けたヤカンに突っ込んで慎重な眼差しをしているメイドルックのふわふわ未来人なんてものもここで見ることができまいね。

なんか微妙に間違っているような気もするのだが、間違い探しを始めたらSOS団アジトで間違っていないものは全くない。

何もかもが間違っているからだ。

唯一正常なのは、自分が確かに存在しているというこの俺の意識のみである。

いや全くデカルト様々だ。

この文芸部室のはずがいつの間にか涼宮ハルヒとその一味の根城になってしまった異空間で、こつも正気を保ち続けてる俺は結構大物かもしれないな。

考えてみれば俺以外の連中は最初から変な背後関係を持つてる訳だし、団長のハルヒはいつまで経っても謎にまみれた存在で、まがりなりに常識的な客観性を持つてるのは俺だけというこの有り様をどう思うよ。

ボケ4人に対してツッコミが1人とは、いくらなんでも比率がおかし過ぎるぞ。

せめてもう1人俺の精神疲労を共有するような人間が居てもいいんじゃないだろうか。

大体俺だってそうそう律儀にツッコミ入れる性癖を持ってないんだぞ。

そんな気にならん時だってある。

俺だけがこんな責務を負わされるのは、不公平だと恨み節の一つでも唄いたい所だが、かと言って谷口や国木田、翼や山小屋を巻き込んでやるうとも思わない。

気の毒ではなく、能力的な問題さ。

今名前出した4人はいずれもハルヒと対抗出来るボキャブラリーと反射神経を持ち合わせてないと思うし、そついや前者3人と鶴屋さんもどつかボケてるな。

クソツタレめ、結局この世は狂ったモン勝ちか。

「うーむ」

俺は腕を組み、さも難しい事を考えてるかのごとく唸り出した。

別に今古泉としている困碁の次の一手を悩ましく思ってるからではない。

古泉の黒石を大量死に追い込むのはそれほど難易度が高くないのだ。

ゲームマニアのくせに全然上手くならない古泉のような”下手の横好き”と一緒にされては困るぜ。

そうじゃなく、この世界は本当に正気なのかどうかを俺は心配してるからだ。

正気の間人こそがそこでは狂気に侵されると見なされるだろ。

よくもまあね。そろそろ誰か誉めてくれてもよさそうなものだ。

しかしいくら誉められても絶望から這い上がれない者もいる。

それは宮崎の人だ。

宮崎はTV事情が最も悪いとされる。

民放がTBS系列のMRT宮崎放送とフジテレビ系列（日本テレビ系・テレビ朝日系とのクロス）のUMKテレビ宮崎の2局しかない。表と裏で通るらしい。（宮崎県Wikipediaより）

「ならば僕が賞賛の言葉を贈って差し上げましょうか」
古泉は格好だけは様になつて手つきで盤上に石を置き、俺の白石をかすめ取りながら微笑んだ。

所作は一丁前だがな。

目先の石ころに注意するばかりでは、数歩進んだ所にある溝にハマるといふ近未来が待ち受けてるなんてえてして気付かないものさ。

「遠慮しとこつ」

俺は答え、碁石の容器に指を突っ込んでじゃらじゃら言わせつつ古泉のまるで本心から俺を讃えてるような表情を眺め返し、さほどの喜びを得られる事もなく無気力に言った。

「お前に誉めてもろつても嬉しゅうねえよ。何か裏があるんじゃないかかと却って不安になるだけだ。言つとくが、俺はゲームの駒じゃないからな。わい（お前）たちの思つごと動くと思つたら大間違いぞ」

「『わい』つてお前つて意ですか？その『わいたち』というのが、どの僕たちなのかお聞きしたいところですが、とんでもありませんよ。涼宮さんもあんたも、全く予想できないことをしでかしてくれますからね。僕がここに居るのが一つの確かな証明でしょう」

もしも古泉が転校してこなければ、ハルヒはコイツをSOS団の一人員にしようと思わなかつただろう。

あいつにとって必要だったのは、『古泉一樹』という人間の性格や

性別や人柄のルックスではなく、転校してきた、ただそれだけの理由だ。

中途半端な時期に慌てて転入してきたのが運のつきだったな。

或はハルヒに近づく為にわざと転校してきたのかもしれないが、一応ハルヒが探し求める所の超能力者であるこいつからしたら、いつチェレンコフ放射を始めるか予測不能な放射性物質の近所にいるようなものだろうし、下手に近付きたくなっただのが本音かもしれない。

「それは過去形ですよ」

古泉は摘まんだ暮石を見つめて、

「あの当時は確かにつかず離さず監視するだけにとどめておく予定でした。ですから涼宮さんが僕の所を訪れて、その放課後にこの部屋へと連れて来られたときは肝を冷やしましたよ。おまけに宇宙人未来人超能力者を捕まえて一緒に遊ぶことなどと宣言されましたしね。もう笑っしかありませんでした」

懐かしそうに思い出を語る古泉だった。

「ですが今は違います。僕はかつて謎の転校生だったかもしれませんが、その属性は僕からは失われています。涼宮さんはそう考えているでしょうね」

じゃあ何だ。俺にしてみれば、お前はまだ謎だらけだぜ。

古泉は部屋を見回し、狭い場所を好む猫のように隅っこ椅子で読書にふける長門を見て、次にヤカンと睨めっこをしてる朝比奈さん

を見つめてから、視線を一周させて戻って来た。
つづく

第25話：続・SOS団VSコンピュータ研

ハルヒの姿はない。

クラスの掃除当番に当たってるからであり、そうでなければこんな会話をのんびりやってる筈もない。

その団長不在の部屋で、古泉は小鳥を治療しようとしている獣医のような笑みと共にこう言った。

「僕も長門さんも朝比奈さんも、そしてあなたも、今やSOS団の一員です。それ以上でもそれ以下でもないのですよ。涼宮さんはそのように考えているはずですよ」

SOS団の団員以上及び以下という分類に何の意味があるのだろうか。

「意味ありますよ。宇宙人や異世界人といった一般人類外の存在が団員以上、団員以外の一般人類が団員以下です」

谷口や国木田、翼、山小屋、鶴屋さん、俺の家族や親類は団員以下なのかよ。

あいつらや鶴屋さんを庇う訳ではないが、連中が俺以下の存在価値しかないってのを黙って頷くのは心が痛むぜ。

「非常に簡単な論理です。彼らが涼宮さんにとって重要な存在として目されているのなら、我々の一員としてここに居る筈です。いない、ということは則ち彼らは涼宮さんにとって重要でない、つまり単なる通りすがりの一般人である証明です。全くね、結果論ほど論

証が楽な論理もありません」

「異世界人はどうした？まだ来てないのか」

「結果論的に今はこの世に居ないでしょ。居たなら、偶然なり必然なりにこの部屋に呼ばれているでしょうから」

「来なくて幸いだ。違う世界なんざ行きたくねえよ」

俺が白石を降り降ろして古泉の大石を頓死させるのと、勝敗の見えてきた碁盤の横に湯飲みが置かれるのが同時だった。

「おーい、お前ら、朝比奈さんがお茶を淹れてくれたぞ」

と聞き憶えはあるもののここ最近あまり聞き慣れてない声がして、ふと振り向くと今この部屋の片隅で読書している少女とは別個体のヒューマノイド・インターフェイスという宇宙少年が立っていた。

朝比奈さんも、弱小校の野球部を就任1年目にして地区大会優勝に導いた監督のような笑みで横に立っていた。

「何やってんだ宮本」

宮本「涼宮の奴、俺のサッカー部の退部届けを勝手に提出しやがってさ、無理矢理SOS団に入部させられちゃった」

遂にこいつがアンドロイドだって事がハルヒにバレちゃったらしいな。

朝比奈さん「雁音かりがねっていうのを買ってみたんです。うまく淹れるこ

とが出来たと思っけど…。高かったですよう？宮本くんもお茶飲みます？」

「うん。折角だからもらいましょかね」

宮本もメイド服の純粹かつ可憐な美少女を目の前にデレデレしている。

もし朝比奈さんに気があったら俺はこの男を敵視しかねなくなるね。

朝比奈さん、自腹を切らせてしまっって申し訳ない。

代金は後でハルヒに請求するべきでしょう。

いやまあ、そこまで茶葉に凝らなくても、朝比奈さんの御手が差し出すものなら水道水でもエビアン以上の品質です。

「うふ、味わって飲んでね」

すっかりメイド装束が板につけてきた朝比奈さんは、古泉の前に湯飲みを置くと、慣れた所作で盆を掲げ持ったまま、残った湯飲みを長門の元へと運んで行った。

「…」

いつものように長門は無感想だが、朝比奈さんに見れば素直に礼を言われるより何も言われん方が安心するらしい。

今に至るもSOS団の宇宙人が仲良く会話する光景は見たことがな

く、というか長門は誰かと楽しげに喋っているシーンが未だにない。

まあ、それはそれでいいんだと思う。

いきなり長門が饒舌になるのもビビるし、ハルヒ並の「お前口さえひらかなければな…」なんていう女になってしまつのも少々ながら惜しい。

黙っててこれといった問題がない奴は、やっぱり黙っとってよか。

そうやって暮を打ちながら茶をすすつてると、この世にはこびる悪の存在を忘れそうになって来る。

しかし、そんな小市民的平和は長く続かず、厄介ことはまるで忘却されるのを恐れるがごとく周期的に訪問してくれるのだった。

正に天災は忘れた頃にやって来る。

ノックの音がした。

俺は顔を上げ、傷だらけで安っぽい扉を眺めてから心の準備を開始する。

何でかって？ 部屋内で漫然に過ごしている面子はハルヒを除く5人の団員たちである。

そしてハルヒはノックをするなどという殊勝の行為から最もかけ離れた位置で高笑いをしてるような奴だ。

つまりこのノックの主はハルヒでなければSOS団の誰でもないのだから、それ以外の第三者だということになる。

誰かは知らないが、どうせ何らかの厄介事を提供する為にここを訪問して来たに違いないという推理がたちどころに成り立つではないか。

いつぞやの喜緑さんみたいにさ。

「誰だあ？」

と、宮本が応対に行こうとしたら、

「いいです宮本くん。私が出ますから。はあいいただきます」

上履きを鳴らしながら朝比奈さんが応対に向かう。

すっかりこなれてきた動作であり、メイドであることを自分ですら何等疑問を覚えてないようであった。

良いこと…なんだろうか。

「あっ？」

ドアを開けた朝比奈さんは意外な人物を見たようだ。軽く目を開いて、

「どうぞ…お入りになります？」

朝比奈さんは2歩ほど後退って、何故か両手で胸を隠すような仕草

をする。

「いや、ここがいい」

と、訪問者が緊張気味の声で返し、開いたドアから首だけを伸ばして室内を改めるように伺った。

「団長さんは不在か…」

押し潰す安堵が色濃く滲み出る声を出したのは、何となく馴染みになりつつある隣室の主、コンピュータ研の部長であった。

誰も動かないのでまたしても俺が窓口になることになる。

朝比奈さんは棒立ちし、古泉は上級生を微笑んだまま見つめてるだけ、長門は本しか読んでおらず、宮本は俺に接客を委ねる姿勢になっている。

「なんですか？大西くん…それとも石川くんだったっけ」

一応上級生だ。敬語混じりで話してやるのが筋だろう。

俺は立ち上がり、朝比奈さんを庇うようにして前に出た。ん？

部屋の敷居を跨ごうともしないコンピュータ研の部長、その部長の後ろには部員たちが先祖代々成仏に失敗した背後霊のように群がっている。

どうした、討ち入りの季節にはまだ早いぞ。

部長氏は進み出てきたのが俺だったことにホツとしたのか、薄笑いを浮かべる余裕が出てきたようで、幾分背筋を反らしつつ、

「誰が大西くんだよ。石川くんでもねえよ。今の絶対わざとだろ、失礼な、まあいい、まずこれを受け取って欲しい」

何のつもりか、一枚のCDケースを差し出して来た。

受け取るも何も、コンピュータ研が俺たちに善意からなるプレゼントをくれるはずがないから、俺は当然のように疑いの眼差し。

「いや、決して物騒なモノではない」

と、部長。

「中に入ってるのはゲームソフトだ。僕たちの所が開発したオリジナルものだよ。文化祭で発表したヤツばってん、見なかったのかな」

悪かけどそが暇なかったね。文化祭で俺がいつまでも覚えてたい記憶は、軽音楽部のバンド演奏と文化祭に来てた『佐藤』って名札をつけた女の子は実は商業教師佐藤の娘である。佐藤は結婚して、その奥さんの間に生まれた子供がその娘さんっていうのと、朝比奈さんの喫茶用衣装くらいだ。

「そっか…」

部長は気を悪くした訳ではなさそうだが肩を落とし気味にして、

「展示場所が悪かったかな…」

とぼやく。

用件がただの世間話ならさっさと終わらして帰った方が良いでしょう。こんな所にハルヒが現れたら、どんな揉め事になるか解ったもんじゃない。

「勿論用件があつて来たんだ。でもまあ手短にした方がいいような気がする。では、言つぞ」

部長が何やら汗ばみながら言つ姿に、背後霊集団も毅然とした表情で頷いた。

とつとと終わらせるや。面倒くさい。

「ゲームで勝負だ!」

部長は裏返つた声で叫び、CDケースを突き付けた。

何でまた俺たちがそんなもんで対戦せんばいけんとか? 遊び相手に不自由してるなら、もっと別の部屋に行った方がいいと老婆心ながら申し添えたいところだ。

「遊びじゃない」

部長氏は徹底抗戦するつもりの方で、

「賭けるものだつてちゃんとあるぞ」

ならば古泉を差し出そう。コンピュータ研の部室で心ゆくまで勝負してくれたい。

「そうじゃなくて、君たちと勝負したいって言ってるんだよ」

頼むから勝負勝負と言わないでくれ。

ハルヒの地獄耳野郎がどこで聞いてるか解らない。

万が一、あの根拠不明の自信家がその単語が聞き付けたら…

??「うりゃあ!」

「ぐはアア」

奇怪な台詞を吐きつつ、部長の姿が誰かに蹴飛ばされたように真横にすっ飛んで視界から消えた。

「わっ!?!」「部長!」「大丈夫ですか!」

数秒ほど遅れて、部員たちが口々に叫びながら廊下に横たわる部長氏に取りすがり、俺は緩やかに視線を横向ける。

「誰? あんたたち」

爛々と光る瞳をコンピュータ研の部員たちに向け、いい形をした唇を大いに笑わせてるその女こそ、俺の彼女でもある涼宮ハルヒ以外の何者でもない。

部長氏に闇討ち同然のドロップキックをかまし、自分は鮮やかな着地を決めておいての勝ち誇ったかおである。

「悪の集団が遂に来たのね。あたしのSOS団を邪魔に思う秘密組織が何かでしょ。そうはいかないわよ。暗い闇を照らして邪悪を根絶やしにするのが正義の味方の使命なんだからね！雑魚は雑魚らしくワンショットで消えなさい！」

転倒の拍子に頭を打つたらしい部長氏は、「うつつ」「と呻いて配下の部下たちに介抱されつつ心配されている。

ハルヒの口上を聞いてたのはどうやら俺一人のようだ。

「なあ、ハルヒ」

高校以来何度目か解らないが、言い聞かせるような声で語りかける。

「蹴りを入れるのは話を聞いてからでもよかつたんじゃないか。お陰で見ろ。俺も彼らもどうしたらいいか解らないじゃないか。ゲームで勝負、までしか俺は聞いてないぞ」

「キョン、勝負事なんてのは言い出したその時から勝負なの。宣言イコール宣戦布告な訳。敗者が何を言おうと言いつきに過ぎないのよ。勝たないと聞く耳持たないわ」

ハルヒは仕留めた獣の検分をする狩人のように部長氏に歩み寄り、失礼にも失望の声を上げた。

*

続く

第26話…SOS団VSコンピュータ研3

「何よ。お隣さんじゃん。どうしてこんな奴らがあたしに喧嘩売りに来た訳？」

だから今まさにそれを説明してもらおう所だったんだよ。

機会を与えず横合いから不意を突いたのはお前だ。

「だってさ」とハルヒは唇を尖らせ、

「てつきり生徒会が部屋の明け渡し請求に押し掛けたのか思ったのよ。そろそろ来る頃合いかなあって計算してたのに。全くややこしい事しないでよね」

「だとしてもキックしていいことにはならんだろ」

俺がハルヒを諫めようとしてると、

「そつえばそのイベントはまだでしたね…」

いつの間にか戸口に立っていた古泉がひょっこり廊下に登場し、考えて込むような顔をしゃがったのでその爪先を踏んづける。余計な事を口走るんじゃない。

「うっ…卑怯なり…SOS団…」

呻き声を漏らしながらようやく立ち上がる部長氏。

脇から部員たちに支えられて、

「と…とにかくっつ、勝負はしてもらっ。どうせ言葉は通じないだろうと思っつて、文章を作成して来たんだ。これを読めば勝負の内容は解るだろう」

部員の1人が、コピー用紙の束とCDケースで、野生のライオンに生肉を与えようとしてるような手つきで持ち上げており、

「し」苦労さまです」

にこやかに受け取ったのは古泉だった。

「それで、ゲームはいいのですが、説明書は付属してるのですか？」

別の部員はまた紙束を持って古泉に押し付けた。そして小声で、

「部長、すみません。部室に帰りましょう」

「うん、そうしよう」

弱々しく頷き、

「では、そういっ事で」

用件を中途半端に告げ、そそくさ帰ろうとした部長氏の首根っこはハルヒの手によってむんずと掴まれた。

「ちゃんと説明しなさいよ。文章で誤魔化そうたってそうはいかないわよ。このあったま悪いバカキョンにも解るように台詞で解説するよつに」

おい、誰がバカだ。

哀れ、このように部長氏は文芸部室へと引きずり込まれる事になった。

残されたコンピュータ研部員たちが抗議する暇もなければ、救助する手だてもなく、そして扉は閉ざされた。

ハイテンションで、年がら年中お祭り騒ぎなハレ真っ盛りのハルヒとは違って、全校規模ではすっかりケとなる日常に回帰したと思っていたのだが、どうもコンピュータ研もハレの気分を持続させてるようだ。

しかし現在パイプ椅子に座らされ单身オドオドしている部長氏の姿は、まるでダンジョンの最深部でパーティーからはぐれた拳句リビングデッドの群れに取り囲まれたMPゼロ状態の白魔術師のそれであった。

同じようにオドオドしている朝比奈さんが淹れたお茶にも手を付けず、ハルヒによって尋問を受けている。

『SOS団VSコンピュータ研』をいつまでも引き摺るなどという部の読者から苦情があったので簡単に纏めさせてもらおう。

部長氏の要望は以下の通りだ。

1 . コンピュータ研自作の対戦ゲームで勝負しようではないか
2 . 我らが勝てば、現在SOS団の机に鎮座してるパソコンは、晴れて本来あった場所に帰還を果たす事になる。

3 . 大体だな、SOS団に多機能型パソコンは不釣り合いである。
コンピュータはコンピュータ研にあってしかるべき機材であり、強く返還を求め次第である。

4 . パソコン強奪時に部長及び部員たちが負担した精神的苦痛は、この際だから忘れてもいい。いや、忘れない。お互い忘れよう。

5 . 以上のような理由により、君たちは我々と戦わなければならない。
∴ 戦え。

古泉から回ってきた紙束にこんな感じのことが解りにくい上に読みにくい文体で細々と書いてあった。訴状と果たし状を兼ねてるらしい。

「使っていないだったらパソコン返せよ」

部長氏は言った。

その言葉に対し、ハルヒは心外そうに答える。

「あたしは使ってるわよ。きちんとね。この前の映画もこれで編集したのよ」

やったのは俺だが、

「ホームページも作ってたし」

それも俺がやった。

ハルヒがパソコン使ったことと言えば、暇つぶしのネット巡回と落書きみたいなシンボルマークを描いただけだろうが。

「そのホームページだって、半年経つてもインデックスしかないじゃないか。もう何ヶ月も更新の気配すらない」

部長氏は膨れ面である。なんとまあ、彼は定期的にあのしょぼいサイトを訪れてアクセスカウンターを回してくれる常連らしい。

またまた話変わるが、

全国民放4波化方針とは、1986（昭和61）年1月17日に郵政省（現：総務省）から叩き出された情報格差是正法案。日本全国47都道府県全てTBS系・日テレ系・フジ系・テレ朝系の4つ見れるようにする（テレ東系・独立UHFは除外）。

しかし現状はどの県も民放を4局も経営できるような人口と経済環境を持ち合わせておらず、BSデジタルの普及によってそういった意欲もほぼ皆無のようだ。

3局地帯が青森・秋田・富山・鳥取& a m p ; 島根・高知・大分・沖縄の7地区8県、2局地帯が山梨・福井・宮崎の3県、1局地帯が徳島・佐賀の2県である。

岡山&香川・鳥取&鳥根のような放送電波乗入や、沖繩に於けるTBS系列の琉球放送に業務の一部を委託しているテレビ朝日系列の琉球朝日のような1局2波が認められない限り非常に困難極まりない状況だ。

これも語っていたのは俺、キヨン。

なるほど、カマドウマの時のアレはそのせいであったようだ。我々がパソコンを活用しているかどうか余程気になって事が見える。

「でもあたしが頂戴って言った時、あげるって言ってたじゃないの。キヨン、あんたも覚えてるでしょ」

そうだった。朝比奈さんがへたり込んでるシーンはまざまざと脳裏に蘇るが、部長のコメントまで注意してなかったよ。

仮に言ったのだとしても、あの時の部長氏は心身耗弱状態だったろうから取引は無効だったんじゃないかな。

「断固、抗議する」

部長氏は本気らしい。腕を組んで口を結ぶその表情には精一杯の強がりが見えている。

半年経って諦めも付くと思いきや、段々怒りがぶり返して来たようだ。

微笑みながら頷いたハルヒ。

「まあ、いいわ。そんなに勝負したいんならしてあげようじゃないの。こっちが賭けるのはパソコンね。んで、そっちは何を賭けるの？」

「何って、そのパソコンだよ。僕たちが負けたら、それは君たちのモノにしておいて構わない」

ハルヒは平然といい放った。

「これはとっくにあたしたちのモノになってるわよ。元からあるものを貰ったってあんま嬉しくないわ。別の物を持って来なさい」

不覚にも、俺はこの言い草に感動すら覚えた。

何であるかと一旦手にした物の所有権は自分に帰属するらしい。

将来泥棒にでもなるつもりだろうか。

しかし部長氏は怒り出すどころか、引きつったような笑いを作り、

「解ったよ。君たちが勝てば、新たに…そうだな、パソコンを人数分5台進呈しよう。ノートタイプのヤツでいいかな？」

自ら賭け金を釣り上げる事を言い出した。これにはハルヒにも虚を衝かれたようで、

「え、いいの？」

座っていた団長机からぴょんと飛び乗り、部長氏の顔を覗き込んだ。

「ホントね？」

途中でやっぱやめ、なんてのは許さないわよ」

「言わない。約束する。血判状でも持つてくるがいい」

あくまで強気の部長氏であり、俺はなるほどと思う。

「あんたんとこ女子部員居ないでしょ？」

ハルヒが不思議な事を言い始めた。

「居らんけど、それで？」と部長氏。

「欲しい？女の部員」

「……いや、別に」

精一杯の虚勢を言い張る部長氏だった。ハルヒは悪い置屋の女主人みたいな笑みで口元をニマニマさせて、

「もしあんたたちが勝ったら、この娘をコンピュータ研に進呈するわ」

と、指差したのは長門の顔だ。

「女の子欲しいんでしょ？有希ならきつと即戦力になるわよ。物覚えはよさそうだし、この中で一番素直だしね」

くらさるっぞお前。何を提案しやがるんだ。相手が5つのパソコン

を賭けてるのに、こっちが1台では不釣り合いだと考えてるのか。
だがパソコン5台と長門ではスペックに開きがありすぎるぞ。ハル
ヒ、お前は知らないかもしれないが。

「……」

景品扱いされてるのに、長門は平気の平左をしている。

あまり動かない目が一瞬俺を掠め、ハルヒを通り越してコンピュー
タ研部長の顔をじっと見つめた。

部長氏は動揺の表情でたじろぎながら、

「いやあ……でも……」

「なに？みくるちゃんの方がいいって言うの？それともパソコン5
台では不釣り合い？んじゃ、副賞としてウチが勝ったらあんたと
この部を『実業SOS団第2支部』に改名しなさい」

因みに本編では北高SOS団だが、ここでは実業SOS団である。

「あ……ええと……その……、」

「わいが商品になれ」

俺は憤然とハルヒに立ち向かい、ハルヒを指差しながら言った。

つづく

第27話：SOS団VSコンピュータ研4（Final）

「いつまでも長門や朝比奈さんを備品扱いしてんじゃねえぞ。賭けるなら自分の身体を賭けたらいいじゃねえか。勝手なことぬかすな」と、俺は対して怒鳴った。このままだと長門や朝比奈さんが可哀想だから。

それはハルヒが俺にとってのとても大事な女だからこそ思っているのだ。

「何言ってるのよ。神聖にして不可侵な象徴たる存在、それがSOS団なの。最早団その物と言っても決して虚言ではないわ。あたしは『これだっ！』って思う人以外にこの職を譲るつもりはないのよ」

お前は卒業後、いやそれどころか1000年後、ひよろひよるの婆さんになってもここに居座るつもりか。

「それにね、誰であろうとも自分自身と等価交換できるモノなんか、この世のどこを探しても見つかったりはしないのよ！！」

ハルヒは理不尽な物言いであっさり俺の攻撃をかわし、無言の長門と言葉を消失した朝比奈さんを交互に指差して、尚も部長氏に迫った。

「で、どっちがいいの？」

そして俺を横目で見ながら言い足した。

「どつしてもって言うんだったら、あたしでも良いけどね」

さすがに部長氏はハルヒの戯言に乗る気はなかった。注意深く目線を追っていた俺の観察結果によると、どうも長門のあたりでしばしの逡巡があったようだが、解る気もするね。

彼は朝比奈さんの胸をわしづかみにするという磔刑に値する前科を背負っており、その犯罪行為の相手を使命する度胸はないだろう。

それに前にも述べたと思うが、谷口によると長門は結構な隠れ人気者であるらしいので、彼の趣味が無口系読書少女に合致していた可能性もある。

朝比奈さんでは気後れし過ぎからというのが理由の一つであるかもしれないが、だからと言って露骨に「女子部員が欲しい」などと表明しただけの憤りも彼は持ち合わせてたようで、まあまあ当たり前前の結果だ。

ああ、ハルヒ。すっかり性格の知れ渡った今や、こいつを指名するような男は真性のマゾか余程の変わり者なのさ。

でもってハルヒ以上に変わってもいないと思われる。だから俺も安心して放っておけるといふものだ。かくして、戦いの舞台が整えられた。

一旦文芸部室から出ていった部長氏は、手勢を引き連れて戻ってきた。

彼らの手の内にあるのはノート型パソコンで見間違えようもない。賞品の前払いとは気がいいと思っていたら、このゲームには1チームにつき6台のパソコンが必要なのだという。

コンピュータ研なのか電気配線業者なのか解らないような機敏さで、連中はハルヒ御用達デスクトップと5つのノートパソコンをLAN接続し、次々と自家製ゲームソフトをインストールしていった。

その会話の端々から、試合内容は6vs6でやるオンライン宇宙戦闘シミュレーションだということが解った。

要するにSOS団側の6台、コンピュータ研側でも6台のパソコンを用意、その全部を1つのサーバにくっ付けて対戦するようだ。俺たちは俺たちの部屋で、彼らは彼らの部屋のパソコンを使って。

勿論サーバとなるコンピュータは彼らの部屋にあるわけだ。成る程ね。

1週間の練習期間が与えられ、1週間後、対戦開始して、何度か苦戦に追い込まれるも、俺たちが勝った。

* *

5:11PM

決着がついてから約10分後、部室のドアをノックする者がいた。ヨロヨロと入ってきたのは、コンピュータ研の連中であり、中でも部長氏はやけっぱちのような口調で、

「負けたよ。完全にウチの負けだ。潔く認める。すまない。謝る。勘弁して欲しい。この通りだ。君たちを甘く見ていた。間違っていた。完敗もいいところだった」

頭を下げる部長氏の前で、ハルヒは鼻高々と立っていた。

睥睨するハルヒ閣下の視線を浴びて、コンピュータ研の部員たちは体調のよくなさそうな顔色で頂垂れる。

「あんなにスツパリと全てを見透かされていたなんてね…。僕たちが姑息な手を使っていたことは申し開きしようもない事実だ。でもまさか…。プレイの最中にゲームの中身を書き換えるとは…。信じられないばってんこれも事実か…」

部長氏はあのゲームにバグを仕込んでいたようで、それを長門が書き換えたのだ。

長門の両指のスタツカートは、どんなに耳を凝らしてもカタカタではなく、ガタガタとしか聞こえないまでになっていた。

打つのが洒落にならんぐらいに早い。印象に残るほどだ。

同じ商業科なのに感心するぞ。

虚構の別世界にいつてしまったような目で部屋を見渡す部長氏に、ハルヒは眉毛の片方だけ吊り上げて、

「何ブツブツ言ってるの？負けた言い訳なんか聞きたくないわよ。でさ、約束は覚えてるわよねえ？」

たのしそくに部長氏を足で踏みつけている。勝った嬉しさに浸るあまり、とんでもなく不自然な勝ち方をしたことに對する疑問は頭のどこを探しても見つかりそうにない。

こいつにしてみれば、勝ったもん勝ちである。

「もう文句はないでしょ？このパソコンはあたしの物で、それからノートパソコンもあたしの物よね。忘れたとは言わせないし、言ったらかなりキツツイ目にあわせるわよ。そうね、あたしムチと蠟燭持つてるから素っ裸の尻をムチで叩いて、あたしの足を舐めてもらうわ」

無体な言葉にコンピュータ研部員たちは更に首を前倒し。中には「悪くないかも」と思う変態もいた模様。それを気の毒に思ったのか、気詰まりだったのか、

「あ…、そだ。お茶でもいかがですか？」

扱い使いの朝比奈さんが立ち上がって湯沸かしポットへ向かい、苦笑を浮かべた古泉がガラクタ入れの中から紙コップのパックを取り出していた。

長門はパイプ椅子に座ったまま、ハルヒの前に整列して頭を垂れる男子生徒たちを冗談の通用しそうにない目で見つめてる。

ハルヒはなおも上機嫌に演説しているが、その部員たちは列から一人、部長氏がゆらりと離れて俺の元に近寄って来た。

「なあ、キミ」と彼は細かい声で、「あれをやったのは誰なんだい？世界でも通用しそうな凄腕ハッカーは。いや、大体想像つくんだが」

長門がゆっくりと俺を見上げ、部長氏は長門を見ていた。

まあな。どうやら部外者から見ても、こんな頭よさげな事をしそうなのは長門が最有力候補に見えるな。

「ものは相談だが」

部長氏は長門に向かって、

「君が暇なときでいい。たまにでいいのでコンピュータ研の部活に参加してみないか？いや、してくれないか？」

なんか勧誘し始めた。さつきまで炎天下に3日間放置された冷凍秋刀魚みただった目の色が活気づいている。人間心底参ってしまうと開き直るしか手だてがないかもな。

長門はモーター内蔵のような動作で顔の向きを部長氏へ移動させ、その動作を逆回転させるようにして俺に向き直った。

何を言うまでもなく、闇ガラスのような瞳に物問いたげな光だけを反射させて、じいつと俺を見つめてる。

「…」

なんだろう。

余念でも送ってるつもりなのか。それとも判断の是非を俺に委託する意思の現れなのか。

そんな顔されても（と言つてもほぼ無表情だが）困るぜ。お前への問いかけなんだ、そんなもん自分で判断すればいい。むしろ、そうするべきだ。

俺が長門を習って無言の光線を返答として送っていると、

「ちょっとちょっと、そこで何やってんのよ」

ハルヒが俺たちの間に割って入った。

「いやいや別長門と浮気してる訳じゃねえぞ。俺はお前一筋だから」

「そうじゃなくて、勝手に有希をレンタルしちゃだめよ。そういう話はまずあたしん通しなさい」

やはりデビルイアー、聞こえてたらしい。ハルヒは腰に両手を当て、いつそ誉めたい位の偉そうなポーズで、

「いい、この娘はSOS団に不可欠な無口キャラなの。あたしが最初に目を付けたんだからね。後から来たって遅いわよ。どこにもやったりしないんだから」

お前が目を付けたのは部屋であって長門ではなかったはずだが。

「いいの！有希込みでこの部屋もらったんだから。あたしはこの部屋にあるものは、喻え泡の抜けたコーラでも誰かにあげたりしないわよ」

それはあたしのだから、と誰に憚ることなくセーラー服の胸元を威勢よく反らすハルヒだった。

「まあ、待て」

俺は言った。そして考えた。

これでも俺は表情を読むことにかけては誰よりも自信持ってるつもりだ。

感情の顔面的表現をほぼ完璧に抑えてる長門だが、全く無表情でもないらしいと俺は感じていて、ループモードの夏休み事件でもそうだったし、今回のゲーム対決でもなんとなく解った。

そう、いつだったのか、図書館に誘ったときにも感じたことはある。いつまでもハルヒの監視だけでは、長門だって疲れるに違いない。宇宙人製有機ヒューマノイドインターフェイスだって、たまには気晴らしが必要だ。

「お前の好きにしろ」

今日ばかりは部長氏の肩を持つことにした。

「パソコンいじりは楽しかったか？なら、お前の気の向いたときでいい。お隣さんに行ってコンピュータをいじらせてもらえ。自主制作ゲームのバグ取りでもしてやったら感謝されるぞ。きっとこれよりも高性能な遊び道具が揃ってるだろうし」

長門は無言で、だが微細に表情を揺れ動かしながら俺を見ている。

それでいいのかと訊いてるようであり、どうすればいいのか尋ねてるようであった。

「…そう」

何がそうなのかと問い質す前に、長門はかくりと頷き、部長氏を見上げてオクターブの変わらない声でこう言った。

「たまになら」

当然ながらハルヒはごねた。

「勝ったのはあたしたちなのに、どうして大切な部員をレンタルしないといけないのよ。レンタル料は高いわよ。そうね、1分につき1,000円が最低ライン」

分給1,000円なら俺が買って出たいね。

「涼宮閣下」

お茶を啜っていた古泉が得意な笑顔を振り撒きながら近づいた。

「閣下たるもの、時には敗軍の健闘を讃えることも必要かと存じます。ただ強いだけでなく度量の広さを見せつけるのもトップに立つ者の条件の一つですよ」

「え、そうなの？まあ、有希がいいんじゃないけど…。でも！ノートパソコンは返さないわよ。あ、それからね、」

話してる最中に名案を思いついたらしい。ハルヒは部長氏を睨みながらニンマリと笑顔を作る。忙しい顔面だな。

「よかね？あんなたちは敗残兵、勝者の言うことは素直に聞かないといけないの。それが戦争つてもんよ」

お盆を静々と持ってきた朝比奈さんからお茶（雁音だったか？）をひったくってガブガブ飲みつつ、

「あんなたち全員、今後あたしに絶対的な忠誠を誓いなさい。うん、悪いようにはしないわ。あたしは実力主義だからね、頑張りようによつては正式な団員にしてあげてもいいわよ。例えば…生徒会と全面戦争するときはあたしの手足となって働くの。それまでは準団員ね」

この調子で実業の全校生徒SOS団員化を企ててるのではないだろうな、という俺の危惧も知らずに意気揚々と、

「古泉くん、勇氣くん、早速調印書を作って頂戴」

「畏まりました閣下」「畏まりました閣下」

幼少の皇帝を意のままに操る外戚宰相のような笑みで返答し、宮本と古泉の2人は早速各々自分の物になったばかりのノートパソコンに何やら打ち込み始めた。

*

そんなこんなで…

「火の〜用〜心！」カッカッ

今年もこの時期が来た。

近所の人たちが「火に気をつける」という呼びかけをする夜回りをしている。

にしてもカツカツ鳴らす木製のアレは何なんだ？ただ叫ぶだけじゃ物足りないのか。

それに続いて「マッチ一本火事の元々」という捨て台詞が一時期流
行っただな。

俺の所のブロックは明日か明後日辺りだろ。

こういったちよつとした催しをするのはサザエさん一家と川棚の新
百津地区だけでしょうか。

第28話：猫嫌いな猫の話

「鶏川、何ニヤニヤしてんだ？」

廊下ですれ違いざまに鶏川にそう訊く健八。

すると鶏川は無言で変な手の振り方をした。

実はこいつ、色んな奴からいじめられてる。

先輩にはジュースやパンを買いに行かせられたり、見てるだけで、雨の中びしょびしょに濡れながら段ボール箱の中でもがいている捨て猫のように可哀想だ。

内科検診のとき長谷川が鶏川をリンチしているとそこに堤が現れ、

「長谷川、お前何ば鶏ちゃんばいじめよつとか」

と、言いながら長谷川を蹴ったのである。

そんな中保健室から、

「何か廊下の騒がしいわね」

と、久々の登場となる高地。

*

瑠が鶏川をいじめてる所に簿記の授業の為に2・Bに訪れた中砂が瑠をとつ捕まえ、

「小坪、何ば鶏ちゃんばいじめよつとか。可哀想に」いつかはこうなるのかと思っていた。

先公がこの現場を見て黙ってる訳がない。

*

ある日の昼休み、弁当食べてる時の話である。

谷口と国木田、山小屋、それと野球部で180cm超える長身の堀外孝祐と同じく野球部、堀外とは幼なじみ(?)でやせ形の武尻洸平が鶏川にジュースを買いに行かせた。

堀外「鶏川、紙パックのブルガリアって書いてあるヤツ買って来い」

武尻「序ついでにオインとも買って来て。ブルーベリージュースね」

谷口「序ついでにいちごオーレ買って来い」

鶏川に100円ずつ渡し、山小屋や国木田もそれに便乗して

山小屋「バナナオーレ買って来いさ」

鶏川「ええ！もう無理」

と言っても、

「よかけん買って来い」

強制的だ。

「じゃ序にミルクココア買って来て」

と、国木田。

鶏川に金を渡し買いに行かせる。

俺はジュース飲みたいとは思わなかったからこの件には無関係だ
どね。

*

鶏川が5人分の各々違う紙パックドリンクを抱えて教室がすぐ目の
前にし、もう少しの所で、

「鶏川、何だそれ？こんなにいっぱい、数量からしてどうやら複数
犯みたいだな。誰にパシられたのか1人ずつ名前言え」

階段と教室の間にある廊下から歩いて来た佐藤と遭遇する。

*

佐藤が教室にやって来て、

「堀外、武尻、山小屋、谷口、国木田。ちょっと来い」

鶏川が正直に行ったのでバレてしまった。

堀外「ええ…まさか」

山小屋「…バレた!？」

谷口「何してるんだ鶏川。マジ捌けねえだろ」

国木田「マジキモい鶏川」

武尻「何で隠しとらんやつたっさ!」

各々愚痴を溢しながら教室を後にする。といっても教室のすぐそばで怒られていた。

「お前らホント卑怯だよな。自分よりも弱い立場の人間をこんな風に扱ってさ」

と、佐藤。

横から顔を伺いながら聴く限りではキレてないみたいだったが、内心でカンカンなようだ。

「じゃあお前ら後で弁当食い終わったら職員室来い」

と、佐藤が言った後、5人はゾロゾロと教室に戻って来た。

「後で職員室行かんばとか。面倒くせえ」

と、谷口。

*

昼休み、佐藤に言われた通り職員室へと赴いた。一行。

佐藤「来たか」

至って穏やかな様子だったが鶏川をパシった一行がホツとするのも束の間に過ぎず…

「じゃあそこに並べ!!」

いきなり口調がきつくなった佐藤。

5人は相当ヒヤヒヤしている。

佐藤の怒鳴り声が職員室中に響き、周りに居た先生たちもビククリしてたようだったらしい。

「どうした？お前ら。何か佐藤先生に怒られるような事したのか？」

と、そこに健八が。

佐藤「こいつらね、自分たちが飲むジュースを鶏川に買いに行かせたんよ」

「そりゃひどいな…お前ら、自分が何したかわかってんのか？ちょっと鉄槌ば下さんばな。購買部で5人居るから、パンば各違う5種類買って来てもらおうかな。ソーセイジパンとメロンパンとカレー

パンと焼きそばパンとクリームパン」

と、健八。

「そんなあ…先生、そんなに食べられるんですかと、堀外。」

「俺これでも大食いだな、パン5個でも足りんくらいぞ」

堀外「…はあ」

佐藤「当然の報いだ。お前らも鶏川に同じ事したんだぞ」

谷口「でもさすがに5個は食い過ぎでしょ」

確かに谷口の言う通りだ。

「もし食えんやつたとしても数時間ごとに分けて食えばいいんだから。で、よかか？パシりはイジメぞ。次したら村丁にチクるからなわいたちもされたらイヤやろうが。にしても谷口、お前また眉毛剃ったな」

「いや剃ってませんよ」

「嘘つけ！何か明らかに薄い部分のあつぞ」

目がいいな。健八つあん。

「先生、授業があるんでもう失礼していいですか」

と、国木田。

佐藤「そうだな。もう戻っていい」

*

「ぎゃーっやめろって！やめろって！」

鶏川は全裸にされ、水車に張り付けるといふ拷問を受けていた。

鶏川のせいで職員室に呼び出された事を怒ってる堀外・武尻・谷口・国木田・山小屋によって。

その鶏川を張り付けた水車は5人がかりで回している。

「黙れ！！鶏亮。お前がへマするせいで怒られたっぞオイたちは。お陰で明日健八にパンば差し入れせんばことなつたやっか」

と、堀外が言った後、堀外を含む5人は一斉に鶏川に唾を吐く。

そんな中山小屋はDSモードに入っており、満面の笑顔だ。

まだまだ続くなあ鶏川へのイジメは。

あの親爺猫、イジメられる為にこの世に生まれて来たといつても過言ではない。

第29話：涼宮ハルヒの戸惑い

「えー、『小切手を振り出して…』って来たら、小坪くんの得意な…」

黒板を指差す俺。

「当座預金。ってああ言つとこじ」

と、瑠。

瑠は簿記苦手の割に何故か当座預金だけは得意なので『早岐の当座預金』というあだ名を付けられている。

放課後、俺たちは瑠と数人で教卓に立ちいろんな教師の物真似をするという遊びをしていた。

中砂が声を枯らして簿記の授業をしてる所の真似をしていたのだ。

キョン「またそんな冗談を」

俺たちの本来の数学教師で不通勤状態の四根の代理として実業へ来ていてフランシスコ・ザビエルというあだ名をつけられる程禿げたあらせかつみ新瀬勝史の真似もした。

俺は中砂と新瀬の2人にあだ名を付けた。

前者は大きいタラちゃん（髪の毛が上部は髪があるのに左右の部分がツルツ禿げのおかつぱ状態である為）、後者は新瀬シスコ・ザビ

エル。

「じゃあ新瀬の真似したら言わんけん」

何て往生際の悪い奴だ。

まああいつ（新瀬）は真似されたくらいでキレるようには見えないし。

「よかやあ」「バカじゃなかとや！？喰らええハゲナントカア」
以上、新瀬の物真似だった。

ただ後者に関しては両岡が新瀬の真似と称して悪ふざけをしてたものである。

すると瑠、鉄橋は無表情でパツと見瞑想してるかのようにこちらに視線を向けている。

「…」

「どうだった？」

俺は中砂と新瀬の真似が似てたかどうか瑠に訊く。

「言わんばよね」

と瑠が鉄橋に振ると鉄橋は微笑しながら無言で頷く。

ハメられた！？

瑠「鶏川、言いに行つて来い！」

すると鶏川はまるで大会での陸上選手のように一目散に走って行く。

因みに鶏川は中学時代陸上部に入ってた。

「おい？やめろお」

俺は必死で鶏川を止める。

そんな中ハルヒは先程まで髪をポニーテールにして机に座り外の景色に浸っていたが、俺が中砂の物真似をしている間に荷物持って部屋に移動しており、長門は机に着き、無言で読書していて、こちらもさっきまで居たが俺が中砂や新瀬の本人たちにチクリに行く鶏川を必死で止めてるのを背景にSOS団の部屋へと移動した。

*

部屋に行く前に図書室へ寄った。

谷口と国木田がソファにうつ掛かり、じゃれあって遊んでる。

健八が後ろの方の本棚の前に居て、『1973読売新聞写真集』を取り出して椅子に座って読み始める。

それを含み周りで読書してる奴らを背景に、

「おい、お前らあんまり騒ぎよつたら怒られるぞ」

と、俺。

谷口「別に騒いでねえよ」

国木田「谷口がいきなりちよっかい出して来たんだ」

谷口「それより向こうを見てみる。末林の居る。キヨン、お前末林に『どこ中』って訊いて来い」

キヨン「嫌だよ。絶対キレる」

「あいつらギャーギャー喧しいなあ」

と、健八。

あいつらとは俺たちの事みたいだ。

健八は読売新聞の写真集をしまい、

「末さん、何読んでんだ？」

末さん「『銀八先生』です」

健八「んーん。スクバ乗り遅れんことせろよ」と言っ
て図書室を後にする。

*

「遅ーい。キヨン何やってたの？」

と、ハルヒ。

「いや…ちょっと図書室に行ってたから」

「まったく…次遅れて来たら罰金だからね」

ハルヒはカンカンなようだ。

長門が厚い本を黙読していて、それを横から宮本が顔をしかめながら「お前物好きだなあこんな難しい本ばっかい読んで」と言いたげにして、朝比奈さんはメイド服姿で急須のお茶を各々の湯飲みに均等に注いでいて、古泉はガイドブックを参照しながら一人将棋をしてる中俺が、

「まあそうカッカすんな。面白いサイトを見せてやる」

ハルヒに言いコンピュータ研からゲーム対戦の賞品として人数分もらった俺専用となってるノートパソコンのスイッチを入れ、検索サイトAHOO!に接続し、調べたいページのキーワードを入力する所に『堤龍徳』と入れ、Enterキーを打つ。そして出てきた中から『Wide Receiver』と表記してあるページをクリックすると、ラグビーボールのユニフォームを着用した何処の馬の骨だか知らない連中の各顔写真の中に詳しいプロフィールとセットになってる堤の写真がある。

ハルヒ「面白いサイトって?」

キョン「堤の写真があるぞ」

ハルヒ「…」

面白いと表現するにはあまりにもしょうもないので呆然とするしか他に方法はない。

「キヨンくん、しょうもない事好きですねぇ」

と、古泉。こいつも後ろから見てたのである。

「キヨンが面白いサイトがあるっつーから…期待して損したぜ」フ
ウウ

宮本がタバコをふかしながら言う。

つて！宮本こんなに荒れた設定だったか？

しかしタイトルがあれなのに非現実的な事が何も起こらねえな。

仮に起こったとしても俺は戦いません。

「キン肉マン」や「リポーン」のように作品自体は当初は思いつきりギャグだったけど途中からバトルものに路線変更するのも何やしな。

上記の2作品は（ウィークリー）ジャンプの漫画であり、ジャンプは俺の愛読書だ。

だからといって健太先生もこのまましょうもない内容のままだと山小屋にクレーム、健八からクレーム兼飛び蹴りを喰いそうだ。

しかしあのボサボサ頭Mらしいからねえ。

初めて聞いた時ビックリだったわい。

*

職員室

「ヘックションー！誰か俺の噂してるな」

と、机に座り珍しく真面目に仕事していた健八。

第30話：マラソン大会に懸ける体育教師

「（私、ヒロインなのにこのところ全く出番がない）」

と、豊嶋茜。

そんな茜も絶望してる、このクラスは授業態度が悪い奴が非常に多すぎる。

啓文は居眠りをしている。

「おい山口、居眠りしないでちゃんとしなさい」

啓文は不機嫌そうに起きる。

「うぜーマジ」「ドーン」

自分の机を蹴り倒した啓文。

茜「何するの！冬休みの課題も出さんし授業態度は悪いし…留年しても知らないからね」

俺は休み時間に入ったのを見計らいトイレに行ってたが、近くだった事もあり怒鳴り声がかつちまで響いた。

ハルヒや長門、その他の連中もビックリしてただろう。

俺は何があったのかと思い、廊下に出て2・Bを覗いた。
すると啓文は通学鞆をからい、

「死ねし。クソ」

と、茜に対してそう呟きながらこっちへ向かって来る。

俺はまだ手を洗っていなかったのでまたトイレに戻って教室に戻った。

にしても何かえらい廊下が騒がしいな。

と思い教室を出ると成人男性のものとされる怒鳴り声の下から響いて来る。

気になり階段を降りて行くと、

普通の黒髪のふさふさ頭で170〜175cmくらいの男性教師が啓文の首を掴み、

「お前どこのチンピラや!?調子乗んなよ!!」

その男性教師の名前は岩清水。

それはそうと啓文の目つきが悪かった。

岩清水がブチギレるのも無理はない。

周りには啓文の通学鞆は勿論、岩清水の所持品と思われる出席簿やら教科書やらが散乱していた。

岩清水は啓文の肩ぐらを掴み、

「ちょっと来い！」

と言って職員室に連行していった。

「何があつたんですか？」

古泉いつの間に…

俺は古泉に啓文が何でキレて帰ろうとした経緯を語り、

「啓文が帰ろうとして岩清水に見つかって怒られて職員室に連れて行かれたんだ」

と、言った。

後ろを振り向くと、西岡と上沢が居た。

こいつらもビックリしてたろう。

*

村下「何ば帰ろうとしよつとや！山口。あの人もお前ば思つて起こしてやつとるとに安眠妨害されたけんがってから机ば蹴り倒したら怒るのも当然ぞ。ガラれたくらいで…ふざけるとも大概にせろよ。」

頭出せ」

と言ってどっから電動剃刀を取り出し、

啓文「何するんスカ」

「ゴリンじゃ」

「ガー」

「うわぁー」

啓文は一瞬の内にチャラけたワックスヘアーから坊主頭へと変えられてしまった。

横で岩清水が腕を組み、見ていた。

「あーあ、啓文の奴…豊嶋もご苦労だな」

健八も呆れてる模様。

「うん。疲れるわ。それと健、私の事下の名前で呼んでもいいのよ」

「いや、よか。何かちょっと恥ずかしい。お前もたまには自分のクラスも心配したらどうだ？」

「よく言われるね。それ」

2人共眠そうにしながらお茶を啜り、啓文の方向を向いていた。

*

マラソン大会が近く、体育の授業で校舎の周辺を8周も走らされたのである。
昨夜から降り続く大雪????で見渡す限り地面を除き雪がいつぱい積もっていた。

どうしてもきつくなるから途中途中歩いていた。

口を隠し、ニット帽被った堤が彷徨してる。

途中から雪が激しく降り出して、

視界が見えにくかったな。

こんな大雪の中走るのも嫌いじゃないけどね。

そんな中見た目の通り運動嫌いの大元寺だが、

「キツイ」ハアハア

自動車科実習棟にさしかかったときにそこに堤が居て、

「大元寺、まだ5周目ばってん終わってよか」

ラッキーだったな大元寺。

*

「 という訳なんですよ」

雪が舞う中、スクールバスの車庫で全員が走り終えるのを待機していたら、そこに佐藤がやって来て、

大元寺が佐藤にさつき走ってたときの話聞かせてた。

「大元寺、お前脂肪のあるけん寒くなかやる」

と、佐藤。

「いや、寒いですって」

寒いのが苦手な大元寺。

いつの間にか溜に腕組みした鉄橋など、数人が弄り合ってる佐藤と大元寺を囲むようにして集まっていた。

宮本は古泉やA組の連中と遊んでいる。

*

皆集合し、堤の面白い言動混じりの長話を聞かされる。

「こういう天気でのマラソンもなかなか経験出来ないと思うので思い出になった事でしょう」

そして、その他注意事項を言って、

「解ったや？前瀬」「よかか？啓文」

聞いてたかどうか特定の人間に振るのだ。

堤さん、あんたが体育教師としてマラソン大会に懸ける心意気、アツバレ適である。

*

「5分遅刻」

今日はハルヒとデート。

俺は寝坊して待ち合わせ時間より遅れてしまった。

「御免、目覚まし時計壊れてなあ」

「そんな理由にならないわ！罰金よ罰金」

「まあそうカツカすんなよ。こん前ね…」

ハルヒに、体育でマラソンした後スクバの車庫で待機してる間佐藤が来て、大元寺と弄り合ってたエピソードを聞かせたのだがしょうもないので当然、

「知らないわよ。面白くない」

と一蹴。

佐世保の4カ町アーケードで買い物して、ツーショットのプリクラを撮ったのだった。

ハルヒは俺の腕にしがみ付き、

「キヨン、暫く2人で逢うのはやめにしましょ。私は一般人の中に宇宙人や異世界人が居ないか探さなきゃならなくて忙しいから、その間あんた谷口たちと友情を深めなさい」

「忙しいって…そんなしょうもない事のどこが面白いんだ？」

「キヨンも人の事言えないわよ。末林がキレて暴れるのを見て笑ったり、別にどうでもいい堤の写真が貼ってあるサイトを珍しい物みたいに見せたり」

俺こんな美少女を彼女にして我ながら罪な男だと思ってしまうけど、ハルヒはほんとに俺みたいな奴が彼氏で良いと思っているだろうか。

第31話：危ない末さんエピソード2

俺は自宅のパソコンでネットを調べてると、どっかの素人（にしては腕よすぎだ）が書いたと思われる長門がスカートを脱ぐ際に黒パノストを穿いてて尻を突き出しているものを見つけてしまった。

そんな俺が語る末さん物語をご覧あれ。

という訳で一旦時間を巻き戻させてもらう

*

実業では毎年恒例のウォークラリーという西海パールシーから峠を越えて九十九島が一望できる展海峰へと歩いて行くイベントが行われる。

その展海峰で弁当食ってパールシーに帰る際にまたあいつ…

俺は鉄橋と谷口、白星、末さんと同じ班だったが、展海峰から出て暫く進んだ坂道を下つてると末さんがいきなり後ろへ走り出し、

「お前らそんな事して恥ずかしいとは思わないのか」

後ろから来ていた3年の連中に何故か怒っている。

どうやら真似をされたらしい。

末さんがキレると暴れて危ないってのは俺たちの1つ上の代でも有名であり、中には「末林って奴マジ調子乗つとる」と末さんに対して憤りを感じてる者も居る。

未さんと唯一仲がいい白星が未さんを止めに行った。

「未さん、やめろ」

と、白星。

白星「そがん簡単にキレちゃダメって」

「うん」

未さんは低い声で頷いたがほんとに解ったのだろうか。

「少しはおとなしくしとけよ未林」

と、谷口が1人言を言ったが未さんに聞こえてたらしく、

「何だとコリア」

と、未さんが谷口の胸ぐらに掴みかかった。

*

暫く歩いてると、前に立ちはだかる3年たちが何やら未さんの話をしている中その1人が、

「未林マジウケる。暴れたときこれだからな。キヤー」
…。

ありゃ未さんキレるのも無理ないね。

末さんはそいつに向かって猛突進して行き、隠し持ってた小石の束を投げつけそのまま走り去って行った。

しかも今末さんの真似をして末さんに怒られたのはコンピュータ研の部長氏だった。

ハルヒに大切にしていたPCを奪われ、それを奪還すべく俺たちSO S団にコンピュータゲームで勝負を挑んで、そのゲームに俺たちに勝たせないようにする為のバグを仕込むも長門にそれを書き変えられ、ポロポロに負けて更にノートパソコンを人数分譲渡する破目になった何だか可哀想なお方だ。

ハルヒだけでなく末さんの事まで厄介と思ってた模様。

キョン「おい鉄橋、どうするよ？末さんの姿が見えなくなっちゃったぞ」

鉄橋「もう…だけんこの班オイの性に合わんっさ。末林の奴、オイみたいな半ヤンキーが怒ったらどれだけ恐いか思い知らせんばごたんね」

「部長さんダイジョブですか？」

と、部長氏に声をかける俺。

「今は大丈夫だけど石を投げつけられたときマジ痛かった。あいつそのまま走って行ったぞ。追わなくていいのか？」

「今からする所だ。もうどこ行ったんだ？全く」

*

一方ハルヒと長門は：ウォークラリーの班割り当てでバレー部女子のグループに放り投げられたのだ。

「ねえ涼宮さん、昨日のドラマ見た？」

と、柳橋。

余談だが柳橋は以前啓文と付き合っていたが啓文と別れる間に啓文に腹を殴られてる。かなり痛かっただろう。それに現在俺が目撃してる中では女子で唯一堤に怒られた事がある。

今後一応コイツがメインの話も書く予定だ。

「見てない。私基本テレビ見ないから」

と、ハルヒ。

他の連中もハルヒや長門に話しかけたが上記と同様である。

長門もハルヒの班だったが、ずっと無言で所持していた本を読んでいたようだ。

*

「まさか末さん、行方不明になつたらんやつたらよかけど…あつ、長原アさつき末林の通り過ぎて行かんやつた？」

と、鉄橋が、分かれ道で誘導役をしていた長原にそう訊く。

「ああ。何か末林の1人で走って行きよったバイ」

と、長原。

「そうね。ありがとう」

*

「末林の奴、事故に遭っても知らんけんな」

鉄橋は表には出していないが内心ではカンカンである。

「あんな奴が事故で死んでも俺しゝらね」

と、谷口。

また分かれ道に辿り着き、誘導役をしてた中年ながら男前な風貌の機械科教師で卓球部顧問の立石哲成たていしてつなりが居り、

「あの先生、末林っていう身長が165センチくらいでサブバッグをからってる奴見ませんでしたか？」

と、鉄橋が立石氏に訊く。

立石「うん、行きよった。鉄橋たち末林と同じ班？」

鉄橋「はい。何か3年にキレて、1人でさっさか走って行ったんです」

「そうね。末林事故に遭わんやつたらよかばってんねえ」

*

西海パールシーに着いた際、朝比奈さんと鶴屋さんの班と遭遇したので、

「あのお末林っていう身長は若干小さめだがっしりした奴通って行かなかったですか？」

と、俺が訊くと、

鶴屋さん「確かに何か男の子が1人で通り過ぎて行ったわね」

心当たりがあるようだ。

朝比奈さん「キョンくんたちが探してるのその子ですか？」

「そうです。どの方向に向かったか見てます？」

「そこまでは、はっきりと…」

気に留めてなかったようだ。

*

パールシーの近くにある海水浴場がゴール地点であり、末さんがそこに居たのである。

キヨン「あつ…鉄橋、谷口イ、末さん居たぞ」

鉄橋「ウソ!?…末さん、俺たち心配しとったつぞ」

谷口「迷惑ばかりかけるなよ」

この人騒がせめ。

末さん「あの先生、3年生が俺を苛めるんです」

「そうか。末林をいじめたっていう連中の名前解るか？」

と、言う。

丁度そこに生徒指導の村中氏が居たので、教師が、

「あつすぐそこに生徒指導の先生の居るけんが、その人に言いなさい」

「解りました」

真似されただけで苛めと判断するとは、余程の人嫌いなんだな。

「あの先生、」

村丁「何や末林」

「3年が俺を苛めるんです」

と、末さん。

「苛められた。誰にや？名前言ってみる。オイが懲らしめてやっけん」

「〇〇と と …」

と、1人1人名前を言う。コンピュータ研の部長氏の名前もあったのである。

*

俺は海を見ながら古泉や宮本と喋っていた。

「末さんのキレて暴れて大変だったからな」

と、俺。

古泉は微笑みながら

「末林くん『どこ中』と訊かれただけでキレますがそれ普通じゃありませんね」

当たり前だ。

「と言っても、宇宙人や異世界人であるというのは訳が違いますからさすがの涼宮さんも末林くんをSOS団に入部させようなんて

しないでしょ」

「あんな奴を入れるなんて断固反対だ」

「あいつの事だからキレると絶対包丁とか鉄振りハサミ回すだろ」

と、宮本。

「確かにそうだ。家庭科の調理自習のときはくれぐれも未さんを怒らせないようになきゃ」

「あれをしてみる」

*

「今日何で暴れたと？」

内川が未さんに訊く。

「何かあ3年が俺の真似をして、1年がどこ中って言った」

内川「真似したとが、3年で『どこ中』って訊いて来たとね」

*

「内川も未さんの事色々言ってるけど内心では心配してるんだ」

余談だが、国木田は前瀬たちと同じ班だったのである。

*

広場の一定の場所に集合させ、各自HRをしたのだ。

健八「という訳でウォークラリーお疲れさん。歩き過ぎによる疲れでスクバン中で寝てしまっ奴も居ると思うから注意しとく。寝過ぎさないように…以上！解散！」

意外とすぐに終わった。

「前瀬要らんよね。健八もしょーもない話ばかりするけど、それはともかくとして」

と、国木田。

「何で？」

と、俺。

「あいつキモいくせにナルシストだし…自分は何も出来ないのに鶏川に色々言ってる」

前瀬嫌われてる。

*

回想モードはここまで。

「『健太（先生）』の主人公は健太なのに全然これといった活躍してねえな」

と、ケータイ小説のネタの構想を練っていた俺。

書いてる途中、両岡やハルヒから電話がかかって来たけどね。

散々考えた結果、暫定的ではあるがかっこいいアクションもの思
い付いた。

*

「またかよ……」

仕事を終え、帰ろうとして校舎の裏に駐めてる車を目指して歩いて
る健八がワンセグでニュースを見ながら呟いた。

「ん？どうしたの？」

と、果林。

「最近カラカラに乾燥させる手口での殺人事件が多発してんだよ
と、健八。」

果林「…何それ」

この不可解な事件がある奴らが黒幕である事は今の健八たちには知
る由もなかった。

勿論俺たちにも。

第32話：砂アンドロイド

「キヨン、あたしに忠誠を誓いなさい」バチン

ハルヒがボンテージ（黒）、網タイツ、ブーツ、手袋といった露出度が高くセクシーな格好をして俺を全裸にし、逃げないように手足を縛ってケツをムチで叩いている。

実をいうと俺も今物凄く気持ちいい気分。

何故かって？

ハルヒが俺の家に来て、2人きりになって何もする事がない兼性欲を抑えられなつたのである。

今度はブーツ履いた足で踏んで来た。手足を縛られた俺はハルヒ女王様の思つまま。

「キヨンくん」

妹が入ってきた。何てタイミング悪い。

俺とハルヒは急いで毛布に体を隠す。

「何してんの？ハルにゃんと同じ毛布に潜り込んで」

「何でもない」

と、俺が咄嗟に言う。

もし俺がハルヒにSMプレイされてた事が妹にバレて、口止めしても妹の口は孫を前にした婆さんの財布の紐みたいに緩いから一発で公になっちゃう。

キョン「取り込み中だから出て行け」

ハルヒ「後でゲームしてあげるから」

「わーい。じゃあお大事に」

妹ははしやぎながら出て行った。

暫くして印刷機を起動させてる音が聞こえてくる。

どうやらまたよからぬサイトから面白いと思った同人誌小説を見つけたらしい。

無邪気に振る舞っていながらオタクでもあるからな妹は。

「危ねえ」

「こんな所見られたら赤っ恥だわ。さあ調教の続きよ」

俺に首輪を付け、ハルヒは物凄い勢いで繋いだ鎖を引っ張る。

「イタイイタイ」

「だって痛くしてるんだもん」

コイツのはかなりきつめである。

*

「最近謎の殺され方した奴が後を絶たないな」

と、テレビの画面に映し出されるニュース番組を見ながらそう呟く。

その横で妹はシャミセンとじゃれ合ってる。

*

「黒子、やってくれるじゃねえの。まああの女も自分が殺されたのが実の弟の陰謀って知ったら死んでも死に切れねえよな。でオマエ標的をどうやって殺しまくったんだい？」

と、豊嶋渉がタバコを吸いながら言う。

ラクガン「フツ俺は人や物に触れると一瞬で干からびされるアンドロイドで、属性は砂だからな。だけどみんな俺の能力の存在に気づいちゃいねえ。まあ朝倉を殺したのは表では俺の知り合いでもある長門有希って少女という事になってるけど、実は俺が殺してるからな。この、遠くから標的を狙撃して干からびさせるんだ」

と、ボウガンのようなものと一瞬で干からびさせるといふ矢を取り出し、

「砂になって消えたのがその証拠だ。まあ死んで砂になるのは漫画などでもよくある事だけど、どう違うかと言うと干からびたようになってるのが見えた。っていつてもほんの一瞬だったから有希も、そのとき朝倉に殺されそうになったキヨンって少年も全然気づいちゃいねえ」

渉「じゃあ神崎も同様の手口で…?」

ラクガン「その通り」

何てこった。朝倉や神崎が死んだのは奴らが絡んでたのか。

神崎は朝倉を知らないって言ってたけどコイツらは朝倉、黒子ラクガンって奴に至っては長門も知ってるみたいだ。

「黒子、本題に入る。一つ頼み事していいか？」

「は？何だ？頼み事って」

と、ラクガンが訊くと渉は一枚の写真を取り出し、

「この男を殺してくれ」

写真には健八が写っている。

「コイツ名前何てんだ?」「嶋田健八。教師にあるまじきズンダレでありながら人を引き付ける魅力があって生徒からは尊敬されている」

*

とあるファミレスに健八と茜と果林の姿がある。

勿論健八は、

「…こんなどっかのラブコメみたいな展開があっつていいのだろうか…」

そんな中茜はコーヒーに砂糖を入れながら、泣き出す。

「どうしたの？」

と、果林。

茜「姉ちゃんが殺された」

なんだと。

健八「まさか例の干からび殺人か？」

茜「ええ。何か随分水分がなかったようにしてたわ」

「いったい誰がこんな事を」

と、健八。

「(あつましかして)スマン、お前ら悪いばってん俺の分払っててくれ」

果林「ちよつとどこ行くの？」

健八はいきなり立ち上がり、外へ飛び出す。

*

すぐ目の前に大海が広がる港へと赴いた健八。

「確かここら辺だったよな」

と言い建物の角に身を隠し、

「ラクガンの野郎、何がしたいんだ」

健八はラクガンと初めて会って以来（27話を参照）、何度かコイツと絡んでいるのだ。

健八はアンドロイドの存在を知っている。

ラクガンが自ら砂アンドロイドと名乗って来たから。

健八の視線の先にはラクガンが数人の子分たちに話をしている様子がある。

ラクガンが拐ってきたと思われる若い女が地べたに倒れている。

彼女こそ茜の姉。

ラクガン「静かにせる野郎共。この女はまだ死んじやいねえよ」

と、茜の姉を指差して言う。

*

古泉はガイドブックを読みながら宮本と囲碁をしている。俺以外の人間と対戦だなんて珍しいな。

「最近問題になってる連続殺人事件に関してピンと来る点があります」

「何なんだ？」

「被害者となった仏さんたちの共通点は干からびているだけではなく、解剖しまとめるボウガンで刺されています。表では「何で刺されて干からびるんだ」という声が多い中僕が思うに、そのボウガンに何かあるのではないかと思うんです」

「ええ。水分を抜くボウガンなんて聞いた事ないぞ」

と、宮本。

そういった2人と長門が隅っこで読書してる以外は、俺は具合が悪いと行って帰宅部と同時に帰り、ハルヒは簿記の補習（強制じゃない）で部室には居らず、朝比奈さんは学校に来ていない。

3年は学校生活最後の期末テストが終わり、卒業式まで来なくて良いつて事になっている。

「（砂…ボウガン…）古泉一樹、宮本勇氣、聞いて。私この連続殺人の犯人解った気がする」

宮本「えっ…長門どこへ行くんだ？」

「ちょっと。あなたが首突っ込む事じゃない」

と言って長門は部室を後にする。

古泉と宮本は引き続きガイドブックを参照しながら囲碁を始めたのだった。

*

健八がラクガンの様子を伺ってる時…

誰かが健八の肩をポンと叩く。

「誰だ？オマエは…」

長門である。

「何でオマエこんな所に…キョンがいうにはハルヒがSOS団を立ち上げるのに文芸部の部屋を乗っ取った際、その部屋で読書していたオマエごとSOS団っていう組織のものにされてしまったそうじゃねえか」

「先生が物知りなのはともかくとして黒子は砂アンドロイドで、実をいうと私も有機アンドロイドだけ。あの男はある人物に親分を持つてる。あの連続殺人もそいつの命令だった。そいつが誰なのかは聞いて驚かないで」

「誰なんだ？」

健八が問い質すと、

「豊嶋茜先生の実の兄、豊嶋渉」

「何！それ豊嶋知ってるのか？」

「知らない。報せたらいろいろと厄介だから黙ってて。それに私が用のあるのはラクガン」

と、長門は歩き出した。

「おい、バカ」

健八の声を無視し、ラクガンの元へと向かう。

「ん？何だお前」

子分の1人が言うと、

「有希」

ラクガンが長門の名前を言った。

長門「オマエが謎の連続殺人の犯人というのは解ってる。黒子ラクガン、自首したらこの件は見逃してやる」

ラクガン「何を根拠にそんな事言ってるんだ？」

「干からびボウガンを使うのはオマエしか居ない」

するとラクガンはボウガンを取り出し、

「警察にチクるといけないから、有希悪いが死んでくれ」

長門の胸にロックオンし矢を放った。

長門「…」

攻撃を避け、上機嫌にラクガンのボウガンを取り上げる。が、喜びも束の間。

「へッ」ラクガンは笑みを浮かべる。

ポケットからまたボウガンを取り出す。

何と長門が取り上げたボウガンの他にもボウガンを複数所持していたのである。

「何!？」

ラクガンが放った矢が長門の胸に命中した。

「…長門〜!」

「け…健八…先生」

水分を吸い取る矢で刺され、倒れて干からびる長門に、健八が駆け寄る。

「おや、健八つあんじゃねえか」

「てめえ…」

ラクガンに対して憤りを抑え切れないでいる健八。

* 続く *

第32話：砂アンドロイド（後書き）

健八つぁんの性格は『銀魂』の主人公で銀さんという愛称の坂田銀時とそれが扮する銀八先生を意識して設定しております。

第33話：砂アンドロイド2

「怒ってんのか？」

と、ラクガン。

「当たり前だろ。ラクガン、てめえ自分が何したかわかってんのか！」

と、健八。

「何怒ってる？健八先生」

と、長門。

健八「お前大丈夫なのか？」

「私はアンドロイドだからこれくらいの攻撃では簡単に死なない」

「ばってんお前、血のドクドク出よっぞ」

「大丈夫何ともない」

*

「誰なんだ？」

と、渉。

「バカ兄貴、お前か。部下を使って姉ちゃんを殺したのは」

と、渉の拠点を嗅ぎ付けて来た茜。しかし渉はのん気にタバコをふかしている。

「おい、聞いてんの?!」

と、茜が渉の後頭部に銃口を突き付けて言う。

「聞ってるよ。お前何暑苦しくなりよつとやあ。必要ないと判断した人間は消し去るまで。それが俺のやり方だ」

第3者の足音が近づいて来る。

「あたしは死んでないよ」

と、豊嶋姉。

死んだ筈の人物を目の前にし、茜も渉も絶句している。

「……嘘だろ。お前、黒子に殺されたはずだぞ」

と、渉。

「実はこれ、iPodが盾になってたの」

と、ラクガンが放ったポウガンで思いつきり穴が空いたiPodを取り出した豊嶋姉。

*

俺はケータイ小説でヒロインの女がテロリストと化している兄によって殺された姉の仇を討とうとした矢先に死んだ筈の姉が登場するという佳境を迎えていた。そのとき、俺のケータイがけたたましく着信音を響かせる。

キヨン「もしもし」

「キヨンくんですか？」

電話の主は古泉だった。

「何の用だ」

「例の連続殺人の件なのですが、犯人は長門さんの知り合いだったんだそうです。長門さんは僕と宮本くんに『犯人解った気がする』と言ってその人を自首するよう説得しに行ったんです」

「おいそれ、詳しく知ってるか?!」

「さあそこまでは解りませんが今回ばかりはキヨンくんは手を出さない方がいいです」と、古泉。

*

「所詮はこの程度か健八」と、ラクガン。

健八の拳攻撃を見事にかわしながら言う。

「先生、奴はアンドロイドだから打撃攻撃は通用しない。だから…
これ使って」

と、長門が健八に日本刀を渡した。

「こんな物騒のモノ…銃刀法違反だぞ」

「あなたは幸運…なぜなら一部のフィクションものは銃や刀を所持
したくらいで捕まらないという法則があるから」

と、長門がよからぬ台詞を口にする。

健八「俺はこんな物必要ない。さあ警察に出頭する気がないなら力
づくで打ちのめすまでだ」

と、日本刀を長門に返還し拳一本でラクガンへ攻撃へ突進するが…

「へッこんなもの、」

ラクガンはボウガンで射撃し始める。

それを健八が素手で受け止めたのである。

「何?!」

ラクガンに殴りかかる。

口から流血するも何とか持ちこたえる。

「ハアハアお前は確かに強い。だが今はいい気になっても、干か

らびて死ぬのがオチだぞ」

「お前は金をやると言われてどんなに悪い事でも命令されたら何でもするのか？」

と、健八。

ラクガン「ああもしかして健八つあん、俺の目を覚まそうと思ってる？残念ながらこれが俺の真の姿なんだ。今まで黙ってたが」

健八「じゃあ更正させてやるよ」

ボウガンが擦り、所々出血し、半分干からびもしていたが健八はラクガンに激しい飛び蹴りを入れる。

「ぐはっ」

ラクガンは激しくぶっ飛ばされた。

*

「しかしきょうだい3人で語り合うなんて何年ぶりだ？」

と、タバコをふかしながら言う渉。

豊嶋姉「10年以上こんな事なかったから」

茜「ある部下に人を何人も殺して、渉あんたはいつからテロリスト

になつたの？」

涉「ある人を失つてからだ。人間つてのは差別される為に存在するものなんて言う世の中に嫌気が差した。俺はある人物を殺そうと思つてるんだ。誰なのか教えてやるうか？嶋田健八だ」

茜「ええ?!」

涉が言うあの人は誰かは不明だが、それを聞かされた茜は我を失つたかのごとく激昂する。

* 続く *

第34話：砂アンドロイド完結編

「てめえ」

と、茜が銃を涉に向け、今にも撃つ態勢になっている。

豊嶋姉「茜、そんなもの。いつから所持してるの？」

と、こわばった表情で言う。

*

「所詮俺は一教師なのにズンダレだ。真面目の『真』の字もねえズンダレだ。悪いか？それでも生徒思いの良い教師だ。てめえらみたいな卑怯な奴とは訳が違う」

と、健八。

「ヘツ綺麗事ばっかぬかしやがって…野郎共、行け」

と、ラクガン。どこからともなくゾロゾロと破落戸が健八に襲いかかる。

鉄パイプを所持してる奴も居れば、ナイフを所持してる奴も居た。

コイツらを相手に健八は、

「何やお前ら」

次々と殴り倒していた。

ナイフを所持した奴が、

「死ねえ」

と叫びながら突進して来るも、健八はそのナイフを素手で受け止めたのである。

勿論その手からは血が滲み出てる。

「嶋田健八、酷い怪我…」

と、長門。

「何や、これぐらい平気だ。しかもお前、俺の事フルネームで呼び捨てしやがってよ、目上の輩に向かって失礼な」

と、血を止めるべく脱いだ上着を血塗れの掌で握りしめる健八。

「嶋田健八、そんなしょーもない事言ってる場合じゃない」

「そーだな」

*

俺は公園に古泉を呼び出した。

事を最小限に抑えるにはハルヒまで巻き込む訳にはいかない。

「キヨンくん、何処に居るんですか？」

と、古泉。

俺は柱に隠れて待ち伏せており、来たのを見計らい咄嗟に古泉の胸ぐらを掴み、

「おい、長門が連続殺人犯のアジトに乗り込むという危ねえ事をしようとしてるにも関わらずお前から何で止めなかったんだ？」

「え…あの…大丈夫です。長門さんはそう簡単に殺されたりはしません。彼女は僕たちが思ってる以上に勇敢であり、この件ばかりは長門さんと黒子ラクガンという犯人の問題でキヨンくんや僕たちを含む外部の人間が手出しをすると却って足手纏になってしまうのです」

と、俺的に聞き飽きた演説する古泉。

何故か虚しい衝動に駆られた俺は掴んでた古泉の胸ぐらを放す。

*

茜は渉の人間とは思えないくらい半端ない強く、苦戦していた。

渉「どうした？俺今から黒子の所行くからお前に構ってる場合じゃないんだよね」

と言つてすぐそこにあつたマンホールをほじ空け、下水道へと入つて行きその場を退散した。

「おい、待て！黒子つて誰なの？」

と、茜も渉の後を追う。

「あの娘、あたしの為に熱血になっちゃって……てかあたし渉に手にかけてられたのに、何で渉を恨んでないの」

と、自分自身に疑問を抱く豊嶋姉。

*

「（さすがだな。『ワンダーツ』のクロコダイル並の強さだ。コイツに勝つ術はあるのか！？）」

長門が寄ってくるが、

「長門、来んな。俺に任せろ」

と言い聞かせる健八。と、健八。

「（あの男、赤口組とかナントカつていうこの辺でも最も質が悪い連中を成敗した程だからなあ『前』・健八-』の4〜6話を参照）」

と、内心で言うラクガン。

「よっ黒子」

そこに気軽に振る舞っている涉の姿が。

ラクガン「豊嶋さん」

「黒子、お前随分傷だらけじゃないの」

「おいラクガン、そいつ知り合いか？」

と、健八。

ラクガン「俺の親分的存在。豊嶋さん、コイツ俺が片付けるから引っ込んでくれ」

「豊嶋茜知ってるか？そいつの兄貴だ。それとラクガン、よく考えたらお前やつぱり必要ない。殺そうとしたヤツにいつもボロボロされちゃって…堪忍袋の緒が切れちゃった。物凄い勢いで出る水が弱点だったよな」

と、涉。その手にはホース、それも通常よりも一回り二回りジャンボ型のヤツ。

健八「そういうえば何回か見た事あるようないような記憶が曖昧ばってん、あんた何をする気だ？」

涉は口をニヤツと上に上げ、ラクガンにホースで水をふっかけた。

「うわぁ」

徐々に形が崩れ去って行き、最終的には水を含んだ砂しか残って
いなかった。

健八「酷いじゃないかあんだ。仲間をこんな簡単に…」

「仲間？笑わせんじゃねえよ。コイツは手下どころかただの駒に過
ぎなかつたんだよ。他にも手下はいっぱい居るし」

するとどこからともなく銃が撃たれて来た。

「何なんだ？」

茜「バカ兄、死ねえ」

手元にはピストル。

涉「うるさい奴だね全く」

と言いながらナイフを取り出し、茜に向かって振り回す。

「豊嶋、何でここに」

と、健八。

健八「にしても皮肉だなあ『はぐれ刑事』で藤田まこと扮する安浦
さんは同居してる娘2人とは奥さんの連れ子で本来は血縁関係がな

いのにまるで実の親子みたいに仲いい反面、あいつらのごと実の兄妹同士で殺し合ってよ」

「いや俺がこのナイフの餌食にしたいは健八くんなんだけど。今回は見逃してやるばってんいつか必ず殺すからね」

「黙れそれはこっちの台詞バイ」

「迎えのへりが来たようだ」

と、渉は上空のへりから垂らされて来たロープ状の梯子に掴まれ、その場を後にした。

「逃げるのか？降りて来い！」

と、茜がピストルを渉に向けながら言う。

「止める豊嶋」

と、健八。

茜「でも…」

「とにかく落ち着け」

「嶋田健八、豊嶋茜。この件は涼宮ハルヒには黙ってて欲しい」

と、長門はそう言い捨てて退去した。

健八「あの小娘（長門）はともかくとして、俺たちみたいな実在する人物がモデルのキャラクターやオリジナルキャラクターは一部を除いてこの話を最後に連載停止になるらしいから次話からタイトルも新しくなるし、第一何でそうなるのかっつーとこの小説は設定がめっちゃくちゃだアアアっていう苦情があつたけんがさ、そこんトコ宜しく豊嶋」

「ええちよつと聞いてないよそんな話」

と、茜。

「しょうがねえだる大人の事情なんだから」

と、歩きながらそんなやり取りをしていた2人だった。

健八の恋の行方に関しては茜？果林？佳代子？の3人の中の誰と結ばれるのかは想像に任せるとして…

佐藤氏も堤氏も面白いままで居てくれ。2・Bの連中もいつまでもバカやっててくれ。つてええ！

*

「1111は」

いつもの2・Bの教室。いつもの実業。

「キヨン、やっと起きたか」
と、谷口。

キヨン「野暮の事で申し訳ないばってんさあ、ここどこ高なんだ？」
谷口「何言ってるんだお前、実業こと佐世保波座阿土だろ。どっかで頭打ったんじゃねえのか」

キヨン「国木田は？」

谷口「あっち居るやつか」

ほんとだ。国木田は谷口の指差す方向に確かに居たし、ハルヒも俺の真後ろに居座っている。

『ハルヒシリーズ』の俺たちの担任の岡部先生、こんな事言っちゃ悪いがあんたは健八つあんの足元にも及びませんよ。

*

放課後、SOS団の部室へ直行した俺。

実業SOS団団長であるハルヒが部室にやって来るまで俺は古泉と7並べをしていた。

余談ながら川棚から佐世保の相浦まで1時間かかる。

スクールバスである。

通学だけでかなり時間を喰うのだ。

すると出入口のドアが物凄い勢いで開き、ハルヒが朝比奈さんを引

っ張って入って来た。

「みくるちゃん、さあメイドになるのよ」

と言って衣装ケースからメイド服を取り出し、朝比奈さんの来ていた服を剥ぎ、

朝比奈さん「やめてえ」「こっやって嫌がってる朝比奈さんも何か可愛らしい。

だからといって感心に浸ってる場合じゃない。

キョン「コラハルヒ、嫌がってるじゃないか」

「うるさいわね。じゃああなたがメイド服着なさいよ」

「ええ」「うわあ

*

メイド服を見に纏った俺。

これほど惨めな思いはした事はない。

「キョン、」「ハハハハハ

と、ハルヒ。この女は一応俺のマイベイブである。

古泉も苦笑いを浮かべて（と言ってても常時笑顔だから解らない）、

朝比奈さんは若干オドオドしながらも必死で笑いを堪えて、長門は無表情である。

「キヨン、勇気くん知らない？」

そういえば忘れてた。

「いや。知らん。てかあいつ何組だ？」

「忘れたんですか？僕と同じ普通科のA組です」

と、古泉。

因みに長門も俺らと同じくB組だが、朝比奈さんが何組だったか思い出せない俺はケータイを弄っていると、クレイジーガールズという携帯サイトを見つけた。俺の中学の同級生の豊嶋と高山、本内、それに若干ぼっちゃり型で二重国籍である親を持つと思われる風貌をした近杉理菜の4人の顔写真が貼られていた。前者3人に関してはハルヒが居る事からメインヒロインには定めていない。

*

健八のポケットから自動車の免許証が床に落下した。

「うわぁこれになかったら車運転できんやんけ」

慌てて拾う。

それには健八の顔写真と氏名、嶋田健八、生年月日、昭和42(1

967(年7月8日・等々記載してあった。

という訳で「ハルト担任3rd」も宜しく。

第34話：砂アンドロイド完結編（後書き）

誠に勝手ながら宮本勇気を除くハルヒのキャラ以外のキャラクターはこの第四十二話を以て登場終了となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3416i/>

涼宮ハルヒの担任

2011年1月5日03時01分発行